
フレイムファンタジー

望月シオン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フレイムファンタジー

【Nコード】

N0306F

【作者名】

望月シオン

【あらすじ】

水の星エルで、くり広げられる冒険物語…。TRPGシナリオの流れを組む古典小説ついに登場。

プロローグ（前書き）

皆さんお久しぶりです。

望月シオンです。えっと

この小説の主人公の名前もポチで、
物語のプロローグも

ほぼ同じですが…

ミューズとは、関係のない話です。

、

ですから…ミューズゼロを見た人は、
プロローグを飛ばして、

第1話から入った方が良いでしょう。

プロローグへ

プロローグ

はるか宇宙の彼方に… もう一つの太陽系がある

…

カナンとよばれる恒星のまわりには…

炎の星テジャスをはじめ… 金の星アツタル。海の星エル。風の星エ
トランゼ。土色の星プリティア。氷の星アパス。

そして… ヨミの星ラグナロクと、7つの惑星が存在した

…

。

その中の一つである海の星エル…

私達の世界の月と、同等の大きさである… この命の星から、すべて
の物語が始まる…

。

・ ・ ・ ・ ・

三十億年前…

隕石の衝突で生まれた、この星は…

二十億年前…

大量の雨で海を誕生させた…

。

生命の営みは、ゆつくりと流れ…

十億年前に海の中で生まれた植物は… やがて地上にも生まれるよう
になり

・ ・ ・ ・ ・

三億年前、霊虫と呼ばれる始まりの虫が、この地に姿を見せる。

…

そのあと霊虫は、長い時間をかけて進化し

・ ・ ・ ・ ・

二億年前、エンシエント「インセプター」と呼ばれる虫達が生まれ…
現在の生態系の元となった…

。そして・・・

それから進化した魚類や両生類が生まれる中…

そこから…海蛇の一種として、始祖竜と呼ばれる手足の無い竜へと
進化する者も現れ…

。そこから生まれた地竜、海竜、翼竜が三界を支配し…竜達の時代が
始まった

それが竜の文明の始まりである…

…
そして一億年前…進化を続けた竜達は、脳を発達させて、死を理解
した。

それから・・・
生の先に死がある事を知った竜達は、死から逃れようと…集団で知
恵を出しあうようになる…

。そして、竜達は…やがて、ある1匹の子供の竜に…それらで得た知
恵をそそぎこみ…

その竜が大人になり…成竜となると、自分達の長へと奉りあげた…

竜王の誕生である。

…
それから竜王は、2代…3代…と、長い時間をかけて進化していく

中で

…死は逃れる事は、できないが…

意思是、永遠に残せるかもしれないと、考えるようになる…。

そして…。

その知恵が、やがて魔法を生み出し…

竜王は…そのころにはもう賢くなっていた竜達に、その術を伝えた…

そしてそれが、魔法文明の始まりでもあった…。

…

意思が世界に強く影響するこの世界で…

魔法の存在を知った竜達の文明は、栄華を極めるが

…。

六千五百年前に起こった…メテオと呼ばれる隕石群の襲来が原因で、突然、終わりを迎えた…。

しかし…魔法の力で、メテオを予知していた…当時の竜王は、

絶滅を避ける為に…自分の子供を、地中深くに封印し…長い眠りにつけた

。

…

そして…それから千年後

…。

眠りについた子供の竜は、竜王の魔法のおかげで生き残り…

…長い眠りから覚めると…

しばらくは仲間の姿を捜していたが…

見つかるのは、小さな動物の姿ばかりだった…。

そして…賢かった最後の竜は、そこで…他の竜達が、もう存在しない事を知り

…
せめて自分達が積み重ねてきた知恵の証を残そうと…
土や石、あるいは、石板などに、多くの文字を刻んだという…

。そして…その竜は、猿の祖先である…ほ乳類の動物に可能性を感じて

…
魔法で、自分達が積み重ねてきた竜の知恵を…その動物に継承させた。
た。

…
たとえば今は理解できなくても…
いつか…この記憶を呼び覚ます者が現れるだろうと…遺伝子の中に
情報を残したのである…

。そして、そのほ乳類の子孫である猿人達の中に、覚醒者と呼ばれる
者達が現れ

…
…
…
二百五十万年前ごろから、類人猿の中に炎を操る
術をもつ者が増え始めた…

。それから魔法の片鱗を見せはじめた人類は…
それから…風や水…あるいは、大地の力をも…操る術を、発見する
と…

そこから、さらに…二百万年もの長い時間をかけて…それを魔法の
源流へと進化させた…

第二期魔法文明の始まりである。

それから・・・

エンシェントマジックと呼ばれる…古代魔法を生み出した人類は、そのころから…最後の竜が土や石などに書いて残した文字や記号の事を知り…

最初は、それを、読み解けなかったが

・・・

子供あるいは、その孫へと…進化をするたびに…脳が発達していく事で…それを読み解いていく

…

そして十五万年前に現れた旧人達きゅうじんたちは、死の存在を知った。

…

それから…死を知って、終わりがあるという事実を恐れた旧人達は、集会などを開き…

そこから逃れるのがためには、どうしたらいいのかと…知恵を出し合い…死を越えた存在を想像する事で、死への恐怖から解放された…

。

神の誕生である。

そして、五万年前…

限りなく現代人に近い姿となった旧人達は、カドモンと呼ばれる男を…神に選ばれた者として、自分達のリーダーにした

。

世界最初の王の誕生である。

そして、そのころから人々《ひとびと》は…死を逃れるのがための力ちからを…魔法に求め始め…

神に近づこうと…様々《さまざま》な魔術を生み出した。

…

それが第三期…

近代魔法文明の幕開けである。

それから…

魔法による、さらなる発展を求めた人類は…

自然をも変えてしまうほどの強大な力を手にするのだが…

そのために人々は、傲慢になり…

その歪んだ心が、魔法をも狂わせるようになる…

そして…それらの暴走した魔法のせいで、人々の中に…

人ではない者へ姿を変える者が現れた…

かつての人々は、その怪物達を、ケムダーと呼んだ

そして欲望にのみこまれて…ケムダーとなった人達は、

怪物の姿にならずに…ずっと…人のままでいる善人達を妬んでは、

次々《つぎつぎ》と殺していき…

そして…それが原因となり…とうとう人々とケムダー達の戦争が始まった。

…

そして…

その戦争によって、もたらされる混乱や絶滅は…

人々に、さらなる怒りや悲しみを、もたらした。

…

終わることなく、ぶつかり合う魔法は、天地を狂わせるほどにすさまじく

…

そのせいで、世界中に…地震や津波が多発するようになり…
そして、それらの事が原因で…起こった惨事は…
当時の魔法にかかわりをもつ者達を…すべて、絶滅させたといわれ
ている…

。それは、後の人々にメギドラの災厄と呼ばれた

そして…

一万四千年前に起こったといわれる、その大災害で…人類は、滅亡
したかに思われた…

。しかし当時、辺境の地で、魔法を知らずに育った人々が生き残り…
現在に生きている人達の祖先となったのである

…

プロローグ（後書き）

《後書き》

、
この小説は、日常パートと戦闘パートの二つに分かれ…

日常パートを

第1話〜第2話などと表示して…

戦闘パートを、

第1戦から…第2戦と、

タイトルに表示します。

、
私自身まだページの使い方が良く分からないため…

各1話（または各1戦）の文字数は、

通常2000から3000文字になると思います

。
ページを分ける事が出来たら5000文字程度にしたいのに…残念
です

あ…前に私の小説を見てくださった方

……

ありがとうございます。

そして……

ごめんなさい。

今まで身体を壊していたので、

新しい小説を書く事が、できませんでした

。

もし一人でも楽しみにして下さっている方が、

一人でもいたら…

本当に申し訳ない気持ちです

。

それと小説を見てくださる方

・・・

もう一度、お礼を言わせて下さい

。

ありがとうございます！

第1話〈明けの明星と宵の明星〉

《惑星エル》

地球の7分の1くらいの大きさであるこの星では、マーズ帝国と呼ばれる、軍事国が世界の大半を支配していた…

そして、パンテオン《万神殿》と呼ばれる建物の地下の一室の中で、
檻おりに閉じ込められた、コボルトがいる…

人間のような体格に身体をおおう茶色の毛並…そして雑種の犬を思わせる犬の顔…

だが…このコボルトは、かつて人間だった…

ガブリイノザ…

人間だった時の彼の名前

………

かつて、人間として生きた記憶は、今も残っている…。

しかし……

現在は、生きた実験材料として…檻の中に、閉じ込められていた

…

部屋の大きさは…周囲8メートル四方…

高さは、3メートルくらいは、あろうか

………

その中にある檻の大きさは、周囲4メートル四方で…

高さが2メートルちよつと、いったところだ…

。鉄格子^{てつこう}で、出来た檻の入り口のところには…
皿の上に盛^もったシチューが置いてある…

。コボルトは、檻の入り口のところへ行^いって…あぐらをかくと…
その毛深い両手に持って、そのままペロリとシチューを平^{たい}らげる…

すると…そのあと皿を床に戻して…

。ハアーと、ため息を吐いた…

実験動物として、このまま一生を終えるのか…

そんな考えが…薄暗い部屋の、檻の中にいる彼の頭を支配する。

…しかし

…

。ガチャリ

。部屋の入り口の扉を開ける音と共に、彼の新たな人生が始まった

…

。

薄暗い部屋の入り口が開いた音と共に光が差し込む

…

そのおかげで、灰色だったコボルトの視界が、少し明るくなったよ
うだ…。

…それから

…

???

「あつ、いたいた。

シャルム。コボルトさんがいました。」

…少女の声が聞こえる…

。 ????

「そう…やっぱりここに、閉じ込められていたんだね。」
続いて聞こえてくる少年の声…

。 コボルトが視線を、部屋の入り口の方へ向けると…
そこには、少年と少女が立っていた…

。 あぐらをかいていたコボルトは

… （これは、また…ずいぶんと幼い二人組だ…）

。 そんな事を思いながら…目の前に現れた二人の子供の姿を見ると

…

。 少女

「ん？コボルトさん、こっちを見ています」

。 少女は、肩まで届くようなフワリとした金の髪と、
エメラルドのような大きな緑の瞳が印象的で…

。 白いローブを着たその姿は、まるで陶磁とじで出来た人形のようなのである

。 少年

「やっぱり…僕らが、ここに来た理由が、まだ分からないようだね

…」

。 それに答える少年は…

耳の前の、もみあげの髪が肩にまでとどき、男の子にしては、多少伸びている銀の髪と…

大きな青い瞳が印象的で、少女と見まごうばかりの美しい容姿をしていた…

そして…その少年は、白い肌をした少女と違い…日に焼けたような肌の色をしていて

…
胸の上の所に、青い宝石の飾りがついた、黒いローブに身体を包んでいた

コボルト

（服装から見ると、どうやら…裕福な家に生まれた子供達のような…）

それが二人を見て…コボルトが最初に思った印象だった…

少女

「檻の中に閉じ込められていたんですね…。可哀想に…」

いつの間にか…檻の入り口のところに立っていた少女が…
その入り口の扉の鍵を差し込む所に…右手をかざす

…
すると…その右手のまわりが…ポワァッ…と青い光に包まれて…
それを見たコボルトが、

「やめろ。」

こここの扉は、魔法でロックされたものだ。」

…

失敗したら警報みたいなトラップが、発動するかもしれないと言っ
ても…

膝ひざの上までしかない丈たけの短いロープを着ている…その少女は

「心配いりませんよ。」

…そう言つて、微笑みながら…

右手から発する光を…フツと、おさめた

そして…青い光が消えると…

カシャン

それと同時に…ギーッと、鉄格子の扉が開き…

コボルトは、

「まさか…ロックが解除されたのか？」

…と驚いた犬の顔で、白いロープを着た少女を見て…それから

「ここをロックしたのは、俺を改造した魔導師達だ。君達は一体、
何者なんだ？」

そんなコボルトの質問に

「わたし達は、あなたと同じように…
ここに、軟禁なんきんされていたものです。」

…
そう答える少女の姿を、あらためて見ると…

90センチにも満たない身長で、本当に幼い事が…見てとれた…

（…でも…それにしては、対応が大人みたいに、しっかりしている
…）

。そんな事を思いながら、コボルトが立ち上がり

…そこから、少し歩いて…鉄格子で出来た檻の外へ出ると

…少女より足元の丈が少し長い黒いローブを着た、銀髪の少年が…
コボルトの方に歩みより

…「このパンテオンの中に、閉じ込められた者同士…仲良くしようよ」
。右手を差し出し…握手を求めてくるので…
コボルトも…

「物好きな連中だな。」
…と、右手でそれに応じると…
握手をした、この少年も１メートルくらいしか…身長がない事が分かった。

…それから…少年は、部屋の入り口の…扉の前で待っている少女と、
並び立って

…「僕は、シャルム。
隣のこの子は、シャリム。」

少年が自分と一緒に…右隣に立つ少女を紹介すると

…少女も、お腹の前に両手を組んで…
「コボルトさん。よろしくお願いします…」

。ニコリと微笑みかけるので…コボルトも
…

「俺は、ここでは、ポチと呼ばれていた…」

だからポチでいいと…自己紹介をすると…

それを聞いた少女が、

「ポチ…さん…」

独り言のように…ポツリとつぶやく

…
その時にポチも、シャルムとシャリムを見比べて

…
（それにしても、この二人…容姿がそっくりだ。
双子かな？）

、
そんな事を考えていると…シャルムが

「まずは、僕達が軟禁されていた部屋へ向かおう」

…
今後の対応について話してきたので、ポチは

…
（なぜ？わざわざ…そんな場所に？）

…と、多少疑問に思ったものの

…
「分かった…」

。 自分を檻から出してくれたこの少年を信じる事にして…
目の前にいる少年、少女と一緒に部屋を出るのだった…

《第1戦へ続く…》

第1話〈明けの明星と宵の明星〉（後書き）

《魔法陣について》

、
第1戦の魔法陣についてですが…

、
シャルムやシャリムによって書かれた魔法陣は、
…だいたいは、円の中に…六芒星と、さまざまな魔法文字が、描^{えが}か
れています…

、
その魔法陣は、敵などに、見つからないようにするために…薄い色
で、書かれています…。

第1戦へ黒いローブのポケットの中にしまったペンで書いた魔法陣

部屋を出たコボルトと子供達は、それから…しばらく地下の通路を歩き回った

・・・

ポチ

「それにしても広いなあ…パンテオンは…」

…まわりを見渡したあと、ポチが歩きながら…ポツリと、つぶやくと…

金の髪をした少女である、シャリムが、エメラルド色の目を向けて

…
「ポチさんは、パンテオンの地下の構造は、知らないのですか？」

、
そんな質問を、ポチに投げかけ…

それに対して、ポチが

「分からないな…」

実験体として、檻から出された時も…歩くところは、限られていたし…」

、
そう言つて、シャリムの質問に答えると…

それを聞いたシャリムが

「可哀想に…」

…と、表情を曇くもらせる…

それを見たポチは

、
そんな表情をしたまま、右隣を歩いている…シャリムの姿を見ながら

…
（そういえば…なんでこの子達と普通に話せてるんだ？俺…）
コボルトなのに…と、不思議に思っている…

隣を歩く、シャリムの表情が、キッと、厳しい表情に変わり

…
「…シャルム。ここから…100メートルくらい離れた場所に、人の気配がします。」

、
そうやって…シャリムは、自分の右隣を歩くシャルムと、顔を見合
わせる

…
シャルム
「見回りをしている衛兵かなあ？」

シャルム
「おそらくそうでしょう。」

、
履^はいたサンダルで、歩いているシャリムに、
シャルムが…

「確か、ここから50メートルくらい先のところに…いくつか書いた、魔法陣の1つがあったよね…」

シャルム
「そうですね…」

シャルム
「衛兵の動きは、予測できる？」

同じようなサンダルで、シャリムの隣を歩きながら…そんな事を聞いてきたので…

それに対して、シャリムが、コクリと首を縦に振ると…

シャルム

「なら大丈夫だ。

あそこの魔法陣は、足場の場所いっぱいに描いたからね…」。

ところで、何メートルまで、衛兵が近づいたら…スリープを発動できる？」

シャリム

「12メートル以内になれば、わたしの魔力でも届きます…」

シャルム

「よし！それなら魔法陣の10メートル近くまで行って、そこで衛兵達を待とう…」

…そう提案して、

それに頷く…シャリムとポチと一緒に…

提案した、その場所に急いで向かうのだった

………

《敵のターン》

シャリムの予測通り…

ポチ達が歩く場所から100メートルくらい離れた場所にいた…

《私達の世界での中世時代の、西洋の全身鎧に似た》…鎧、兜を身につけて…

右手に槍を持った2人組の兵士が

ここから50メートルくらい離れた場所にある…魔法陣の描かれた

場所に向かって来て

・ ・ ・ ・ ・

∴ 40〜30メートルと、どんどん近づいて来た∴

。

そして、通路が∴魔法陣がある場所までの一方通行となった時

∴

衛兵 A

「二人の子供？」

。

衛兵 B

「行ってみよう！」

。

薄い赤色の、円形魔法陣の描^{えが}かれた場所の上に立つ子供達のところ
まで駆け出し∴

そこで足を止めると∴衛兵の一人が

、

衛兵 B

「おい！君！」

。

すぐ近くにいる∴

少し長めの銀髪の少年の肩に、触れようと∴左手を伸ばす。

∴しかし

・ ・ ・ ・ ・

衛兵 B

「何！？」

。

衛兵の左手は、その少年の肩をすりぬけ∴

それと同時に足元から∴灰色の雲のようなものが発生する

∴

衛兵 A

「しまった！」

！
衛兵の一人が、目の前にいる子供達が…魔法で作られた幻だと、気づいた時には、すでに遅く！

。眠りの雲は、すぐに2人の衛兵の周囲にまで、浮かび上がり…

…
衛兵A

「うつ…」

。衛兵B

「くつ…」

。鎧を着た2人の衛兵は、右手に持った槍を…

カシャン！カシャン！と、足場の方へ落とし…

自身も、ドサツ…ドサツ…と、うつぶせに倒れた

…

《味方のターン》

。

その場所から…10メートルくらい離れた場所で、

その様子を見ていた…ポチと、二人の子供達は…

2人の衛兵が倒れると

…

魔法によって、人の目から見えないように隠していた姿を、スツ…

と現し

…

シャルム

「先を急ごう…」

。

少年の掛け声と共に、2人の衛兵が倒れている場所に向かって…

そのあと、そこを通りすぎようとした時…ポチは、

。（あの子達の指摘した通りだった訳か…）

白黒しか色が映らない…その目で…

眠っている衛兵達を、チラッと、見たあと…

先へ進む子供達のあとを追うのだった

・・・

。

《第2話へ続く…》

第2話へ身ぐるみはいでは、いけません。〈

その後・・・

ポチと二人の子供達は、パンテオンの地下水路などのいろんな通路を歩き…

通路を歩いたびに…

ときどき出てくる階段を、上^{のほ}ったり下りたりしながら…さらに先へ進むと

…

シャルム

「あそこだよ。」

…

とうとう、子供達の部屋が視界に入ってきた…

。

ポチ

（ん？また衛兵が2人倒れているな…）

。

ポチの視界の先には、鎧を着た二人の衛兵が、うつぶせに倒れている…

おそらく子供達を見張っていた衛兵達だろう…

。

ポチは、倒れているその2人の衛兵を見たあと

…

（しかし、装備品を一見^{いっけん}すると…

前に見た衛兵より…かなりレベルが高い物を、身につけているな…）

。

それだけ…この二人が重要だという事が…と、子供達の方を見ると

…

シャルム

「先を急ぎましょう…」

部屋の方へ進もうとするシャリム達に…ポチは

「ちょっと、先に行つててくれないか？」

俺は、ここでする事があるから…と、子供達を先に行かせると

うつぶせに倒れている衛兵を、仰向けにひっくり返してから…

身につけている…鎧や茶色い服や、下の方へ身につける物などを取り外して

そのあとポチは、脱がした茶色い服などを着ると

「そういえば…裸だったんだよな俺…」

変わりに、あんたが全裸になってしまった訳だが…

…その…こういう事…言えた義理じゃないんだが…
風邪ひくなよ！」

！
シュタツ！と、犬のような顔の小さな額の前に…右手をかざす事で…
仰向けに倒れている全裸の衛兵に敬礼して

…
子供達が待つ部屋の前に足を進めるのだった

そして、そのあと…

…
子供達がいた部屋の入り口の扉を見たポチは、驚いていた…。

！
「…ここから…出てきたのか？」

…
独り言のようにつぶやく…ポチの目に映る扉に、なんと魔法陣が描かれていたのだ。

「……………」

ぼやけた白黒テレビのような景色しか映らないポチの目でも…
雰囲気から…かなり強力な魔法陣である事が分かる

…
そんなポチのしている前で…シャリムが扉の前に立つと…
扉に向かってかざした…シャリムの右手のまわりが青く光る

……………」

その時、ポチの隣に立つシャルムが…

「間違っても…金の光は、使っちゃ駄目だよ…」

。そんな話を話すが…色の見えないポチには、何の事が…分かるはずもなく…

……………」

そのまま…カシャンと、扉のロックが解除されて…

ガチャン、ギーと、扉が開く…

。そして、先に部屋の中に入った…シャリムに続いて

、
シャルム

「行こう…ポチ」

…
シャルムのうしろを歩く…ポチの目に映ったものは
……………」

「ここが…お前達が監禁されていた部屋？」

…
部屋の中を見たポチは、目を見張った

。

そこには、高価なベッドや本棚：

料理をする石台に置かれた食材など…あらゆる物が揃^{そろ}っていた…

。（…まるで、子供部屋じゃないか…）

。しかも部屋に入ったポチが見渡せるような…広い部屋だ…

シャルム

。「まあ…お茶でも飲んでください…」

いつの間にか…が、テーブルを囲んでいた3つの椅子のうち…
二つの椅子を一つ一つ、座りやすいように…両手で引くので

…

ポチとシャルムが、

。「ありがとう。」

…と、引いた椅子に腰かけると…シャルムは

、

。「シャルムは、何にします？」

。

シャルム

。「アップルティーを頼むよ。」

、

シャルム

。「ポチさんは、何になさいますか？」

。

ポチ

。「同じアップルティーを皿の上に頼む。」

、

シャルムとポチの注文を聞いたあと

…

「かしこまりました。」

…と、部屋の奥の方に移動すると

…

そのシャリムの行動が、あまりに手慣れたものだったので、ポチは

…

（本当に軟禁されていたのか？）

。

自分達の部屋じゃないよな…と、台所の方へ向かう、シャリムの後ろ姿を見て…思っのだった

・・・

。

《第3話へ続く…》

第3話へ寝室までついてる子供部屋

《2話の続き…》

子供達が軟禁されていたらしき場所の中で、ポチが
「さてと…」

あらためて、少年の方に目を向けると

…
シャルムは、目を離しているあいだに…

ビスケットみたいな物が、何枚も乗せてある皿を用意していた…

シャルム

「食べていいよ。」

、
それを見て、ポチが

（シャルムといい…

子供なのに…何でそんなに手際が^{てきわ}良いんだ？お前らは…）
などと…考えていると

…
シャルム

「お茶の用意が出来ましたよ。」

…
白いローブを着た少女が、手際の良い動作で、2人のマグカップと…
ポチに頼まれた皿を^{くは}配っていく

…
円形のテーブルの上で…シャルムのカップは、
シャルムのカップの左隣にあり…

ポチのアップルティーを入れた皿の向かい側にある

…
つまり席に着くと…シャリムとポチは、向き合つようになっていた…
。

そして、シャリムが

「お茶でもしながら…お話ししましょうね。」

…そう言つてから

…
お茶を乗せていた、お盆ぼんを置いて…椅子に座ると…

ここに至るまでの殺伐さつぱつとしたものが消え…

ほのぼのとした雰囲気ふんいきが、ただよう…

。

ポチ

（…たぶん…この子のせいなんだろうな…）

。

左手にマグカップを持って、お茶を飲んでいる少女を見ながら…
…そう思う…

。

ポチ

（しかし…）

…

ポチには、他にどうしても気になる事があつた…

。

ポチ

「この皿、重いけど…

…いったい何で出来てるんだ？」

、

それに…白黒でばやけた視界なので、見間違いかもしれないが…

ポチには、皿がキラキラしたもので…出来ているようにも見える…

。

そして、それについては…シャリムの隣の席に座っていた、シャル

ムが

…「ああ…実は、その皿、金で出来ているんだ。」

…「そう言うので

、
ポチ

「金で？なんで、そんな高価な物が…」

、
席に座ったままで…不思議そうに、ポチが尋ねると…
シャルムは、チラツ…と金の髪の少女の横顔を見て

…「実は、シャリムは…右手に宿る金の光を解放すると…
石化のように…触れるものすべてを…金に変える事が出来るんだ。」

、
ポチ

「うおふ？」

、
話の内容が不思議すぎて…よく分かってないポチに、シャルムは

…「やっぱり…口で言っても分からないか…」

…「そう言ったあと

…
右手に持ったマグカップを、ポチの右手に手渡して、重さを確認させる…

…
今後は、ポチからマグカップを返してもらって

…
その返してもらったマグカップを…さらにシャリムの右手に預けたあとで…

「シャリム…」

。

シャリムに声をかけて…それでシャリムが、

「はい。」

………

両目を閉じて、意識を集中させると…

なんと、シャリムの右腕のまわりに黄金の光が輝くではないか…

。

そして、その金の光が…シャリムの右手から、フツ…と、収おさまった時

…

シャルムは、シャリムに預けたマグカップを返してもらって

…

シャルム

「ほらっ、持ってみて」

、

その返してもらった、マグカップを、もう一度ポチの右手に手渡す

…すると

………

ポチ

「うおっ！？確かに重くなってる！」

、

それに、白黒のポチの視界にも…

マグカップがさっきより…ピカピカになっているように見えた…

。

シャルム

「これが…僕達が、ここに軟禁されていた理由の一つさ…」

。

椅子に座ったままで話す、シャルムの隣で…

少し疲れた顔で、シャリムが

、

「でも…あまり大きな物は、金に変える事は、出来ないし…

ほかの魔法より何倍も魔力を消費するから…

連発できない欠点があるんですけどね…」

そう話してから…左手に持った自分のマグカップに、口をつけて…それをカタンと、テーブルの上に置くと

「それより…ポチさんは、どうして？この牢さうに、閉じ込められていたのですか？」

ポチが何故あそこに、閉じ込められなければいけなかったのか？その理由が知りたいと、聞いてくるので…

ポチ

「もう気づいてるかもしれないけど…」

実は、俺は自然に生まれたコボルトではなく…

かつては、ここから…はるか南の方にいた部族の人間だったんだ…」

シャリム

「それがどうしてコボルトに？」

…そんなシャリムの問いに、ポチが

「騙だまされた…」

…それだけ言つと…

シャリムは、すべてを悟ったように…両目を閉じながら

「わかりました…」

…それだけ言つて…両目を開くと

…もうポチに…それ以上、尋ねようとは、しなかった

《第4話へ続く…》

第4話へシャルム。シャリム。まぎらわしい名前でゴメンナサイ

《3話の続き》

…
円形のテーブルの席の一つに座っていたポチは、
ペロペロと舌を使って…自分の両手で持った皿の中のアップルティ
ーを全部、飲み干したあと…

その皿を、コトン…と、テーブルに置くと…

シャリムが、それを、お盆に乗せて、片付けてくれた…。

………

そして、台所まで…お盆を運^{はこ}んでくれた、シャリムが、ポチの向かいの席に着くと…

座ったシャリムの隣の席にいたシャルムが

「それにしても…ポチが、閉じ込め^こられていた部屋から…この部屋に来るまで…

出会った衛兵が二人つて…なんか出来すぎてる気がするなあ。」

…

そう話すので、それを聞いていたポチも…

「確かにそうだな…」

シャルムの話に賛同すると…

ポチの向かいの席に座る、シャリムが

「別の可能性もありますが…」

この場合…まさかここから脱出する事を…考えている人なんていないって…

油断があるのかもしれないね…」

。

そう言ったあと…ポチの方を見て

…

シャリム

「じやなきや他にほかにとら囚とらわれている人がいるなんて情報を、わたし達に教えるはありますか…」

…地下の部屋の一つに、コボルトの試験体がいる…

シャリムの話では…

これは…シャリム達に関かわっている人達から、教えられた話の一つらしい…

そして、それにしづくように…シャルムも

…「確かにポチの事は、彼らに聞いていた…」

。そう言っているところを見ると…

ポチ

「俺の事を、他人に話すという事は…」

。俺自身は、もう用済もちずみだと言う事が…」

子供達が助けにこなければ…いずれ処分されていたのかもしれない

…そんな自分自身の境遇ききうを思おもったポチは、哀愁あいしゅうを、おびた犬の顔でうつ向く

…シャリムは、そんな自分の気持ちを…表情として出す事のできない…
…コボルトの想いをくみとり

…「ポチさん…」

、緑色の大きな目を曇らせていた…

。

銀の髪のシャルムは…そんなポチとシャリムの様子を見比べたあと

…

「だからさ…」

グツ…と、右の拳^{こぶし}を握って

…

「僕らと一緒に、ここにいる奴らに、一泡^{ひいあわ}ふかせてやるつよ。」

…と、言葉を続ける

。

その迷いのないシャルムの青い目の輝きは、まるで…サファイアの
ように美しかった…

。

ポチは、そんなシャルムの青い目を見て

…

(こいつ…)

子供のくせに良い目をしている…と、頭の中で、つぶやいていると…
ポチの向かいの席に座る…シャリムが

、

「言いたい事は分かりますが…まずは、部屋の中では、サンダルを
脱いで下さい。」

、

そう言って、それまでの話の流れに水を差すので…

それで、納得のいかないシャルムは

、

「くそう…せっかく燃える話の展開にもっていかうとしたのに。」

…と、くやしそうに言ったあと…ポチの方を見て

、

「ポチだつて

靴^{くつ}を脱いでないんじゃ…」

ないの?と、言おうとした時…

隣の席に座るシャルムが

「ポチさんは、足に何も履いてません！」

…そう言うので、シャルムは、

「それはそれで…問題なんじゃ…」

。そうシャルムに言うと…今度は

「い…いいんです!!ポチさんは…」

…そんな答えが返ってきたので…シャルムが

「ええ!!何?その差別!？」

…抗議の声をあげると…それに対してシャルムが

「もともとシャルムは、女の子みたいな姿をしていますから…」

サンダルとかより…靴とか履いた方が、男らしくて…良いんじゃないでしょうか？」

…と、そう言うので

、それを聞いて…シャルムの向かいの席に座るポチが

「いやいや…それは関係ないんじゃないか?と、考えているうちに…」

シャルムの隣の席から、シャルムが

「男女差別だ！」

…と、抗議の声をあげるの…それには、ポチも

…「言葉の使い方、間違ってるぞ。お前…」

…でも、こういうところは、年相応なんだな…と、思いながらも

…
ポチ

「話を戻すが…脱出を考えるのは、良いとして…
この部屋での会話とかは…何らかの方法で奴らに監視とか…されて
る可能性も、あるんじゃないのか？」

…
敵にも魔法使いとかいるだろうし…と、
思っていた事を、シャルム達に話すと

…
「その心配はないよ。」
…と、シャルムに

、
「よく思いだしてみてよ。この部屋の扉に、描かれていた魔法陣や、
魔術文字の位置…なんか変じゃなかった？」

…
そんな事を言われたので…その時の事を、思い出してみると

…
ポチ
（そういえば…魔法陣も、他の記号も、ずいぶん下の位置にあった
ような…）

、
「そこまで考えて…
「まさか？」

！
ハッ…と、ある事に気づく…
。

ポチ
「部屋の扉に魔法陣を書いたのは…」

、
シャルム

「そうだよ。僕達さ…

魔法使いが魔法を使って…外部から、この部屋の中を監視したり…盗聴しようとした時に、嘘の情報が流れるように…細工したんだ。」

…だから…魔法使いが、この部屋の中を、見ようとしても…

扉に描かれたの魔法陣ちからの力で…現実とは違う部屋の中の風景を見せられ

…魔法の力で、部屋の中の会話を聞こうとしても…

部屋中に流れている魔法陣の結界の力で、嘘の会話が聞こえるようにしてあるのだと…シャルムは話し

…

「それに…こうしていれば、僕らが部屋を空けていても…僕らより魔力が高い人じゃない限り…

部屋に入る事が出来ないからね…」

。そんなシャルムの話聞いて…ポチは

、

「この部屋の扉には、そんな秘密が…」

…と、言うと同時に…頭の中で

…

（なるほど…どうりで俺達とは、待遇たいぐうが違う訳だ…）

。

パンテオンの連中にとって…

この二人の子供は、自分などより…はるかに重要な存在なのだろう

…と、あらためて思うのだった

…

。

《第5話へ続く…》

第5話《文殊の知恵》

二人の子供が、軟禁されていた部屋の居間で、ポチは、円形のテーブルの周囲にある…3つの椅子の1つに腰かけていた…

ポチ

「他に仲間は、いないのか？」

ポチの質問に、向かいの席に座るシャリムは、いいえ…と、一度、残念そうに首を横に振り

「前から少しずつ…このパンテオンの中を探索してみたのですが…見つけられたのは、ポチさんだけでした…」

もう処分されたのかもしれない…と話す、シャリムの表情は暗い…

ポチ

（俺の事にしても、大した戦力にならないから…子供達に教えたのかもしれないし…）

それを思うと、ポチは

「しかしなあ…」

お前達が、いくら強大な力ちからを持っていたとしても…たった3人で何が出来るというんだ…」

2人の子供の考えが…あまりに無謀むぼつに思えて仕方なかったが

そこで、シャリムの隣に座る銀の髪の少年が

「だからだよ。」

…と、その青い両目にポチの姿を映し

…
「普通の人達なら… たった3人で何が出来るって、油断すると思うんだ」

。そこにつけいる隙^{すき}があると… シャルムは言うけど

…
ポチ

「逆転の発想だな。」

…
その事は、ポチも考えていた事だ。

しかし… 考える事と実行する事では、意味が違ってくる…

いくら相手が油断すると言っても… それは、可能性の問題で…
実際に、そうなる保証は、どこにもないし…

もしかしたら連中の中には… 三人で行動を起こす事を予想している者もいるかもしれないのだ。

…
ポチ

（これは… 間違いなく、命がけになるな…）

。この黒いローブを着た少年は、命が惜^おしくないのか？… と内心、驚きもするが…

。そんな事を考えるポチの左肩に、ポン… と、誰かの手が触れる…

気がつく… いつの間にか… 向かいの席に座っていたはずの白いローブを着た少女が、ポチのうしろに立っていた。

…そして

…
シャリム

「大丈夫ですよ。ポチさん…」

。ポチが、顔をうしろに向けて…少し見上げると…

背後に立つ…金の髪の少女は、両目を閉じて…ニコリと、微笑み…

そのあと、すぐに閉じていた、両目を開くと…

シャリムは、ポチの左肩に置いた左手を離し…

。「それに脱出方法については、ある程度…わたしの頭の中で、出来上がってるんです。」

…そう言つと…隣からシャルムが

、
「そういえば、シャリムは、ちよくちよく部屋の外に出ては、こここの構造を、調べていたもんね。」

…そう言つてから

…
うしろに向いた犬のような顔を、正面に戻したポチと…
そのうしろに立つシャリムに向かって

、
シャルム

「あとは、どう実行するか…三人で考えていこう…。」

…
言葉を続けるように、そう話し…

それを聞いたシャリムも

「3人集まれば文殊の知恵ですね…。」

…
そう言つたあと、近くの棚の方に向かうと…

そこから…紙を丸めたものを持って来て…

それから…それをテーブルの上に、広げると…そこには…

シャルムが見てまわった…神殿の構造を書き記した^{しる}ものが、広げられ

…それを見たポチは、

「こいつは、すごい…」

…と、素直に驚く

。ポチが驚くのも無理はない…

その時、見たり聞いたりしたものを…細かく書き記されたその地図のようなものは…

とても、幼年記の少女が書いたものには、見えなかった…

。そして、テーブルの上に広げられた地図のようなものの一点に…

「この場所…」

シャルムの左の人差し指の指先が当たる

…「神殿の地下にある…この部屋には、

昔…他の世界に行くために使った、秘密の通路があるらしいんです」

。シャルムは、その話をしたあと

…「たぶん地下通路は、暗いから…

たいまつのようなもので、通路を明るくする必要があるのでしょね

…」

。そんな話を話すので…

ポチは、

「どうするつもりだ？」

…と、聞いてみると

…それまで、シャルムとポチの話を聞いていたシャルムが

「棚の中に置いてある水晶球の一つに…僕が、ライトの魔法をつめ込んでみるよ。」

それが出来れば…長時間、発光できるから…安心だと思う。」

…
それに…もし暗闇の中で、たいまつ^{たいまつ}の炎をつけた時に出来る、明かりの範囲を考えると…

たいまつが三人分、必要になり…

3人全員が、片手を使用できなくなる

…
それでは、もし…怪物と戦闘になった場合に…不利な状況に追い込まれてしまう…

ポチ

（それに対して、シャルムの言う…光の球が完成すれば…

それを持つ者の手は、ふさがるけど…

他の二人は、何も持たずにすむ。）

…
その利点は、大きいな…と、ポチが考えていると

…
シャルム

「ただ、そのためには

発光量と使用時間の長さが問題となってくる…」

。そのためには、かなりの光の量と、その調整が必要となってくるため…

しばらく時間がかかりそうだと、考えたシャルムは、椅子から立ち上がると

…
「よし！これから僕は、光の水晶球の製作に入る！

シャルムは、長旅に備えて、
出来るだけ多くの携帯食を作つてよ。」

シャルムにもそう話し…

それに対して、シャルムは、

「分かりました。」

…と、うなず頷くと…すぐに台所の方へ向かったので

…
そのあと、水晶球を取りに…棚に向かおうとする、シャルムに…今
度は

ポチ

「俺は、どうすればいい？」

…と、茶色い服装をした、ポチが聞くと…

シャルムは、ポチの方へ振り向き

…

「ポチは、居間の中にあるものを…

光の球を作るのに、邪魔にならないように…

部屋の端にでも寄せておいてよ」

。

ポチ

「分かった。」

…

シャルム

「あと、それが終わったら…

僕が指示したものを持ってきて…

それも終わったら、本でも読んでいいよ。

作るのに、けっこう時間が、かかりそうだからさ」

…

そう言うてから、棚の方に向かって…水晶球を取りに行くシャルム

を見て…

ポチは、

（これでは、どちらが子供か分からないな。）

…と、頭の中で笑うのだった

．．．．．

。

《第6話へ続く…》

第6話へ八千公伝説

それから・・・

シャルムが光の水晶球を作っているあいだに…ポチは、室内を片付けていた…

。

…とはいえ…手間取りそうなものは、子供達の物を置いた棚や、本棚ぐらいなものだったので…たいして時間が、かからなかった…

。

そのあと…ポチは、テーブルの方を見てから

…

テーブルの上に置いた台のようなものを使って、固定してある水晶球に…

右手から発する魔法の光を吸収させている…シャルムに向かって

…

「終わったぞ…。」

…と、一言告げると…

シャルムは、

「早かったね。」

…と、そっけなく答えたあと…ポチに、

「じゃあ、本でも読んでなよ。」

…そう言うので

…

ポチは、

（…確かに、寝るのには、まだ早いな。言われた通り…本でも読むか…）

。

本棚のあるところへ移動してから…少し、しゃがんで…
それから、棚の中に置かれている本を見てみると

………

（おっ！犬客商売があるな…

でもこれ…もう読んだ奴だ…）

他に何かないのかな…と、さがしてみると…

一冊の本が、ポチの目に止まる…

それから…ポチは、

「忠犬密教入門…」

本棚から、その本を抜き出したあとに…

立ち上がって…その本に、さつと、目を通してみると…

………

「どれどれ…忠犬密教とは、180年前…

【ハチ】というコボルトが、何十人も弟子に説いたと言われる教

えの事である…」

さらに目を通してみると…宗教的な内容の他に…

修犬道と言われる魔術的な力ちからの事や…

100年前から、秋田犬派や土佐犬派などの…さまざまな流派に分
かれていた事が書かれていた…

ポチ

（流派か…

こうしてみると、コボルトも…けっこう家柄とか血統を気にする奴
が多いんだな…）

その証拠にコボルトの王が…コボルトキングと呼ばれている事は…
誰もが知る話だ…

ポチ

「眠くなってきたな…」

ポチは、ふあつ…と、その大きな口で、欠伸あくびをしてから…
ボタン…と、本を閉じると…

そのあと、しゃがんで…本棚の下の方の棚に、本を戻してから、立ち上がり

…
そして…

（…さて…これからの事を少し考えるか…）

…そう思ったポチは、

これからの事を…少し考えてみる事にした

…

…まずポチは、2人の子供のように…魔法は使えない…

（だから俺の役目は、光の球を持つ事や、子供達をサポートする事が中心になるだろうな…）

いや…もし戦闘などに、なったら…

身を守るのが精一杯で、子供のサポートすらも難しくなるのかもしれない…

。（せめて、子供達の…足を引っ張らないようにしないと…）

そう考えたポチは、居間の中で正座しながら…

もしも地下通路で、敵との戦闘になった時…どういつ行動をとるべきか…頭の中でイメージする

…
そんなポチの様子が…

円形のテーブルのところで座る、シャルムの目に映ると…

シャルムは、右の手の平の前から放つ魔法の光を…

テーブルの上に置かれた水晶球に吸収させる作業を、一旦^{いったん}止めて…

それから…椅子から立ち上がると…

石で出来た台の上で、料理しているシャルムのところへ行って…

シャルム

「ねえ、シャルム。

ポチが見た事もない座り方で考えこんでるようだけど…」
あれって何？と、シャルムに聞くと

…
シャルムは、一旦、料理をする手を止めてから…ポチの方を見て

…
シャルム

「あれは…正座と呼ばれる東洋の国の座り方ですよ
心を落ち着かせる効果が、あるそうです。

でも変ですね？」

、
シャルム

「どうしたの？」

、
シャルム

「正座は、確か地面には、両手をつけないはずですけど…
ポチさんは、何故か両手をつけています…」

。何か意味があるのでしょうか？…と、考え込む

白いローブを着た少女の隣で、シャルムは

、
「なんか犬のオスワリに、形が似てるね。」

不思議な座り方だ…と、青い目でポチを見つめる

シャリム

「でも…ポチさんらしいですね…」

可愛いです。…と、口元に左手の4本の指先をそえて、笑うシャリムに

「シャリムは、
本当にポチの事が、大好きなんだね。」

…と、シャルムが言うつと

…その緑の目の少女は、頬を薄紅色ほお うすべにに染めながら

…シャリム

「えっ？えっ？何言ってるんですか！

そ…そ…そんな訳！ある訳ないじゃないですか！」

…そうあわてるシャリムが、あまりに予想通りの反応だったので…シャルムは

「またまたあー照れちゃってーシャリムってばー」

…と、いたずらっぱい笑みを浮かべながら、からかうと…

シャリムは、

「しりません！」

…とばかりに、シャルムに背中を向けるので

…その様子を、ほんの少し前から…正座しながら見ていたポチは

…

「な…何やってるんだ…

あいつら…」

。

子供のケンカを驚いたような…犬の顔で、見つめるのだった…

。

そして…その話題で、シャリムをからかい過ぎたせいか…

シャルムは、これが原因で…

次の日になるまで…シャリムに、口を聞いてもらえなかったという

…

。

《そして寝室へ…》

第7話へそして朝食へ

そして…次の日の早朝

・・・

部屋の寝室の中

…

光の球を完成させたシャルムが、
何故か？ポチと同じ布団の中に寝ていた。

…

シャルム

「すうー…すうー…ムニヤムニヤ…」

。

ポチ

「…おい…」

？

シャルム

「うーん。シャリムウー…いつの間に…こんなに毛深くなったの…」

！？

ポチ

「おい！よせっ！

くすぐったいだろ。こらっ」

。

シャルム

「へっ!？」

！

シャルムの目が開くと…

そこには、鎧を脱いだポチの姿があった

。

シャルム

「…ポチ…あなたは、確か死んだはず…」

。 寝ぼけているのか…

そんな事を言うシャルムの目の前で…ポチは、

「勝手に殺さないでくれ…」

。 布団から身体を起こすと…そのまま立ち上がってから…布団から離れて…

、 そのあと、シャルムに

ポチ

「変な夢でも見てたんじゃないか？」

…と、話すので

… まだ布団の中で寝ていた…シャルムは

、 （そうか…光の球を

作り終わったあと、僕は…）

… 眠たい目を、こすりながら…寝室まで移動し…

。 そのあと、ポチの寝ている布団の中に、潜りこんだ事を思い出す…

シャルム

「ところで光の球は？」

。 ポチ

「ああ…それなら

他の水晶球と一緒に、棚の上の方に置いてある…
それが、どうかしたのか？」

…と尋ねるポチに…シャルムは

「…いや…なんでもないよ。」

…と、首を横に振ると、

かけてある布団と一緒に、寝ていた身体を起こして

…
シャルム

「ところで、シャリムは？」

…
もみあげのところの金の髪も肩にかかるくらい長い…エメラルドの瞳の少女が、どこにいるか聞くと

…
ポチ

「あの子なら台所で、食事を作ってるぞ」

。シャルム

「えっ？あつ…うん。そのようだね…」

ポチ

「???」

…
シャルムとポチが、そんな話のやりとりを、しているうちに…

…

、
台所では、料理の仕上げに入った、シャルムが

「塩とコシヨウで味を調えて…っと、完成です。」

！

出来ましたよ。…と、居間のテーブルの上に、鍋のようなものを運んでくるので

…

ポチは、それを見たあと

…
まだ布団のところで座っているシャルムに

、
「大丈夫か？

… 眠たいんだつたら… もうちょっと寝てても、いいんだぞ。」

… と、声をかけると

…
シャルムは、立ち上がりながら

…
「大丈夫だよ。早く居間に行こう。」

… と言うので

、
ポチ

「分かった。」

…
その言葉をきっ かけにして… ポチとシャルムは、居間の方へ向かった

…

…
昨日も座った、円形のテーブルの上には…

…
さつきシャリムが、運んで来た

…
鍋のようなものに入った、料理の他に…

…
その近くには、その料理を入れるための入れ物が… 3人分、置かれていて

…
さらには、大きな皿の上に乗せられた発酵パンが、
それぞれの席の前に、配くばられてあった

。

…
そして、それらの食事を運はこんで来た… シャリムは、円形のテーブルの近くに立ち

、

「えーと…ちゃんと人数分ありますね。」

…
スプーンなどの食器類も、ちゃんと三人分あるか…確認したあと

…
「今日は、カレーです」

…と、鍋のようなものに入ってる…料理の名前を告げると

…
席に着いたシャルムとポチから

…
シャルム

「カレー!？」

!

ポチ

「カレーかあ…」

!!

。わあっ…と、喜びの歓声があがる

そして、シャルムとポチの反応が予想通りだったので…

シャルムは、嬉しそうな顔をしながら…

鍋のようなものの中に入^{はい}ったカレーを、

料理に使うオタマで盛って…

、

シャルム

。 「たくさん食べてくださいね」

それぞれの入れ物の中に、カレーを入れてから

…

そのカレーを入れた3つの入れ物を、

三人の席の前に、それぞれ配ると

…

そこでシャルムが、なぜか？自分のところに、スプーンが2つある事に気づき

…

「どうしたの？」

これポチのスプーンだよな。」

…と、ポチに尋ねると

。

ポチ

「カレーは、素手でたべるものだ」

。

そうポチが言うので…シャルムは、

「そうなの？」

…と、青い目を見開いて、少し驚いていると

…

そんなシャルムの席の近くにいたシャリムが

、

「そういえば…南の方の国の中には、

東洋の一部の国の影響を受けて、カレーを素手で食べる人達がいると…聞いた事があります…」

。

ポチさんは、その中の一人なのでしょう…と話し…

そのあと、ポチに

、

「でも…このカレーは、

わたしがスープに近い形で、煮込んだので…手じゃ食べにくいですよ」

。

そう話しても…ポチは

、

「構わないさ…俺自身この食べ方が好きなんだ」

。

決意が変わらない事を、シャリムに伝えると

：

シャリムには、それが本気であると分かってしまったので

：

「分かりました…。」

…と、そう言ってから自分の椅子に座って…

右手に持ったスプーンで、カレーを食べ始めた

・・・

。

《食事中の会話へ続く》

第8話《大事な事なので2回微笑みました》

食事中・・・

シャルムとシャリムのスプーンの運び方が…どこか、ぎこちないと感じたポチは、

「お前達…ひよつとして、スプーンの使い方に慣れてないのか？」

…

それともカレーに食べ慣れないだけか…と、子供達に話しかけてくるので…

ポチの向かいの席に座るシャリムが、

「そうですね…」。

わたし達にとつて、こういう食事は…

体重を調整するために、すぎないものなんです」。

そう言つて、複雑な表情を浮かべるので…

それを聞いたポチが

、

「どういう事だ？」

…と、その事について尋ねてみると

…

シャリム

「わたしとシャルムの普段の食事は、イドウンの実だけなんです。もちろん水も、それなりに飲む必要があるんですけど…」。

イドウンの実については、ポチも聞いた事がある

・・・

イドウンの木の枝に生なる…青リンゴのような形の実の事で…

その味も、バナナを薄めたような味で…非常に美味である…。

そして、この食べ物には、少しだけだが…食べると、魔力を高める

。 効果もあつた…

ポチ

。 「しかし…それでは、栄養も、偏^{かたよ}るだらう…」

。 そんなポチの問いかけに、シャリムは

、 「イドウンの実には、わずかだけど、魔力が含まれているので…

わたし達は、イドウンの実に含まれている…その魔力のエネルギーを利用して…体内でビタミンやカルシウムを作り出しているんです。

」

…そう説明すると、ポチも…

「なるほどな…」

。 …と、シャリムの言う事を理解する…

どうやら…二人の子供達は、イドウンの実に含まれている…魔法の力^{みなもと}を源にして…

自分達の身体を構成するために必要なものを…

自分自身で作り出せるらしい…

。

だからポチも…

（まっ…これまでのこの子達の行動からでも、

何らかの特殊な環境にいた事が分かるからな…）

。

そう思って…たいして驚かなかったが

…

ポチ

。（だが、そうになると…）

。

「じゃあ、昨日の晩は、

ほとんど、俺の携帯食を作るために…」

。これでは、ただの足手まといではないか…と、心配するポチに…シャリムは

、
「少し違います。」

ニコツ…と、一瞬、子猫のような笑顔を浮かべてから…

元の表情に戻ると…ポチに、

「実は、昨日は、

水不足に困らないように…まわりの空気を、魔法の力で水に変化させる…」

魔法の水筒すいとんも作っていたんです。」

…
きのう何をやっていたのか、説明して…

その話を聞いたポチが

、
「りよ…料理のほかに…」

。そんなものまで、作っていたのか！」

犬みたいな口を、あぐり開けて…驚いていると

…
シャリムは、そうですよ…と、また子猫のような笑みを浮かべるの

で…

。ポチは、その笑顔を見て、もはや…あきれるしかなかった…

…

その後…

。そんな、話のやりとりを続けていくうちに…シャリムは、ポチもシャルムも、食事を終えた事を確認し…

シャルム

「みなさん。食べ終わりましたね…」

。食事を運びますね…と食後の、あとかたづけを始めたので…

…その様子を見ていたシャルムは、

寝室のところで、鎧を着ているポチと

…

シャルム

「そろそろ出かけるよ。」

。あつ！衛兵から取った槍は、ここに置いてって…」

。

ポチ

「なんでだ？」

、

シャルム

「ここを出るんだから…」

ポチには、いろいろ道具を持ってもらわなきゃならないからね…」

。

そんなやり取りをしたあとに…

シャルムは、部屋の端っこの方から…

シャルムの身長のは半分は、ありそうな…大きなリュックを持って来て…

それをポチの近くの場所に置くので…ポチは

、

「これに荷物を入れれば、いいんだな。」

…

シャルムに確認して…それに対してシャルムが、

「うん。」

…と返事したので

、

ポチは、棚の方に置いてあった…2つの水晶球を持って来て…
その2つの水晶球と一緒に入れるものを…リュックの中に詰め込むと
………

その詰め込み作業が続いていた…ポチを、見ていたシャルムも

…

「あとは、あれだけか…

よし！！シャルムが片付け終わったら…出かける準備をしよう！」

…と、言うので…

そんなシャルムの様子を不思議に思ったのか…

ポチは、

（これから出かけるのに…後片付けをする必要があるのか？）

一瞬、そう思ったが…

（まっ…

やってる事が人として正しいしな…）

たぶん、そういう性格なのだろう…と、優しい目で、シャルムを見る

。

そして、すべての荷物を…リュックの中に詰め込んだポチは、

…そのリュックを背負って、

「うんしょ…っと！じゃあ行くか！」

。

そう吠え^ほると…そのあと

…

（やつぱり…無茶だと思っただよな…。

。パンテオンから、脱出するなんて…でも…）

。

こいつらとなら…と、

自分の胸の奥に、かすかな希望が生まれている事に気づくのだった

………

。

《第9話へ続く…》

第9話〈長方形のバスケット〉

。 出かける前：

シャルム

。 「じゃあ、行こうか！」

銀の髪の少年に声をかけられた、ポチが
部屋から出るために：扉の前に立つと

：

「ポチさん。」

、

もみあげのところの金の髪が、肩にかかっている
少女がパタパタ…と、駆け寄って来た

。

シャルム

「ポチさん。水筒すいとうは、持ちました？」

。

ポチ

「ああ：

リユックの中にあるけど、それよりどうした？」

。

何かあったのか？

…と尋ねるポチたずの前に

、

シャルムは、小さなバスケットを両手で突き出すように差し出して

、

「きのう作ったお弁当です。」

これも、リユックの中に入れてください」

。そう言うので…ポチは、それを両手で受け取ると

、
ポチ

「ちょっと開けてもいいか？」

、
シャリム

「いいですよ。」

、
機嫌きげんの良い時の子猫のような…微笑みを浮かべながら…返事を返す
シャリムの前で、
バスケットのふたをパカッ…と、開けてみると

…
ポチ

「これは…」

。ふたの開いたバスケットの中には…カレーパンらしきものが3つ入
っていたので…
それを見て、ポチが

、
「カレーパンにしては、
パンの生地きじが厚すぎるんじゃないか？」

、
しかも…まだ十分に生地が焼きあがってないぞ…と言うと

…
子猫のような笑顔を浮かべていた…シャリムは

、
「実は、このパンは食べる直前に…炎の魔法で、パンを焼く事で…
おいしいパンになるようにしてあるんです…」

ですから…いつでも

アツアツのホクホクで召しあがれますよ…と、優しく緑の目を細めるので…ポチが

、
「…そうか…いろいろ気を使わせて悪いな…」

。そう、お礼を言つと…シャリムの笑顔が、一変して、照れくさそうな顔になり

…
「そ…そんな事ないです！ポチさんが、喜んでくれるなら…わたしは…わたしは…」

。そう言つて…頬を薄紅色に染めていると

…
それまで、たまに様子を見たりしていたシャルムが

、
「シャリム。

無理しなくていいよ。

君は、ポチの事。好きなんだろ。

好きなら好きつて、言っちゃいなよ。」

…
そう言つて、からかうので…

シャリムは、頬を膨らませて

「もお

シャルムったら…」

。

そのあと…なるべくポチと目を合わせないように…

恥ずかしそうに…うつ向く…

ポチは、そんなシャリムの姿を見て…

（コボルトなのに…

俺の事、気に入るなんて…変な子だなあ…)

それとも…そういう恋愛みたいなものに憧れる年頃なのかな…と、
思いながら…

バスケットのふたを閉じて…

ポチ

（おそらく…今朝のカレーのあまりを中に入れてあるんだろうな…）

今朝のカレーは、とてもおいしかったし…

これは楽しみだと…ポチは思った…。

…
もちろん、この先…それを楽しめる余裕があればの話だが

…

…

そして現在…

中に、秘密の通路があると噂される部屋に向かって、歩いていると

…

シャルムが、隣を歩くポチに…

「ねえ…ポチ。

なんで？衛兵がつけてた兜なんて持ってきたの？」

…と、呆れた顔で話す

。

そう…シャルムの隣を歩くポチの手には、

なぜか？子供達の部屋の近くで倒れていた…衛兵の兜があった

。

ポチ

「いや…何か、かぶれないかなあ…と思って…」

。

シャルム

「コボルトの頭は、犬の頭みたいなものなんだから…ポチに、その
兜がかぶれるはずがないよ」

ポチ

「そんなに、はっきり言わなくても」

…
そう言っで、立ち止まってから…しゃがんで、地面に兜を置いたあ
とに…

また立ち上がって歩くポチに…

ポチとシャルムの前を歩くシャルムは

「ポチさんって…ときどき分からないです。」

…と、少しうつ向いて…

はあ…と、ため息を吐くのだった。

…

そして、さらに先に進んで…目的の場所に近づいた時…

ふと、シャルムの足が止まる

。そのすぐうしろで、足を止めたポチが、

「どうした？」

…シャルムに聞くと…

キツ、と表情をひきしめたシャルムが、

「来ます。」

…と言う通り…1…2…3…3人だろうか？

ポチと子供達のとこに、何者かが…近づいて来るのだった…

《つづく…》

《ファイヤーストームLEVEL2》

そして…黒いローブを着た3人組の男が立ちはだかり…
彼らは、みんなフードをかぶっていて…その中の一人が

、「お前達は…まさか？

ええい！！星宮様達は、何をしておられたのだ！」

…そう言ってから

…
彼の前にいる同じフードをかぶった二人の男に、声をかけて、三角
形の陣形を取る

、
それを見たシャルムは

、「トライアングルフォーメーション！？…シャルム！」

…と、うしろにいるシャルムに声をかけて

、
それでシャルムの隣に出てきたシャルムは

、「分かってるよ！」

…と三人組の男達に向けて、右手を突き出し…
突き出した右手の手の平を広げると

…
シャルム

（敵から10メートルくらい離れてる…

魔法の戦闘には、理想的な間合いだ…。

これなら、きつと…）

右の手の平の前に気を集中させる事で、

手の平のすぐ前を…シュワシュワと光らせて

、

そこからフードをかぶった三人組の敵のうちの前衛の一人の男に向けて

！

「ファイヤアボール！」

10センチくらいの火の球を撃ち出し！先制攻撃すると

…

次の瞬間…

トライアングルフォーメーションの陣形を取る男達の足元を^{かこ}囲むように…光の円が現れて

…

一瞬の間だが、それと同時に…2メートルくらいの大きさの緑色に光る五芒星の魔法陣が…前衛2人、後衛1人の三角形の陣形を取る3人組の

前後、左右、頭上と…あらゆる角度から攻撃を防ぐように…5つも現れて、

そのうちの正面から

、

ピーーン！

魔法陣で、火球を防ぐ音が聞こえると…

まわりを囲む魔法陣は、男達の足元に広がっている光の円と共に…

フツ…と消える…

。

その様子を見てシャルムが、

「足元の光の円か…

それならアレが使えるかな…」

などと…いろいろ考えていると…
今度は、敵の方から

…
「ファイヤボール！」

… 掛け声と共に、20センチくらいの火球が飛んできたので…
シャルムは、それに対応するために

、
「うしろに下がって！シャルム！」

、
「はい！」

、
隣にいるシャルムを、後退させると同時に

、
シャルム

「くっ！」

！
ブオンと、青いガラスのような色をした球体を…自分の身体のまわりを囲むように出現させると

…
シャルムの全身を囲む…その青い球体が、シャルムに向かってくる火の球の衝撃を吸収して…

火球の魔法を、まるでバリアのようにかき消したので…
それを見ていた3人組の敵のうち、後衛の敵の一人が、チツ…と舌打ちして

…
黒いローブの男C

「あんな一瞬の時間で、魔法障壁を発生させるとは…おい！お前ら！」

、
黒いローブの男A

「ああ！」

黒いローブの男B

「分かってるって！」

。前衛の2人に魔法を放て…と指示を出してから…自分も一步下がる事で…

テクニカルポジションの位置を取ってから…両手を前に突き出すと

…その前衛にいる2人の男も…シャルム達に向けて、突き出した両手の前に現れた魔法の光を、シュワシュワと大きくさせて…

その大きくなった2人の両手の手の平の前の光から

…黒いローブの男B

「ポオラフレイム！」

、黒いローブの男C

「ウイントルネード！」

、シャルムに向かって伸びる炎と…まるで竜巻のような、螺旋^{らせん}の風を発生させて

…それと同時に、後衛の男が両手を胸の前に交差させる事で…

シャルム達のところへ向かう火柱のような炎と、螺旋の風が重なって…炎の竜巻となり

…黒いローブの男C

「くらええー！！！」

！後衛の男の叫び声と共に、シャルム達を襲う

…
そして…再び^{ふたたび}現れた…シャルムのまわりを球状に囲む、薄い青色の魔法障壁と

…

ドゴオオッ！！

…と、すさまじい音で激突するのだった

…

。

《そして戦いは佳境へ》

第2戦へ一つの結界の破壊は、すべての結界の破壊に通ず

シャルムの身体を守る球状の魔法障壁は…

シャルム達に向かつてくる炎の竜巻を防ぐ事が出来たが…

激突した時の衝撃で…魔法障壁に、ピシッ！と亀裂が走った。
それで驚いたシャルムは

「ファイヤーストーム…

まさか合体魔法を使ってくるなんて…」

フツ…と、身体のまわりにある薄い青色の魔法障壁を消して…そう
つぶやいていると…

シャルムのうしろに避難^{ひなん}していた…ポチが、

「何なんだ？それは…」

…と、質問してくるので

シャルムは、ポチのいる後ろを向いてから

…
「前衛であるライトポジションと、レフトポジションの人達が使う
魔法を…

テクニカルポジションと呼ばれる…後衛の魔法使いが合体させて
強力な魔法に生まれ変わらせる三位一体の魔法なんだ。」

…とポチに話してから…再び敵の方に視線を戻すと

…
黒いローブの男B

「灼熱の炎の柱よ。我が手に宿りて…」

、
黒いローブの男C

「風の渦よ。我が敵に向かいて…」

、
男達がもう一度、合体魔法を使おうとしていたので

、
シャルム

。「させるかあああ！！レエザアフレイム！」

。シャルムは、敵の前に突き出した右手の人差し指と中指の指先から
：レーザービームのような直線状の炎を放ち！
その鋭い炎が敵に向かって急接近すると

：
黒いローブの男C

、「通じるかよ！そんなもの！」

、
敵の一人が言うように：

また前後、左右、頭上と：あらゆる方向から彼らを守る5つの光の
五芒星が現れ：

、
その正面の五芒星とシャルムの放った炎が

。バキーン！

激突し：

男達の正面を守る五芒星で炎を防ぐ事が出来たが：

その変わり：その正面の五芒星に、ピシィ：と亀裂が走った…。

、
そしてそれを見たシャルムは、ポチに

「だけど、この通り：

。こういう魔法には、攻撃に重点をおくあまり：防御が手薄になり：
結果の力が弱まる欠点があるんだ」
ちから

。大きな術^{わざ}には、それ相応の欠点があるものだよ…と話していると…

そこを狙って

黒いローブの男C

「もう一度合体魔法を使ってお前達を倒せば！
その心配もなくなるだろう！」

トライアングルフォーメーションの陣形を取った3人組の男達も
う一度、炎を巻き込んだ螺旋^{らせん}の風を放つ

！

だが次の瞬間に…シャリムが、シャルムの前に飛び出し

「させません！」

それからその場にしゃがみこんでから…バン！！と、地面に右の手
の平を押しつけると…

手の平を当てたところの、すぐ前の場所から現れた…幅1メートル
くらいの炎の壁が…

ゴオオオと、2メートルくらいの高さまで上昇し…その上昇した
炎の壁が、向かってくる炎の竜巻を吸収すると

…

黒いローブの男C

「あれは、まさか！？」

次の瞬間！！シャリムの作った炎の壁から…再び炎の竜巻が現れ…
その竜巻が魔法を放った男達の方へ向かっていった…男達の正面を
守る魔法陣と激突し

！！

その正面の魔法陣だけではなく…

上下、左右、頭上と、彼らのまわりを囲んでいた5つの五芒星の結
界を、バリーンと…すべて破壊する

。そして、破壊された結界は、まるでハンマーで破壊されたガラスのよう…

。たくさんの光の粒となって飛び散った…

黒いローブの男C

。 「炎の壁で、俺達の合体魔法を反転させただと…」

、 ショックのあまり男達が呆然^{ぼうぜん}として…その前に！

シャルム

「隙^{すき}だらけだよ！」

…と、突然シャルムが現れ！

…

黒いローブの男C

。 「しまった…」

そうつぶやく、敵の前で…シャルムは、天井に向けて右手を伸ばし…その手の平から

…

「サイレスー！」

、 沈黙を意味する光をカツ！と…発光させて

黒いローブの男A

。 「まさか…これは…」

、 その正体を言いかけた男に…シャルムは

「見た者の脳に、魔法を使えないように情報を刻む魔封じの光さ…
これで対処魔法を使わない限り、あなた達は魔法を使えなくなった

…」

。

そう言う…それに対して敵の一人が

、

黒いローブの男B

「だがそれなら君も魔法を使えないはずだ！
それでどうやって、俺達を…」

。

そこまで言いかけた時

…

シャルム

「忘れたの？」

魔法を使えるのは、僕だけじゃない」

。

その言葉をきっかけに

、

黒いローブの男B

「まさか！自分をおとりに！？」

…

黒いローブの男B

（そうか…この子供の方に俺達の視線が集中すれば…その時に、もう一人の方に意識がいなくなる…）

この子が、俺達の目の前に来た本当の理由は…）

。

三人の男の視線がシャルムから…その何メートルもうしろにいる金の髪の少女に変わる

。

シャルム

「大気よ。わが視線の先に在りし…あなたの欠片かけらの一部は
ヒュプノスの司つかさどる曇りの姿となりて我が敵を眠らせん」

敵から9メートル近く離れたシャルムが、バツと…右手を前に突き出し

…
「クラウドスリープ！」

、
その言葉を発した時

敵の足元に広がる光の円から…灰色の雲が上昇し

…
黒いローブの男B

「くっ…」

、
灰色の雲から逃れようとする男達、すべての意識を薄れさせてゆく…

。そして敵の一人が…目の前にいるシャルムのうしろの方から…バツクジャンプした子供の姿を見た時

…
黒いローブの男A

（…そうか…サイレスの…光…が…あの子供の…手を…上げた…場所…から…

一歩…うし…ろの…方で…かがや…いて…いた…のは…）

。その男は、シャルムがなぜ？自分の目の前でサイレスを使ったのか…
…本当の訳を知る

そしてその男も…すでに倒れている2人の仲間のように…ドサッと、
うつぶせに倒れると…

そこから数歩、離れた場所にいたシャルムが、
さらに数メートルうしろに離れている…ポチやシャリムがいる方を
振り向き

…

「先へ行く…」

そう言つて、顔を正面に戻すと…

その先にある目的の場所へと足をすすめるのだった

…

。

《つづく…》

第10話へ水晶球とガラス球

シャルムのスリープの魔法によって、黒いローブを着た3人の男達は倒れ

…
先に行くシャルムのあとに続いて…倒れた男達を横切ろうとするポチが、隣を歩くシャルムに

…
「それにしても…

スリープの魔法で出来た雲みたいなものは、しばらく残ったりしないのか？」

、
眠りの雲を発生したばかりなのに…こうやって、すぐにその場所の近くを歩ける事を…不思議に思ったので…

その事を聞いてみると…シャルムは、

「はい。

こういう魔法は、一定時間、術が発動すれば…すぐに消える仕組みになっているんです。」

…
だから今は魔法の効果は、残っていないのだと…ポチを納得させる…と…

ポチと一緒に、さらに先へ進むのだった…

。

…
…
…
…

そして、それから少し足を進めて…

もう少して目的の部屋だということで…シャルムの前に出たポチは、

今…ポチの隣を歩くシャルムに、

「なあ…

シャリムがスリープの魔法を使った時に、シャルムが二人いたように見えたんだけど…

あれって、やっぱり…衛兵の時みたいに、近くで姿を隠してたのか？」

。その時、シャルムのうしろから姿を現した…

もう一人のシャルムが、バックジャンプしたので…驚いていた話を話すと

、シャリムの前を

ポチと一緒に歩いていたシャルムは…

「うん。」

あの人達が僕から、目を反^そらした時…

ビジョンの魔法を使って、それで出来た幻影の方に…あの人達の注意を引き付けて、

そのあいだに本物の僕は、フルクリアの魔法で、姿を隠したあと…スリープの魔法がギリギリ届かない場所まで行って…そこでシャルムがスリープの魔法を使うのを待ってたんだ。」

…当時の状況を説明し…ポチがそれで、

「なるほどな…」

…と、納得してるあいだに…うしろの方から

…シャリム

。「見えて来ましたよ。部屋の入り口が…」

。シャリムの声がしたので…シャルムは、

「うん。」

一緒にいたポチをそこに残してから…

少し歩いて…扉の前に立つと…

。あとからシャリムが追いついて来た時に…少し扉から離れ…

シャルム

「シャリム。」

、シャリム

「はい。」

…そのあいだにシャリムに…扉の前に突き出した右手から、発する青い光で…

扉にかかっている鍵を解除してもらった、シャルムは…部屋の扉を開けて、その中へと進むのだった…

。

…

部屋の中は、高さ3メートル…

。幅^{はば}6メートルと、いったところだろうか…

部屋の扉を閉めてから、

「何もないじゃないか」

…と言うポチより先に部屋に入っていたシャルムは

、

「なるほどね…」

。

そつつぶやきながら…右端^{みぎはじ}の壁のところに行ったあと…

石で出来た、その壁に右の手の平をつけて

…

シャルム

「むん！」

…精神を集中させたあと…続けて左端の壁…そして奥の壁と…
同じように…右の手の平をつけてから、精神を集中させる行為を繰
り返し

…
それを見て…

「どうでした？」

…と尋ねるシャリムに、シャルムが

…「やっぱり…奥の壁のところのようだね…」

あそここのところだけ

壁の奥に空間のようなものがあるのを感じたし…
間違いないと思う。」

、
そう答えたあと…今度は、ポチに

…「ポチ。リュックの中から、ガラスの球を出して」

…と頼むのだが…

ポチには、シャルムが何を言っているのか？分からず…

「ガラスのたま？」

、
水晶球なら二つあるけど…」

、
そう答えたので…シャルムは

「ああ…そうか…ポチには水晶球が、2つあるように見えるんだね。
じゃあ、リュックから水晶球を2つ出して…大きな方の球を、僕に
渡して」

…
…
そう言って、ポチに頼むと…茶色い服の上に、鎧を着ていたポチは

…
「分かった。」

…と、背負っていたリュックを下ろして…

地面に置いた、リュックの中から2個の水晶球を取り出すと…

その2個の球を、それぞれ片手に一つずつ持って、立ち上がり…

光の球は、右手で持ち…

左手に持った、大きな球の方は…近くににいるシャルムに手渡す…

するとシャルムは、渡された大きな球を…右手に持ちながら

…
シャルム

「じゃあ、これを奥の壁にぶつけるから…

シャルムとポチは、扉の近くまで、下がって」

…と、ポチ達に言って

、
シャルム

「わかりました。ポチさん。」

ポチ

「あ…ああ…

扉のところまで行けばいいんだな？」

、
シャルムとポチを扉の近くまで下がらせたあと

…
自分も2人の手前の方まで下がって…

そこから、奥の壁に向かって

…
右手に持った球を、オーバースローで投げる。

すると…

そのシャルムの投げた球が、壁に激突した途端に爆発し！
とたん

ドガン！ガラガラガラ…

！

轟音と共に壁が崩れて…

それで出来た、大きな穴の奥に現れたものは…

、

ポチ

「あれは…」

、

薄暗い場所へと続く…下への階段だった

………

。

《11話へ続く…》

第11話へさらなる地下へ…

《10話の続き…》

ポチ

（そうか…あの球は、

水晶球に、光を入れた時のような感じで…

ガラス球の中に、爆発系の魔法を封じたものだったんだ…）

ガラス球を石の壁にぶつけた時の爆発で…石の壁に大きな穴が出来て

シャルム

「急^{いそ}ごう。

この爆発で、敵がこの部屋に駆けつけるかもしれない…」

シャルム

「はい。」

ポチ

「分かった。

怖いが…光の球を持ってるから、俺が先頭を行くな…。」

リュックを背負ったポチを先頭に…

石の壁に出来た穴の奥に行って、そこにある下への階段を下^おりていくと

………

。

《秘密の通路》

…

シャルム

「…やっぱり…奥は、洞窟みたいになってるようだね…」

ポチのうしろを歩くシャルムの言うように…

階段を下ると、そこには…幅広い洞窟くたのような空間が、どこまでも続いていた…

その空間の中を…右手に光の球を持って、先頭を歩くポチは…暗闇を照らしながら

「さっきの爆発で、

あの3人組が目覚めたりしないかな…」

…前の戦闘で…スリープの魔法で、眠らされた男達が起きる事を心配すると…

…うしろから…シャルムが

「スリープの効果は、半日くらい続くから…

ほかの誰かに起こさなければ、そのままと思っけど」

…でもさっきの爆発で…気づいた敵がいるかもしれないので、追って来るかもしれない…とポチに話す

。それを聞いてポチは、

「半日？」

歩く足を速めながら…

シャルム達と過すごした部屋の前に倒れていた…二人の衛兵の事を思い出して

…

「でも…お前達の部屋の前で寝ていた衛兵達は、確か…1日中…寝てなかったか？」

、
余計な事だと思いつつも…
緊張した、みんなの気持ちを和らげるために聞いてみると

…
シャルムは、ポチのうしろを歩きながら

…
「水晶球を作ってる時に…1回中断して部屋の外に出た時があったでしょ？」

、
そう言う…ポチもその時の事を思い出して

…
ポチ
「ああ。確かあの時…衛兵の兜かぶとを取ってきてもらったんだよね…」

°
シャルム

「実は…その時に1回スリープをかけ直したんだ」

、
ポチ

「なるほどな…そして光の球を完成させたお前は…
そのあと…あの爆発した球も完成させたという訳か…」

…
寝不足だったのは、そのせいでもあったんだな…と、歩きながら話すポチに

シャルムは…

「まあ…あれは危険なものだから…
魔法を入れるのは、なるべくあとになって…思っただ。」

…
ポチ

「それは、わかるけどよ。でももし…あの三人組と戦ってた時に俺がファイヤーストームをくらっていたら…」

シャルム

「たぶん、その衝撃で…」

リユックの中のガラス球が爆発して、僕達は全滅しただろうね…」

それを聞いてポチが

「うわあ…今まで、そんな危ないものを背負っていたのか…俺は…」

光の球で、あたりを照らしながら…ショックを受けているところで

この洞窟みたいなところのまわりが…

思ったより幅広いために…ポチの隣に来たシャルムが、

「前に…」

部屋の入り口みたいなものが見えます。」

…とポチに言うので

…コボルトであるポチは、

自分の視界がシャルム達と比べると、ぼんやりしている事から…

「わん。」

…と、一言だけ返事をして、そこから少し足を進めると

…シャルムの言う通り…石室の扉らしきものが見え始める…

。それは、引いて部屋の中に入る、今までの扉とは違い…

押して開けるタイプの扉のようだ…

。その扉を目の前にして…ポチが、

「うっ…」

…犬の唸^{うな}るような声で…ためらっていると

…ポチの隣を歩いていたシャリムも足を止めて

…「この部屋…危険ですね。」

そう言つて、真剣な表情を浮かべる。

…だが…それでもシャルムは、扉の前まで進み…

シャルム

「だからどうした。」

僕達には、前に進むしか道は無いんだ。

行こう…。ポチ。シャリム。」

…そう言つて扉に、両手の平をつけると…

シャルム

（どうやら扉に鍵は、かかってないようだ…）

。だから…自分の身長^{身長}の2倍以上もありそんなその扉を…シャルムは、
「むっう！」

！ギイーと、両手で押して開き…中に入ると

…暗闇に包^{つつ}まれた部屋の中に…シャルム達を見つめる二つの光があ
った…

。そして…先に入ったシャルムに続いて、シャリムが

…

。「わたし達も行きましょう。ポチさん…」

。

そう言つて、開いた扉を通ると…呼びかけられたポチも
「うおふ。」

、

シャリムに続いて、石室の中に入るのだった…

。

二つの光の主が誰なのか？確かめるために

…

。

《第12話へ続く…》

第12話へ前説。長っ！

ポチが、石で出来た部屋の中に入り…右手に持った光の球で、辺りを照らすと

…
ポチ

「こ…これは…」

、
そこにあるのは驚きだった…

。 周りの幅が2.5メートル四方はある部屋の広さと…5メートルもある部屋の高さ

…
そして、横幅1.5センチ…高さ2メートルあまりの…白い円柱が4本あり

…
その4本の円柱が…1.5メートル四方の正方形を形作るように配置されている…

。 そして…その柱によって形作られた1.5メートル四方の空間の中心に…

2メートルはあろうか…人の形をした石像が立っていた…

。 かつて人は、その石像の事を…ストーンゴーレムと呼んだ

ポチ

「…これって、やっぱり…」

…
シャリムの隣で、ポチが言おうとした次のセリフを

…
シャルム

「どうやらゴーレムもどきのようだね…」

。ポチの前に立つシャルムが言うのだが…
てつきりポチは…シャルムが、ゴーレムと言うと思っていたので

…
ポチ

「ゴーレムもどき？」

…と前にいるシャルムに聞くと…

シャルムは、ポチの方を振り向かずに

、

「研究者達が、ゴーレムを真似て作ったといわれる…ゴーレムの試験体だよ。」

どうやらあの4本の柱に、囲まれている場所に入ると…あれが作動する仕組みになっているようだね。」

…と、ポチに説明して…

その説明を聞いたポチは、ゴーレムの試験体の後ろの方にある、扉の形をした青色の石を見て

…
ポチ

「じゃあ、あのゴーレムもどきという奴を倒さないと…あの出口らしきところは…」

。

シャルム

「開かないようになってるだろうね…」。

あの色違いの石のところは、実は、ただの空間なんだけど…

でも、あのゴーレムもどきを倒さない限り、通れないようになってるんだ」

…

ポチ

「つまり…ただの空間が、魔法の力で、あの青い石の扉になってるという訳か…」

シャルム

「ゴーレムもどきの足元にある円の中いっぱい…血のような紅い色をした五芒星が描かれてるよね…」。

あの五芒星のところで書かれている紅い記号は…結界を強化する記号なんだ」

ポチの前にいたシャルムが、そこまで言う…

今度はシャリムが、ポチの隣から

「そして…あの4本の柱は、結界内の魔力を増幅させるアンテナの役割をはたしています。

あの柱がある限り…ゴーレムもどきさんに魔法は、通用しません。」

…
そう言うので、ポチが

「じゃあ、柱を壊せば」

、
魔力を無効果するゴーレムの結界を破れるかもしれない…と言うと

…
ポチの前にいたシャルムが、

「無理だよ。」

…
ゴーレムの立っている場所の右前方の柱に向けて…突き出した右手の、手の平の前を光らせて…そこから

…
シャルム

「ファイヤアボール！」

…
10センチくらいの火球を放つが！

それは、見えない壁に阻まれるかのように…白い円柱の手前で、ボ
シユツと、消えてしまう…

そして、その柱を見つめたまま…シャルムは、後ろにいるポチに

、
シャルム

「この通り…外側からの攻撃が、一切通用しないんだ。」

、
そう言ったので…ポチは

「そうか…」

…と納得しかけるが、そこで…

（ん？まてよ…）

…と、ふと何か思いついたポチは

…
「じゃあ、あの4本の柱に囲まれた場所の中から…柱を攻撃すれば、
どうなるんだ？」

、
その時、頭の中で思いついた事を話すと

…
それまで前を見ていたシャルムが、ポチの方を振り向いて

、
「攻撃が通じるようになって思うけど…」

柱に囲まれたあの場所に、一歩でも足を踏み入れればゴーレムから
の攻撃が」

…
そこまで言つと…ハツと、ある事に気づき…

（そうか…

誰かが少しの時間でもゴーレムを食い止めててくれれば…柱への攻撃が出来るようになる…）」

シャルム

「まさか！？」

ポチ

「わん。俺がおとりになるよ」

それを聞いたシャルムが、隣から…

「危険です！ポチさん」

…声をあげるが…

ポチは、そんなシャルムに顔を向けて

「今だけなんだよ。」

俺が戦闘で、お前達の役に立ちそうな場面は…」

シャルム

「でも…」

ポチ

「俺を漢…いや…オスにさせてくれ！」

シャルム

「もお、ポチさんたら…」

前は、人間だったんですから…ここは漢で、いいじゃないですか。」

シャルムが、握った左手を口元に寄せ…クスッと、笑っているうちに

…

シャルム

「じゃあ、みんなちよつと…」

。シャルムに声をかけられた、ポチとシャリムが

…

「うおふ。」

、

「なんでしゅう?」

。

返事をして、シャルムと向かい合つと…シャルムは、対ゴーレムもどき戦の説明を始めて

…

「ポチ。」

、

「わん!」

、

「シャリムに魔法で、身体を強化してもらつたら…」

なるべくゴーレムの注意を、君に引きつけるように…頑張ってみて。

「

、

「分かつた。」

、

「シャリム。」

、

「はい。」

、

「ポチに強化の魔法をかけたら…サーチの魔法で、僕をサポートして」

。

「了解です。」

…
シャルムの説明が終わり…ポチが、リュックや光の球などの荷物を
足元に置くと…

。シャルム

「さあやるぞ…！みんなあ！」

、ポチ&シャリム

「おおー！！！」

、シャルムの号令と共に戦闘が始まるのだった…
。

《第3戦へ続く…》

第3戦へポチの視点とシャルムの視点

まわりが石で出来た壁に囲まれた部屋の中

ポチがリュックや光の球を置いた場所の近くから…シャルムは

「始めますね…ポチさん。」

自分と向かい合うポチに…緑の両目を細めて、微笑みかけたあとに…自分の左手の人差し指を噛むと…

そこから流れ出る血を使つて、床に50センチくらいの円を描き

シャルム

「ポチさん。この血の円の中に入って下さい…」

ポチ

「わん。」

ポチを、その円の中に招き入れて^{まね}いるあいだに…

自分の左手の人差し指から流れ出る血を…人差し指の傷口に、唇をつける事で吸い取ると

その傷口がかさぶた^{おお}で覆われるまでに、たいして時間は、かからなかった…

一方…円の中に入ったポチは

「で？どうすればいいんだ？」

そこでじつと立ったまま…シャリムを見下ろして
これからどうすれば良いか？尋ねると…
シャリムは、口元から左手を離してから

「このまま目を閉じて…自分の身体が鋼のように頑丈になる事をイメージして下さい。」

…
そう言うので…それを聞いたポチが
「分かった。」

…と、頷いて、目を閉じているあいだに

…
ポチと向かい合っていたシャリムは…手の平を広げた右手を、ポチの方に向けて突き出すと…
そのあと、両目を閉じて

…
シャリム

「守りの光よ。汝の輝きによつて、彼の者の器に…銀の足の女神の祝福を与えよ。」

ガアドナアリライツツ」

…と言う言葉と共に、
突き出した右の手の平から放つ白い光を、ポチに注ぎこむ

…
すると…ポチは、自分の身体の内側から、見えない力が湧き出てくるのを感じていた。

…

そして…それから少し時間が経ち…

、
シャリム

「ふう…もう目を開けてもいいですよ…」

シャルムの言葉に従^{したが}って、ポチが目を開くと…
少し疲れた顔で、シャルムが

「これが本来の魔法です。時間をかけて、自分のイメージを定着させていくんですよ。」

…と話し、それに対してポチが…

「なあ、

なんか二回、魔法をかけてもらったような感覚があるんだが…」

俺の気のせいかな？…とシャルムに言おうとした時

「じゃあ！行くよ。ポチ！シャルム！」

柱に近いところで待っていた…シャルムが声をかけてきたので

ポチ

「待て！シャルム。俺が先に行く」

！
そう言って、シャルムを引き止めたポチは…4本の白い円柱に囲まれた空間に向かって、歩き出し…

それから前の2本の円柱のあいだに、一歩足を踏み入れた時

…
人形のように直立していたゴーレムが、ギギ…と膝^{ひざ}の部分を曲げて、
屈^{かが}みこむような体勢をとり

…
その動きを見て

ポチ

「!？」

いつでも逃げられるような体勢をしていたポチの前で…

ゴーレムは、ゆっくりした動きで、タックルでもしそうな姿勢をとると…そこから…

ドン!と、右肩を突き出した体勢で…タックルを仕掛^{しか}けて

それを迎え撃つポチは、先程のゆっくりした動きから考えられないような…タックルのスピードに虚^{きょ}をつかれながらも

ポチ

(うしろへ跳^とぶ!)

タックルを受けた時のダメージを少しでも軽減させようと…バックジャンプしたのだが…

それでもポチの胸部に、ガコオッ!…と、ゴーレムの右肩が突き刺さり

その衝撃で、ポチの身体を守っていた鎧の胸の部分が破壊されて

同時にポチの身体は、車に、弾^{はじ}き飛ばされたように

「キャイン！」

4本の柱に囲まれた空間の外まで吹き飛ばされてしまう…

だが、吹き飛ばされた時

なぜかポチの耳に、ゴォン!…という、何かが激突したような音が聞こえていた…

一方、その1分前：

ポチがゴーレムのいる場所に行くのを確認したシャルムは、
ゴーレムの注意が、ポチにいつてるあいだに：前の2本の柱の間に
入ると

：
4本の円柱の外側から：左手に持った光の球で、
自分やポチのいる場所を照らしているシャルムに

：
「シャルム！早くサーチの魔法を！！」

催促するよう^{さいそく}に呼びかけると：シャルムは

「わかりました。」

：と自分から右斜め前^{みぎなな}の方向に位置する白い円柱を
「サーチ。」

その言葉と共に、じっと見つめると：

柱を見つめるシャルムの両目が：緑色から紫色に変わり

・・・・・・

シャルムの視界に、その柱の情報が光の文字となって、次次表示^{つぎつぎ}さ
れていく：。

そして、それから数秒後に：紫色から緑色に、瞳の色を戻したシャ
リムは、

自分から右斜め前にある：その白い円柱の、ある一部分を

右手の人差し指で、指差し：

「シャルム！

わたしの指差したところの周辺を、2メートル以内から光弾の魔法
で攻撃すれば、この柱を破壊できます！」

。そう言うので：それを聞いたシャルムは、

「分かった！」

…と、シャリムの指差した円柱の2メートル以内まで近づき…
その柱に、右手の手の平を向けると

…

シャルム

「ロックオン」

。

青い瞳の色を紫色に変えて…

その数秒後に…右の手の平の前に、シュワシュワ…と集めた光の
ところから

…

シャルム

「ルアイトボウツ！」

20センチくらいの光弾を発射するのだった…

。

…

だから、ポチがゴーレムのタックルに

「キャイン！」

…と、弾き飛ばされた時

。

シャルムが発射した光弾が、円柱に激突して、柱の一部分を破壊し
たので…

その時、柱の上の方が折れて…石の地面にぶつかった時の音が、
ゴオン！と、ポチの耳に聞こえていたのだった

…

。

《つづく…》

第3戦「空気の読めないラブコメディ」

ゴーレムのタツクルでポチが…

「キャイン！」

…と、吹き飛ばされた時、シャリムが

「ポチさん！」

…
左手に持った光の球をその場に置いて、仰向けに倒れているポチの元に駆け寄ったせいで

…
残り3本となった白い円柱に囲まれた空間の中にいたシャルムは、
（ちよつと暗いかな…）

。その上…薄暗い中で、ピーンと輝くゴーレムの視線を自分の方に
向けられて

…
シャルム

「やばっ。大ピンチ」

。その可愛い顔をひきつらせていた

…

…
その頃、仰向けに倒れていたポチは、鎧の一部が破壊された…胸の
ところに右の手の平をつけながら

…
「キャイン！キャイン！！いてえよおおおー！！
死んじゃうよおおー！！アホンダラーッ！！」

。わめき散らし、両足をバタバタさせていると

…
「ポチさん…」

。その近くまで、涙目のシャリムがやって来た事に気づき…
ピタッ…と、わめくのを止めて身体を起こすと

…
「リアクションだ。リアクション。だから気にするな…」

。わざと騒いでいた事を説明して

、
シャリム

「そうですか…良かった…」

。左手の人差し指で涙を拭う、金の髪の少女を慰めようとするが…
その時、コトンと、シャリムの足元に…小さな結晶みたいな物が落ちる音が聞こえたので

、
「何だ？」

…と、ポチが不思議そうにつぶやくと…シャリムは

、
「ああ…これですか？」

…と、足元を見ながら

…
「わたしの泣いて…地面に落ちるあいだに、空気に触れる事で、たまに結晶に変化するんです。」

、
たぶん、体内に魔力をためている事が関係してるんでしょうけど…」

、
そう言うので…それを聞いたポチは、立ち上がりながら

…
「何の結晶に変化するんだ？」

…と、その話に食いつくと…シャリムは

、
「ダイヤモンドになるようです。」

。そうは言っても、小さな物なんですけどね」

。両目を閉じて、困ったような顔をしながら…ちよつとだけ舌を出すので

…
そんなシャリムの前で、ポチは

、
（じゃ…じゃあ…この子を定期的に泣かせれば…か…金持ちに…）

。そんな事を考えるが…それじゃただの変態である事に気づき

…
「ポチさん？どうしました？さっき…すごく興奮したように、鼻息をあらくしていましたけど…」

。閉じた目を開けて…何かあったのか…と、自分を心配しているシャリムに

…
ポチ

。「い…いや…いつも心配してくれてありがとな…」

。とつさに思いついたセリフを言うと…

、シャリムが、そんなポチを見上げて

、
「そ…そんな…いいんですよ。」

わたしは、やりたい事をやってるだけですし…」

。嬉しそうに目を細めるので…ポチは、そこから…自分の言葉が目の前の白いローブを着た少女の機嫌を良くしている事に気づき

…
（ひょっとして、俺が褒めると…
この子のテンションを上げる事が出来るのか？）

！
なんという応援効果だ…と自分を褒めていたら…
そこで、シャリムが少し疲れた顔^{つか}をしている事にも気づいて…そこからポチは

、
（そういえば…ゴーレムにタックルをされて飛ばされたあと…すぐに身体の痛みが消えたような気がする…）

。それに身体を強化する魔法をかけてもらった時…
2回魔法をかけてもらったような感覚が、あつた事を思い出し

…
「まさか！？あの時に身体が自然に回復できる魔法も俺にかけていたのか？」

…と、シャリムに聞くと…シャリムは、
「はい。」

実はあの時、身体の強化する魔法だけではなく…
自然回復を強化する魔法もかけていたんです」

。そう言ったあとに…ニコツと、微笑むので…
ポチは、自分を見上げながら微笑むシャリムのその姿を見て…
「ありがとな…」

、
先程とは違い…本心から感謝の気持ちを伝えるのだった…

。

しかし…ポチは、気づいていない…

あの時…シャリムのかけた魔法は、2つではなく…3つだったという事を

：

今もシャリムが疲れた顔をしてるのは…実は、シャリムのかけた、もう一つの魔法…

ダブルペイン《痛み分けの魔法》で、ダメージを半分に分けていたためだという事を

：

自分には、身体を強化する魔法をかけていない…

それでも、シャリムは

、

「がんばりましょうね…。ポチさん…」

。

子猫のような大きな目を細めて微笑むのだった

。

そんな金の髪の小さな少女に…ポチが答えようとした時

：

。

シャルム

「戦闘中に、いつまでいちゃついているんだよ!」

。

今までゴーレムの攻撃から逃げまわっていた、シャルムの声が聞こえてきたので、シャリムは

：

「はっ!そうでした!」

。

口元を左手で押さえながら…

シャルムから…サーチを、サーチを、と…テレパシーみたいなものを送られていた事を…今になって思いだし…

その側^{そば}にいたポチが

「そうだ！俺も、おとりに専念しないと！」

…と、再び柱に囲まれた空間に行っているうちに…
シャリムは、床に置いていた光の球を取りに行つて

…
再び左手に持った光の球で、シャルムの方を照らしながら…

「サーチ。」

どこを攻撃すれば良いか…シャルムに指示した事で

、
どの柱の、どの部分を攻撃するか…分かったシャルムは、
4つの円柱の…左前に位置する柱に…狙いを定めて

「ロックオン」

。自分から2メートル以内の位置にある…その白い円柱に向けて…右手を突き出し…

広げた右の手の平の前で、シュワシュワ…と、大きくなる魔法の光から

…
「ルアイトボアウト！」

、
20センチくらいの、光弾を放ち…

その光弾によつて、柱の一部が破壊されて…ゴォン！と、2本目の柱が折れた事で…

ゴーレムもどきの力が、また弱まるのだった

…

。

《...^u》

第3戦へあの場所を撃て！

ゴーレムもどきは、

2つ目の柱を破壊したシャルムの元へ…

ガシャンガシャンと、走りながら向かっていくと

…

そこから、一瞬だけ間をおいて…シャルムに向かって右の拳を振り下ろす

！

だが…ゴーレムが攻撃する時に置いた一瞬の間を、シャルムは見逃さなかった

…

ゴーレムが振り下ろした右手の拳は…シャルムの身体を貫いた

…ように見えたが、拳で貫いたはずのシャルムの身体は、霧のように消えていき…

。

シャルム

「残念。僕は、ここだよ。」

、

いつの間にか…ゴーレムの背後に、立っていたシャルムが…自分の背中のうしろの方で、

自分の幻影を破壊した…ゴーレムもどきに振り返らずに声をかけていた…

。

そして…ゴーレムが、ギギツ…と、背後にいたシャルムの方を振り返ると…

その時、すでにゴーレムがいる方へ身体を向けていたシャルムが、（やっぱり…

攻撃した時のブレが1本目を破壊した時より、大きくなっている…

それに僕を認識するまでの時間が遅くなっているし…間違いない…
このゴーレムは、1本柱を破壊することに、パワー、バランス、機
動力のすべてが、パワーダウンしているんだ…）

。ゴーレムもどきの状態を分析しているあいだに…
ゴーレムの目の光が、白と黄色が混ざったような光から…
赤い光に変わったので

、
シャルム

（なるほど…認識するのを僕達と同じ視界から…
生体センサーに切り替えたんだ…

これでゴーレムは、実体しか追わなくなるから…
さっきのような幻で釣るのは、できなくなったなあ…。）

、
だが…そこでシャルムは、待てよ…と、自分に見落としがある事に
気づき

…

（ゴーレムは、もともと実体を追うように出来ているはずだ…
だけど、今までのぎこちない動きは…
なるほど…いるんだね…

ゴーレムもどきを操るものが…

そしてそれは、プロではなく…おそらく…

。お遊び半分で、やっている素人かな…）

シャルム

「だとしたら…

。ゴーレム自身が思考する、これからが正念場だ」

そう言ながら…ゴーレムもどきから、注意深く距離をとっていると
…そこに

…
ポチ

「待たせたな！」

、
真打ち登場とばかりに鎧を着たポチが現れ

…
認識しやすいのだろうか？シャルムより身長が大きな事が理由で…
ゴーレムの注意が、ポチの方へいつて…
それで余裕ができたシャルムは、ポチに

、
「来てくれたんだね。ポチ…」

。感謝の気持ちをこめて、声をかけるが…その一方で

、
（あれ？それにしては…

ここに来るまで、ずいぶん時間がかかったような）
…気がしたのだが…

確かに、シャルムの考えている通り…

ポチは今まで…シャルムとゴーレムの激しい戦闘を見て怖がり…
なかなか、ここに来る踏ん切りがなかったのだ

。実際のところ…シャルムが自分の幻を使って、

ゴーレムを手玉にとつてなかったら…

ポチが、この柱に囲まれていた空間の中に

再び入るのには、もっと時間が、かかっていただろう…。

、
そつという訳で…言葉通り…本当にシャルムを待たせていたポチは

、
（仕掛けるか…）

。自分の方を見ているゴーレムに、さらに近づいて

…
「受ける！俺のコブシおおー！！」

、
右手の拳を、突き出そうとした直前で…

ゴーレムは、ポチの顔の前で、ガコォ！…と両手を合わせて、そのせいで

…
（猫だましだとおお！）

…
右の拳を出すのを、躊躇^{ちゅうちゆ}した、ポチの胸部に

ドカァ！と、右の拳を叩き込んだ事で…ポチが、

「キヤーン！」

…と、また柱に囲まれていた場所の外側に弾き飛ばされ

…

そのせいで、緑の目を紫色に変えて…

左奥の場所にある柱の情報を引き出していたシャリムも…

「うっ…」

ダブルペインの魔法で、ポチと痛み分けをしていたので…

胸の部分にダメージを受けるが…それでもシャリムは、何とか踏み止ま^{とど}って

…

【シャリム…あの場所を、撃つて！】

、

シャリムの頭の中に…柱のどの部分を攻撃すべきかを伝え…

その時すでに、その円柱の2メートル以内に近づいていたシャリムは

、

「ルアイトボオウツ！」

、

突き出した右の手の平の前で、シュワシュワと集めた光から放つ、
光弾を使って…柱の一部分を破壊して

：

その部分が破壊された事が原因で… 3本目の柱が折れた事により…

左奥の柱の機能は、完全に停止したのだった

・
・
・
・
・

。

《つづく…》

第3戦《紅円の意味》

ゴーレムパンチ《右》によって、
残り1本となった柱に囲まれていた場所の外まで吹き飛ばされたポ
チは、仰向けに倒れたまま…

ゴーレムの右の拳を受けた、胸のところを右手で触れて

…

（ゴーレムのやつ…

鎧が壊れた場所をわざわざ狙いやがって）

…

「殺す気かあああ！」

、

叫び声をあげていると、そこに例のごとく…シャリムが、

「ポチさん！！」

光の球を床に置いてから、駆けつけて来たので

…

そのせいで…柱に囲まれていた場所の中で、くり出されるゴーレム
の左アッパーを…

ブリッジでもするかのように…うしろの方にぐっと、反ってかわし
たシャルムは、

振り返った状態から身体を戻すと

…

「また暗くなつたよー」

、

そう言つて、困りながらも…

次の瞬間に振り下ろされるゴーレムの右の拳を、残像でも残るよう
な素早いサイドステップでかわしていた…。

そうやって…シャルムが、かつて柱に囲まれていた空間の中で、
ゴーレムから繰り出される攻撃を…つぎつぎかわしていく中

……
その外側の方に弾き飛ばされていたポチが、
シャリムに助けられながら…身体を起こし、立ち上がると

…
シャリム

。「大丈夫ですか？ポチさん…」

。そう言って、自分を助け起こしてくれた、目の前の小さな少女に…

ポチは、

「わん。」

。思っていたより…パンチが直撃した時の痛みが少なかったからな…」

そう話すと…それに対してシャリムが、

「そうですか…良かった…。」

そう答えた時の声色が、なんとなくだが…調子が悪いように感じたので

…
「大丈夫か？」

…と、ポチが声をかけようとした時…

、
シャリム

「くっ…」

、
ガクッ…と、シャリムが、右足の片膝かたひざをついたので…ポチは、

背後にまわって、そこから…片膝をついた小さな少女のお腹のところに両手をまわして持ち上げると…

。シャリム

「きゃあ。大丈夫です。」

大丈夫ですから…離してください。ポチさん。」

、
そう言つて、恥ずかしそうに両手で顔を隠している…金の髪の少女に、ポチは

「いいから！今は休め！

で？どこに行けばいいんだ？」

そう持ち上げながら聞くと…

シャリムは、顔を両手で隠したまま…

「じゃ…じゃあ

前に書いた血の円のところに行つて下さい。」

…と答えたので、それを聞いてポチは

「わん。」

そう返事をしながら…少女を持ち上げた事で、

少女の身体のマシユマロのような…柔^{やわ}らかい感触を感じて…

（うわあ…

この子の髪つて…ホント、羽毛みたいにフワフワしてるよな…

バナラみたいなのオイもするし…いったい何を食ったら、こんなふうに育つんだ？）

。そんな事を考えつつも…血の円のところに向かって歩きだしている
と…

そんなポチの考えを読み取ったのか…

シャリムが顔から両手を離して

「…ポチさんの体毛もフワフワですよ…」

…そう話すので、

それからポチは、血の円のところに行くまでのあいだに…シャリムと

…
ポチ

「ところで、あの血の円って…どんな意味があるんだ？」

、
シャリム

「ポチさんは、マーキングって、ご存知ですか？」

ポチ

「そりゃわかるさ…」

これでも一応コボルトだからな…

犬や猫がおしつことかの、ニオイをつけて…ここは自分のナワバリだと主張するんだろ。」

…

そんな話のやりとりをしたあと…シャリムを血の円の中に入れると…入れた途端^{とたん}に、その血の円から白い光が…天井の方に向かって上昇していき…

。

上昇する白い光の中でシャリムは…曲げた膝に両手をまわす、体育座りをしながら…立っているポチを見上げて

…

シャリム

「それと同じように魔法使いも…血などの自分の身体の一部を使つて…」

円や魔法陣などを書く事によって、自分のフィールドを作るんです」。

だからあれは、マーキングみたいなものだ…と説明し…

それで納得したポチは、そこから50センチくらいの大きさの血の円から…

この部屋の天井に向かって、柱のように上昇する光の中で体育座りをしながら…身体に受けたダメージを回復している…シャリムを見下ろして

…

（考えてみれば…この子もシャルムも…俺の半分くらいしか身長がないんだよね…）

。そう考えたあとでポチは

、

「俺も、もう少し、がんばってみるか！」

…そこから歩いて…床に置いたままだった光の玉を、休んでいるシャルムに届けると…

。

そのあとシャルムとゴーレムが待つ…柱に囲まれていた場所に向かうのだった

．．．．．

。

《つつく…》

第3戦へ調子の乗りすぎには、注意しよう

3本の円柱が折れて、1本の柱が残った…その空間の中で…

シャルムは、自分に向かつて右拳を放つゴーレムから…すり抜けるように移動して…ゴーレムの背後に立つと

…
ゴーレムに背中を向けながら…

「無駄だよ。」

パワーもスピードも元の状態の半分以下となった君の動きは、もう見切った」

…
そう言ってから…ゴーレムの方を振り向いて

…
（でも…見切ったのは、単発の攻撃だけで…
コンビネーションみたいな繋^{つな}げる攻撃がきたら…今みたいに、かわせるかどうか分からない…。

それに…）

。しばらくのあいだ、息をつく間もなく、動きまわっていたので、シャルムの表情にも疲労の色が出はじめていた…

。そしてシャルムは、ギギツ…と、自分の方へ身体を向けるゴーレムを見ながら

…
「でも、このままだと…

攻撃を避けるのが精一杯で、柱を攻撃できないよ。

。一体どうすれば…」

八方ふさがりの今の状況に…シャルムにしては、珍しく弱音を吐い

ていると…そこに

……

「じゃじゃじゃーん！」

。

自分登場のテーマを、口ずさむポチが現れた…

。

そして胸の部分が砕かれた鎧を着たポチは、

ここに登場する前に…シャルムの困った顔を見ていたので

…

「仲間のピンチにテーマに合わせて登場するなんて…なんて俺…クオリティ」

。

ゴーレムから距離をとりながら…どこかの3流男のように自分に酔っている

…

今、ポチが自画自賛をしているその登場テーマに…シャルムは

、

「さすがだ…さすがだよ。ポチ！

自分登場のテーマなんてものを、躊躇ためらいもなく使いこなせるなんて

！そこに痺しびれるう！あこがれるうっうー！」

…

思わず手に汗を握りながら叫んでいた！

。

そしてまるで魂の叫びのように…意識の最も深い場所から放たれたシャルムの雄叫おたけびは、

遙はるかな勇気となって、ポチの頭の中に響き渡り

…

ポチ

（シャルムが…あのシャルムが…俺に憧あこがれている…

これは…なんという俺のターン…）

臆病^{おくびょう}なポチの胸の奥にかすかな灯火^{ともしび}を与えてくれた…。

だが本番は、これからで…ゴーレムから距離をとっていたポチは、シャルムが右奥に残された1本の柱を攻撃する時間を稼^{かせ}ぐために…5メートル近くあったゴーレムとの間合いを少しずつ詰^つめてゆき…その距離が2メートル近くになった時…

ポチの顔を狙^{ねら}ってゴーレムの右拳が、ビュッ…と放たれる！

そしてその一歩前に踏み出した右足と共に放たれたゴーレムの右の拳に…ポチは、

（キター！）

…と反応して…上半身をおもいつきり右に傾ける事で、かわそうとするが

…
次の瞬間！？

放たれたゴーレムの右拳は、途中で、ひっこめられて…変わりに

…
シャルム

「！？違います！ポチさん！左からの攻撃です！」

。血の円の中から…立ち上がったシャルムが、叫^{こゑ}ぶ通り…

クルンと、背中ごしに回転しながら放つゴーレムの裏拳が…ポチの左側から襲^襲ってきたので、

ポチは、右側に傾けていた上半身を無理やり起こしてから…横顔を守るために構えた左腕で、ガシッと、

ゴーレムが左足と共に…背中ごしから踏み込んだ左の裏拳を防ぐが

…
「うおっ！」

、いくら弱ったとはいえ…2メートルクラスのストーンゴーレムの裏

拳なので…

。 思わず足が2、3歩、右側の方よろけてしまう…

だが、そのあいだに…

サーチの魔法を使ったシャルムから、テレパシーのようなもので…
右奥にある柱の情報を伝えられていた…シャルムは、

今、自分から2メートル以内の場所にある…その柱に向けて、右手を突き出し…

その右手の手の平の前で、エネルギーを集めて…そこから

…
「ルアイトボアウト！」

！

20センチくらいの、光弾を発射して！柱の一部を破壊したので…
そこから上の柱の部分は、ドズウン！…と、床の上に落下して…すべての柱の機能が停止すると

…
その光景に、気をとられていたポチが

、

（よし！これでゴーレムに、魔法攻撃が通じるようになるな。）

あとは、ゴーレムだけだ…と、ゴーレムもどきがいた場所に視線を戻す

。

しかし視線を戻すと…そこにゴーレムの姿はなく

…

シャルム

「左だ！ポチ！！」

、

シャルムの叫ぶ声に反応して、左側に顔を向けると

…
！？

そこには、空中で逆さまになっているゴーレムの姿が、ポチの目に映っていたので、

（上か！？）

…と、ポチが左側に顔を向けたまま…少し上の方へ視点を移すと

…
逆さの体勢で宙に浮かびながら…左足を曲げた反動で…ポチの頭の方に振り下ろされたゴーレムの右足が…今にもポチをとらえようとしていたので

…
（オーバーヘッドキックだとおおお！）
。

ポチは、どちらかの方の腕でガードしようと考えが…このままでは、間に合いそうにない

…
ポチ

（俺のターン…終わった…。）

…
はたして、すでに短い人生だったと嘆く…^{なげ}ポチの運命は
…
…
…
…？

《そして！戦いは、クライマックスへ…》

第3戦〈18秒の世界〉

ポチが顔を横に向けると

…
空中で逆さまになる事で… オーバーヘッドキックの体勢に入ったゴーレムの右足が、ポチの頭をとらえようとしていた…。
だがその時

…
シャルム

「させるかあああ！」

。

ドロップキックで迎撃^{げいげき}したシャルムの両足が、
オーバーヘッドキックの体勢に入ったゴーレムの左の脇腹^{わきばら}に、ドカ
ア！と、激突して…
そのせいで… ゴーレムは、空中で逆さまになった体勢が崩^{くず}れて、右
側の方に落下していったので

…
ポチは、ゴーレムがシャルムに迎撃された事に気づいて

…
(今だ！)

…と、その場を離れた時

…
ドロップキックをしたあとに、すぐ体勢を立て直したシャルムは、
「ジャンプ！」

…と、跳躍^{しゅやく}力を増す魔法で、ハイジャンプをすると

…
同じ時間に、シャリムの方から…

10センチくらいだろうか… 青と緑の2つの光が、円を描きながら
… ハイジャンプしたシャルムの方に向かって、飛んでいき

…
「シャルム！」

わたしの残りの魔力を、あなたに託します！」

、
血の円から、立ち上がったシャリムが見守る中…

ハイジャンプで3メートル上空まで達したシャルムは、円を描きながら飛んで来た2つの光のうち…左手には青き光を…

右手には緑の光を…それぞれ受け取ると…

受けとったその2つの光がシャルムの両手に…染み込むように宿って…

それからシャルムは一瞬の時間で、上、下、左、右、斜めと、いろんな方向に目をやり…自分の状況を確認すると

…

（地上から3メートル…僕の魔力で、この地点で空中停止できる時間は…およそ18秒…）

。

シャルムはここで、両手に宿った魔力を利用して

…

「この18秒で、すべてを決める！」

…と、倒れていた状態から起き上がりかけている…ゴーレムに向かって…

…

突き出した左手の手の平の前から…大きな氷の塊かたまりを打ち出し

、

シャルム

「食らえ！」

、

さらに突き出した右の手の平から…その氷の塊に向かって、螺旋状の風を放つ

。

シャルム

「合体魔法！」

…
そして、右手の前から放たれた竜巻のような螺旋の風は…

その風の中に巻き込まれた氷の塊を、粉々《こなこな》に砕き

…
シャルム

「アイストオンム！」

、
それで出来た… たくさんの氷の欠片は、研ぎ澄^すまされた多数の氷の刃となって、螺旋の風と共にゴーレムに襲^{おそ}いかかる…

そして、シャルムの両手から放たれた凍^いてつく竜巻は… ゴーレムを部屋のはじの方へ吹き飛ばしながらも…

吹き飛ばされたゴーレムの手、肩、腕、胸部などの… あらゆる場所を凍^{こお}らせていき…

そのゴーレムが胸部や腹部などの上半身を中心に凍^{こお}ってゆく光景を… 空中に浮かびながら見ていたシャルムから

、
「シャルム！今のうちに、ゴーレムを倒^たしたという偽^{にせ}の情報を魔法陣に打ち込むんだ！」

…と、大きな声で呼びかけられたシャルムが
左手に光の球を持ったままで

「はい！」

そう返事をしながら…

上へ向けた右手の手の平の上に… ポワツと、

その球体の中に… いくつもの青白い光の文字や記号が刻まれている

… 20センチくらいの白色の光の球を出現させて

…
その白い光の球体を、右の手の平のところに固定させたまま…

クノイチのようなものすごい速さで… かつてゴーレムの足元にあっ

た魔法陣のところまで駆けていくと

…
その魔法陣の上で左足の片膝について…

右手の手の平の先にある…情報の詰まった光の球を、床に描かれた魔法陣に向かって…バン！と、叩きつけるように打ち込み

。そして…空中から落下して、今にも地上に足がとどきそうなシャルムと共に…

、
シャルム&シャルム

「扉よ！ひらけえ！！」

…と、大きな声で叫ぶ！

、
すると…今、シャルムの足元にある…五芒星の魔法陣が赤く輝き出した事で…

石の壁に、扉の形で青く染まっていたところが薄暗い空間へと変わっていき…

床に着地して、それを見ていたシャルムは

、
「今だ！出口に向かって走れえ！！」

、
シャルムとシャルムがゴーレムと戦っているあいだに…取りに行っていたリュックを背負ったポチと

…
魔法陣から立ち上がったシャルムに向かって叫び

…
ポチ&シャルム

「おおー！！」

、

呼びかけたシャルムは、石の壁の中に出て来た薄暗い空間に向かって走り…

シャルムに続いて走った…ポチとシャリムも、シャルムのあとに続いて…この部屋を出るのだった

・
・
・
・
・
・

。

そして…

壁のはじの方に吹き飛ばされたゴーレムが…上半身を、氷で覆おおわれながらも再び起き上がった

…

出口である薄暗い空間も…元の石の壁に戻った時…

部屋の中には、もうポチと子供達の姿はなかった

・
・
・
・
・
・

。

第3戦〈18秒の世界〉（後書き）

《後書き》

次回は、

星宮という貴族のような

人達の会話から

始まるので

何だと思つかも

しれませんが

・・・

それは、物語の中継点の

ようなもので…

それが終われば

ポチ達の冒険の続きに

変わりますので

どうかこれから

よろしく願います。

《星宮の思惑》

。 周囲12メートル四方は、あろうか…

薄暗い部屋の床に3メートルはある…大きな五芒星が描かれている…
その赤く光る魔法陣の上に…紫色のローブを着た黒髪の男が立って
いた…

。 ???

「まさか…ゴーレムの部屋を脱出するとはな…」

。 魔法陣の上で、そう話す…その青い目をした少し長めの黒髪の男の
ところに

…
??? ?

「このままでは、パンテオンの警護の人数を減らして、わざと行か
せた子供達を…あの洞窟で殺して、

脱出を手引きした者として、元老の一人を失脚させる星宮様の計画
にも…支障が出るのでは、ないのですか？」

…と、黒髪の男を星宮と呼ぶ…青いローブを着た長い銀髪の青年が
近づいてきたので…

その腰まで届きそうな長い銀髪をした青い目の青年を見た星宮は、

「フェルゼか…」

。 その銀髪の青年の名前を告げたあと、ニヤリと笑って

… 「その事なら心配ない…

あの先にあるのは、ヘレルがナインクールを封じたといわれる場所
だからな」

。そう言うところ…フェルゼと呼ばれた長い銀の髪をした青年は、

「ナインクールですか…確か当時もつとも若い元老で…

純血主義を主張して、それに逆らう者をつぎつぎ殺していた男ですよね…」

。過去にあった出来事を星宮に話し…それを聞いた星宮は、魔法陣の上から

…「それだけではない…

奴は、純血派の勢力を拡大するために…他の国の血が混ざった元老や星宮達を、つぎつぎ暗殺していた。

私は純血の星宮だが…奴は、殺しの対象がいつ変わってもおかしくない危険な男だから…。

それに奴は、強力な魔術師でもあったから…戦っても勝てるはずもない…

だから当時は、いつか殺されるんじゃないかと…身体を震わせていたものさ」

…自分のすぐ近くまでやって来たフェルゼに…当時に思っていた事まで説明する。そして…

。フェルゼ

「だから…いつそのほこ先が自分に向けられるかを恐れた純血の元老院や星宮の方々《かたがた》は、

ナインクールの親友でもあった魔術師ヘレルに…彼の討伐を願いだしたのでね。」

…足元に黒い靴を履いたフェルゼが、その話をすると…

、
同じような靴を履いた星宮が

「奴は、ナインクルの…いきすぎた行為に胸を痛めていたようだからな…」

私達が皇帝陛下に働きかけた事もあって、奴は、親友を倒す覚悟を決めたようだった…」

。フェルゼに…ヘレルとナインクルが戦うようになった訳を説明して

…
「それで、あのパンテオンの奥深くまで呼び出されたナインクルと、

そこで待っていたヘレルが戦った訳ですね…」

。フェルゼがそう話すと…星宮は、

「そうだ。

ヘレルとナインクルの戦いは、7日間にも及んだが…

結果は、我々の予想通り…ヘレルが勝ち…」

その戦いで魔力を封じられたナインクルは、
魔力を封じたヘレルによって…パンテオンの地下の洞窟の奥深くに閉じ込められた…。

。あのゴーレムもどきも、万が一の事を考えて…我々が置いたものだ」

なんと、あのゴーレムもナインクルを恐れた星宮達に置かれたものだと話し

…
フェルゼ

「それで、そのあとナインクルを倒したヘレルは、どうなったんですか？」

…
その後のヘレルの行方が気になったフェルゼに…星宮は

「暗殺者を送りこんで…彼にも死んでもらったよ。」

彼は正義感の塊かたまりみたいな男で、生かしておく…いろいろな厄介やっかいな相手だったのですね…。
まあ彼は、ナインクールとの戦いで、力を使い果たしていたようだから…殺すのは簡単だった…」

。なんと、ヘレルがすでに殺されていた事を暴露ばくろしたので…話を聞いたフェルゼは、そこでニヤリと笑って…

「なるほど…ケンカ両成敗という訳ですね…」

。自分達に都合のいい解釈をすると…そこで星宮もまた…ニヤリと笑い…

「ああ…確かにケンカ両成敗だ。」

元老の一人だったナインクールがやった事が世間に広まれば、元老達の評判を落とす。

。だから元老達は、元老ではない者に、その泥どろを被かぶってもらう必要があつた訳だ…」

フェルゼ

「それがヘレルだと…」

星宮

。「そつだな…彼には悪魔になってもらった…」

フェルゼ

。「同じように…あなたも元老の一人に泥を被せようとしてらっしゃる…」

、
そう言う…青いローブを着た青年に

星宮

「時代は、繰り返すってね…。私が元老になるためには、一つ空席が必要なのだよ…」

。 紫色のローブを着た男は、そう言って…さらに

…

星宮

「コボルトと子供達は、おそらく異なる扉と呼ばれる場所を目指すのだらう…」

。 まさか…ナインクールがヘレルの話に釣られた理由と同じとはな…」

これも運命のいたずらか…と、つぶやいたあと

…

星宮

「だが、あそこに行くためには…」

ヘレルが封印した、ナインクールの魔力を守るために…用意された剣士がいるところを通らなければならない…

そして…あの剣士と最初に戦う時…魔法使いでは勝てない…。

…アレに気づかない限り…魔法使いでは、絶対に勝てんのだ!」

。 そう言って、フハハハハ!と高らかに笑うのだった

。

《13話へ続く…》

第13話〈幽体離脱?〉

ゴーレムもどきがいた石室を脱出したポチ達は…

先頭を歩くシャルムの…左手に持った、光の球の光に照らされながら歩いていた…。

そんな中ポチは、自分の前を歩くシャルムの足元と…自分の隣を歩くシャルムの足元を見て

…

（よくサンダルを履いて、あんな凄^{すご}い動きができるよなあ…）

ゴーレムとの戦いを思い出して…感心していると…

そう考えてるあいだに…自分の身体が、魔法にかかる前の感覚に戻っている事に気づく…

そんなポチの様子に…わずかな変化を感じたのか…隣を歩くシャルムが

、

「どうしたの？ポチ」

…と、ポチの方を見ると…歩きながらポチが

、

「あ…いや…どうやらシャルムにかけられた2つの魔法の効果が今、切れたようだ…」

。

そう話すので…シャルムは前を向いて、前を歩くシャルムに

…

「二つもポチに魔法をかけたの!？」

。

びっくりしたようすで、話しかけると

…

白いローブを着たシャルムは、照れくさそうな顔で

…
「あの…えっと…だって、心配だったんだもの…」

、
左手に持った光の球の表面を…右手の人差し指の指先で、キュッキュと、いじりながら…前を歩くのだった…

。それから少し歩いてるうちに…シャルムと先頭を変わって…
右手に持った光の球で、あたりを照らしていたポチが、右端^{みぎはし}の方を見ると

…

なんと、そこに金で縁^{ふち}取られた50センチくらいの赤い宝箱があったので…

ポチのうしろを歩いていたシャルムが…

「宝箱だ！」

、

その宝箱のところに行って、しゃがんでから…宝箱を力チャツと、開けると

…

なんと中には、干^ひからびた草のようなものが入っていた…

。それを見たシャルムは、

「こ…これは…」

、

何か言おうとすると…ポチと一緒にシャルムのうしろに立っていたシャルムが

、

「どうやら薬草だったものようですね…」

。

そう言って…それに対してシャルムがしゃがんだまま…

「薬草だった？」

宝箱は、けっこう新しく配置されたもののようだけど…」

その事を不思議に思っていると…シャリムが

「薬草は、あくまで草の種類の一つです。

日が経てば干からびもしますよ」

それについて答え…その答えを聞いたシャルムは、不満そうに…

「なーんだ。」

…と宝箱を閉じて、立ち上がると…

立ち上ったシャルムの後ろでポチが、

「だ…だけど！」

物語に出てくる薬草は、そのまま使えるようになってるじゃないか

！」

納得できないのか…少しだけ大きな声で叫ぶと…

その隣からシャリムが…

「まずは、歩きましょう…。」

…それから前を歩くポチに向かって…

シャリム

「これは、あくまで一つの説ですが…

おそらく…物語に出てくる薬草や武器といったものは、魔法などの
力を使った冷凍保存などの方法で…

適度な温度を保つように作られた特殊な宝箱の中に、入れられてい
ると思われます…」

だから干からびもサビついたりもしないのだ…と、

私達の世界の冷蔵庫の理論にも似た…物語に出てくる宝箱の秘密を話し…

それを聞いて

ポチ

「物語に出てくる宝箱に、まさか…そんな秘密があつたなんて…」

「なんとという事だ！…と、ショックを受けるポチの前では、なんと

！路が2つに分かれていた…」

。

…

1Ⅱ 右の道に進む。

2Ⅱ 左の道に進む。

！

突然つきつけられた二つの選択のうち…

「3だ！」

…を選んだポチに納得できないのか…うしろからシャルムが

、

「そんな道！どこにもないじゃないかあ！？」

…と、叫び声をあげると…そんな雄叫びをあげるシャルムに、まあ

聞け…とポチは

、

「俺が読んだ冒犬ミステリーでは、こういう時、隠された選択肢がよくあるんだ。

洞窟の壁を調べてみる。

きつと…隠された通路が見つかるはずさ…」

。

「そう言うので、それで納得したのか…」

、

シャルム

「そうだったんだ…。」

シャルム

「わかりました。調べてみましょう…」

それから二人の子供達は、まわりの洞窟の壁を、手で触^{さわ}るなどして調べてみるが…特に変わったところは見つからず…作業を止めて

シャルム

「ポチー…」

青色の半目で自分を見つめる子供の一人の前で…

ポチは、光の球を地面に置いてから

「あ…暑いなー。」

着ていた鎧^ぬを脱いで、茶色い服装になると…

それから再び光の球を右手に持って

ポチ

「シャルムさん…お願いします。」

私達の世界で視聴される…江戸の時代劇でよく見られている…

先生と呼ばれる浪人に頼む…どこぞの悪徳商人のようにシャルムに頼みこみ…

頼まれたシャルムは、

「はい。」

…と、困った顔で、笑ったあと…お腹の前で両手を組んで…

精神を集中させるために緑色の両目を閉じると…

そんなシャリムを見る、ポチの目に…

（なに？）

一瞬、オーラのようなもので出来たシャリムのような姿が…シャリムの頭上に浮かび上がるのが、見えたような気がしたので…

ポチは、その時見えた幽霊みたいな姿の事が

…

（なんだ？あれは…）

…と、気になっていたが…それについてポチが考えているうちに…シャリムが目を開けて

、

「左へまっすぐ行くと行き止まりです。

右の方へ行きましょう」

。

そう言うので、ポチは

、

「わかった。右の道だな。」

…と答えたあと…

右手に持った光の球で、あたりを照らしながら…子供達と一緒に右の道へ進むのだった

.....

。

《14話へ続く…》

第14話へポーシヨンの悲劇へ前編

洞窟を歩いている途中…道が2つに分かれ

…

シャリム

「左の道をずっと進めば…行き止まりです。

右の道へ進みましょう」

…と、肩にとどくくらい長い金の髪の少女が言うので…

右側の路を選んだポチは、右手に持った光の球で、あたりを照らしながら歩いているうちに…

ここへ行く決め手となったシャリムの言葉を思い出し…

「ところでさ…何で左側の方が行き止まりだって分かったんだ？」

。

その理由を、うしろを歩くシャリムに聞くと

…

「それはですね…」

答えようとしているシャリムの隣で…シャルムが歩きながら

…

「アストラル投射。

分かりやすい言葉で言えば、幽体離脱をしたんだよ…」

そう言うので…そこでポチは、シャリムが目を閉じた時の事を思い出して

…

「なあ、シャリムが目を閉じた時、一瞬だけど…シャリムの頭上に…もう一人のシャリムが出てきたような気がするんだけど…あれも何か関係あるのか？」

…

歩き続けながら、その事を話すと…

うしろを歩いていたシャルムは、ポチの隣で歩けるように足を速め

てから

…「普通は、目に見えないものなんだけどね…。

僕達、魔法使いの世界では今ある器の身体のほかに、もう一つの身体があると言われているんだ…。

その身体は、アストラル体と呼ばれる星幽界という魔法使いの世界を旅する身体で…

エーテル体と呼ばれる魂を守るための身体と言われている…。

アストラル投射とは、

自分の意志で器の身体の中から抜け出させたアストラル体を現実世界で移動させて…

その時に見たり感じたりしたものを、情報として自分の頭の中に伝える事なんだよ。」

…「つまり夢に近いものだと言えば分かりやすいかな…と、今隣を歩くポチの方を見るので…それに対してポチが

、
「ずいぶん難しい事をしてるんだな。」

そう答えると…シャルムは、

「火の球や光の弾を出す時の方がずっと難しいよ。

なぜならあれは…本来こうあるべきだと定められた自然の法則をほんの一部とはいえ変えなきゃいけないんだからね…。

例えば火の球1つにしても…

感覚を研ぎ澄まし…熱くなった手の平の前から、大きなエネルギーが飛び出していくのをイメージする事を…

何千回、何万回とくり返す事によって、やっと出来るようになるんだ。」

…「何事も努力が大事なんだ…と、

隣で、右手に持った光の球で…あたりを照らしながら歩いているポ

チに伝えると…そんなポチの目に

「宝箱だ。」

…

前に見たものと同じくらいの大きさの宝箱が

これから行く道の左端ひだりはじの方に置いてあるのが見えたので

…

「僕がいくよ。」

その金で縁取られた赤い宝箱のところまで行ってから…しゃがんだ
シャルムが、両手を使って宝箱を開けると

………

なんと中には、フタのついた青い瓶が入っていた

。

「ポーシヨンか…でも中がすごく濁にごっている…」

。

その瓶を右手に持って話すシャルムのうしろで…ポチと並ぶように
立っていたシャリムは

、

「おそらく長時間ここに置かれているうちに…湿気にやられたので
しょう…」

だいたい他の水分が混ざっているようなので、回復の効果は期待でき
ませんね」

…と、とても残念そうに話すので…

それでがっかりしたシャルムは、

「今度は、湿気かよお」

。

残念そうな顔をしながら…右手に持った青い瓶を宝箱の中に戻した
あとに…その宝箱を閉じると…

すぐに立ち上がった

…

ポチ

「なんというポーシヨンの悲劇だ！」

、
うしろで嘆く茶色い服を着たコボルトと…シャルムと一緒に先に進むのだった…

。…
それから…右手に持った光の球で、あたりを照らしながら先頭を歩くポチのうしろで…

。シャルム

「2つの宝箱を見て思ったんだけど…
もしかして？中に入ってる物より宝箱の方が価値が高い場合って、
けっこう多いんじゃないかな…」

。…
これまでの宝箱からそう考えた…と、突然シャルムがその話を切り出し…それを聞いたポチが

、
「問題はそこだけじゃない…。

シャルムの話を聞く限り…物語のように宝箱を発見した人達が役立つアイテムを宝箱の中から取り出すには…

宝箱が置かれた直後に宝箱を開けるか…
定期的に魔法などを使って、適度な温度に保たれた宝箱を開ける必要がある…

。…
一体どうすれば…」

この問題は解決するんだ…と、ポチの後ろを歩くシャルムと悩んでいると…

そこにシャルムの隣をサンダルで歩いていたシャルムが

「まず魔法を使える事が前提でメンテナンスなどをして、宝箱の調整おこなを行える敵役かたきやくが必要になります…」

あくまで1つの案ですが…と、シャリムなりの解決方法を話し…

それを聞いたシャルムが、シャリムの方に顔を向けて…

「バカな…それでは、まるで…」

そのあとを答える前に、シャリムが、

「そう…

舞台裏で暗躍あんやくする黒子くろこのような敵役が物語の冒険場所には必要なのです」

私達の世界で視聴される…かつての日本の時代劇の黒子のような存在が必要だと話し…

そのあと、さらに

…
シャリム

「それに…もし、物語のようなダンジョンにしたいのなら…

問題は、宝箱だけじゃなくりますよ」

。物語のような展開にするには、まだ足りない事がある事を伝えて

…
ポチ

「えっ？」

、
シャルム

「何!？」

、それを聞いた事で…前を歩くポチが、ブラブラさせていた左手をピタツと止めて…

そのうしろでシャリムを見る、シャルムの青い目が大きく見開かれ

る…

。

はたして…シャリムが言う問題とは…？

そして…ポチと子供達は、人知れず繰り返されるポーションの悲劇を回避できる方法を見つけられるのだろうか

．．．．．

。

《後編へ続く…》

第15話へポーションの悲劇へ後編

《前編の続き…》

。 シヤリム

「物語のように…冒険者を生き残らせながら成長させていくには、その冒険者に合わせた敵のレベルと…

冒険の途中で冒険者達が休息できるような暇を与える事を…敵の方に徹底させる必要があります。」

…
「なお敵のレベルは、強すぎても駄目だし…弱すぎても駄目らしく…
ぜつみょう 絶妙なバランス感覚が、それを命令する敵のボスに求められるという

…
サンダルで歩きながら…それを話すシヤリムの横顔を見ていたシヤ
ルムは

、
「バカな…それじゃ倒されなきゃいけない敵の負担が大きすぎる…
それにそんないたれりつくせりな展開は、誰も望んでないはずだよ

！」

、
押しつけがすぎる！と…悲しそうな顔で話すと…

シヤリムは、シャルムの方に顔を向けて

…

「じゃあ、なんですか！

魔物さんといった配下の敵を自由にさせて、冒険者さん達を殺しても良いとでも言うのですか！」

。

そう言って、顔を戻すと

…

シャルム

「そんな事したら…そのダンジョンのボスは、冒険者に倒されたあとも…他のダンジョンのボスにこれだからゆとりは…と言われ続ける事になるんですよ…」

残酷な敵役の運命を…足元を見ながら話すので…

そんなシャルムの話で…前を光の魂で照らしながら歩くポチと…ポチの後ろにいる子供達のあいだに少しの時間…沈黙が訪れる…

そして、そんな沈黙を打ち破るかのように…前を歩いていたポチが「だけどさ…」

仮にシャルムの話を確認るにしても…そういうふうにもっていくためには何が必要なんだ？」

そもそもこれがポーションから始まった話だと言っのを忘れたのか？みんな…と、うしろを振り向かず話すと

…
シャルム

「お金と洗脳だろうね…」

下の敵には、上層部が冒険者は敵だと言う事を徹底させて教育して、ダンジョンのボスなどの…上層部の敵役には、冒険者に倒されたあとに雇主が…家族にお金を渡す事を約束するための保険金のようなものをかける…

そんなところかなあ…」

ポチのうしろを歩く黒いローブを着た少年が…怖い事をサラッと、話し

…それを聞いたポチが…その少年シャルムの前で辺りを照らしながら

…

「それじゃ下の敵役が可哀想かわいそすぎるだろ。」

…と本当に嫌そうな声で話すと…

シャルムの隣をサンダルで歩いていたシャルムが

「ただ…そういった事を行う敵役のボスの方には、物語の主人公である冒険者達を成長させるようにするための冷静な視点と

そうするために絶妙な場所に敵を配置できる戦術的な視点…

そして最後は、自分は負けてもいいと覚悟できる自己犠牲の精神が必要になります。

あつ…それと迫力はくりよくのあるセリフが言える演技力も必要ですね」

それだけの条件を揃そろえた高潔こうけつな敵役が居いないと…とてもじゃないが無理だ…と話し…

隣を歩くシャルムがそれに対して

「そんなボス…人間の方にも欲しいよ。」

そう…自分より10センチくらい小さいシャルムに話すと…

シャルム

「人間であろうと…モンスターであろうと…

リーダーに求められのは、みんな一緒だと言う事ですよ…。

それだけ人格的な敵役なら…軍資金や宝箱を与える雇主の人間にも信用されているでしょうし…」

雇主を人間と想定そつていして話すシャルムの話に…

その隣を歩くシャルムは、顔をシャルムの方から正面の方に戻して

シャルム

「けつきよく何者であろうと…」

信用が第一という訳なんだね…。

けどそうになると…雇主にも敵役を見る目が要求されるなあ…」

。そう話すと…そこに子供達の前を歩くポチが

、
「だけど…いくらその敵役が覚悟を決めたとしても…配下の敵役が
言う事を聞くとは限らないだろう?」

、そこは、どうするんだ?と…子供達の会話に口をはさんで来たので

…
シャルム

「手段を選らばなければ…方法ならいくらでもあるよ。」

。例えば集団催眠を定期的にかけて言う事を聞かせるとかね…」

シャルムの隣を歩くシャルムが、サラツと怖い事を話して聞かせて

…それに対してポチから

、
「それじゃペテン師とやり方が変わらないじゃないか!?」

、シャルムの予想通りの答えが返ってきたので

…
シャルム

「だけどそうしないと…他の敵役のボスから臆病者扱いおくびょうあつかをされてしま
うんだ。

、
つらい立場なんだよ。敵役の上役も…」

もちろんそれは想像にすぎないが…きっとそうになるとシャルムが話
すと

…

ポチ

「うわあ…胃が痛くなるな。それは…
少なくとも俺は無理だ」

。そう話すポチにシャルムは、

「まあ確かにポチは…敵役のボスと言うよりは、かませ犬かな？」

、そっちの方が合ってるよとポチに答え…それを聞いたポチが、ピタツと足を止めてから…うしろを振り向いて

、「誰がうまい事を言えと！」

、シャルムに向かって叫ぶと…

ポチが止まったせいで…シャルムと一緒に足を止めたシャリムに

…「ポチさん。ポチさん。

そこは怒るトコですよ」

。そう言われたポチは

、「そうか…確かにそれじゃ負け犬みたいだもんな」

…と言ったあと

…光の球を持った右手を左手と一緒に背伸びをするように上に伸ばしながら

…「誰が負け犬だー！」

、雄叫びをあげていたので…それに納得できないシャルムが「言っただの！自分じゃないか!？」

、
まるで逆ギレだ！とポチを見上げると

…
シャルム

「…ところでこの話は、最初…
宝箱をなんとかしようと言った話だったのでは…」

。いつの間に話がこんなに遠くまで飛んでしまったのだろっ…と言っ
シャルムの話を聞いて

、
ポチ

「……。」

、
両手を下ろしたポチが無言で、光の球で前を照らしながら先に進むと

…
シャルム

「……。」

、
ポチと一緒に沈黙したシャルムも、シャルムと一緒にポチのあとを
ついて行くのだった

……。

…
そのあと…ポチと子供達は、そのまま進んでいるうちに…やがて広
い場所に出ていた事に気づく

…
はたしてポチ達がたどり着いた場所とは

……。

？

《16話へ続く…》

第15話へポーションの悲劇へ後編（後書き）

。

子供達の会話は、
フィクションであり…
現実には執筆されている
ファンタジーや物語とは、何の関係もありません。

第16話へナインズゲート

《15話のつづき》

ポチ

「こ…こは…」

ポチと子供達は、洞窟の中を歩いていくうちに…

20メートルはあろう…円の形に広がる場所に出ていた…

そして思わずそこで立ち止まったポチの隣で…

シャルムと一緒に並び立ったシャリムが

「あそこを見て下さい！！ポチさん！」

突き出した左手の人差し指の先には…10メートルはある四角い穴が広がっていた

…

。

シャルム

「見たところ…僕達が通ってきた場所以外通路がないようだ…。

そうなる…」

。

ポチ

「隠し通路をさがすしかないな…」

。

シャルム

「いい加減！その話題から離れようよ！」

、

そんな話のやりとりをしながらシャルムが、
右手に光の球を持ったポチを見上げていると…そのシャルムの隣に

いたシャリムが

「この大穴のある場所は…確か…ヘレルとナインクールが戦ったと言われてる場所ですね…」

。そう話すのでポチが

「へえー…どんな話なんだ？」

…と、シャリムの方を見て聞くと

…
シャリム

「最初この洞窟には、あそこにある大穴はなかったそうです…。
だけど、この場所でヘレルとナインクールが戦って…ヘレルが7日間の戦いの果てにナインクールを倒した時…」

友を裏切ったヘレルに対するナインクールの怨念おんねんの言葉が、この大穴を作ったと言われています…」

。そしてシャリムは…シャルムの隣にいるポチを見上げて

…
「ナインズゲート…」

。あの穴は、そう呼ばれているそうです…」

。そう言う…あの穴のある場所に緑色の視線を戻す。

、そのあと…シャルムが

「確か…ナインズゲートの奥に異なる扉が、あるんだよね。」

…と隣にいるシャリムに聞いて

…
シャリム

「はい。」

シャルム

「じゃあ僕達の目指す場所は、あの大穴に飛びこまないといけない訳か…」

面倒だなあ…と顎に右手をそえて考えていると…

そのシャルムの横でポチが、

「行くしかないだろう」

…と右手に持った光の球で前を照らしながら…歩き出して

シャルム

「ポチさん？」

シャルム

「ちよつ…待ってよ！ポチ！」

シャルムとシャルムがあとを追いかけると…

ポチは、すぐに立ち止まって

…「その前に休憩しようぜ。」

…と、急に振り向いてから二人に言うので…

それで勢いを殺された子供達は、まるでリアクションをする芸人がコケるように

シャルム&シャルム

「だああー！」

足を滑らせて、転んでしまい

…シャルムの方は…背中が地面に着く直前に右膝を曲げて

…
「くっ…」

右手の手の平と曲げた右足の裏をビタン！と、とっさに地面に叩く事で受け身をとったが

…
シャルムは、地面に背中を打ってしまい…

「かはっ…」

。10ポイントを遥かに超えるダメージを受けてしまったのだった…。
…そのあと…すぐに起き上がったシャリムの横で

、
シャルム

「バ…バカな…リアクションを取るのがこんなに難しいなんて…」

。背中に土をつけたシャルムが、ググッ…と上半身だけ身体を起こすと…

そこにポチがやって来て

、
「フッ…どうやらお前も…やられ役の苦勞が分かったようだな…」

、
俺もただかませ犬をやっている訳じゃないんだ…とシャルムを見下ろす

。すると…その時ポチが右手に持っていた光の球の光に当てられたシャルムが

…
「うわ…眩し」

！上半身を起こしたまま顔を背けているあいだに…シャリムがポチの

ところにやって来て

…
「ポチさん…あの…リュックを下ろしてもらえませんか？」

、
ポチの茶色い服のすそを…くいくい…とひっぱりながら言うので…
シャリムがすそから手を離れたあとにポチが、

「わかった。」

…と光の球を一回地面に置いてから…リュックをおろすと…

シャリムは、ポチが地面に置いたリュックの中から…^{たた}畳んである大きな布を取り出して…

その畳んである大きな布を…両手を使って広げてみせる…

。それを見たポチが、

「そんなものまでリュックに入れていたのか？」

…と驚いた顔をしていると…

シャリムは、その大きな布の上でみんな座れるように…3メートル四方まで地面の上に広げてから

…

「この先…何があるか分からないんです。

だから寝る場所も必要だと思って…」

。

なんと！この大きな布は、ポチと子供達が…どこでも寝れるように用意したものだと話し

…

シャリム

「身体の上にかぶせる布団は、ありませんが…

こついう布なら座る場所を作る事にも応用できると思ったんです」

。

そう言って、サンダルを脱いでから大きな布の上に上がって

…

そのあと近くに置いていたリュックの中から…両手を使って、長方形の小さなバスケットを取り出すシャリムの姿に…
ポチは、ただ感心するしかなかった…
。

《17話へ続く…》

第17話へランチタイム

洞窟の中を進んで行くと…周囲20メートルは、あるつか…
円形に広がる場所があった…

シャリムは、その奥にあるナインズゲートと呼ばれる場所の前で
広い布を広げたあと…

シャルムと一緒にサンダルを脱いでから…その近くの方に光の球と
リュックを置いたポチと一緒に広い布の上に座って休息を楽しんで
いた。

…

それから…あぐらをかいているポチとシャルムの前で、シャリムは
リュックの中から取り出した…長方形の小さなバスケットのフタを
パカッと開けて…

そこに入っていた…衣^{ころも}みたいなのが…ついてるパンを両手に持つと…
正座したまま…スツ…と、緑の目を閉じて

…

シャリム

「むっ…」

意識を集中させる。

…

すると…シャリムの両手に持ったパンが、ボツと…小さな炎で燃え
上がり…

その両手の上で燃える2つの炎は…3秒というわずかな時間で消え
ていった。

それを見て思わず

、

「おお…」

…と声をあげたポチは

、

向かいで正座してるシャリムの2つあるパンのうち

…
シャリム

「はい。ポチさん。」

、
左手に持った方のパンを右手に手渡されて…

それを犬のような口で、パクツ…ガツガツ…と、まるで飲み込むように一気に食べたあと…

隣であぐらをかいてるシャルムに

…
ポチ

「シャルムもあんな器用に魔法が使えるのか？」

。一応聞いてみると…シャルムは、まさか…と一度首を横に振り

、
「あんな微妙な火の調節…できる訳ないよ…」

。自分がやったら黒焦げになる…と、ポチに話し…

そのあとシャリムから手渡された…もう一つのパンを…

「僕はいいから…ポチが食べなよ。」

…と、ポチの左手に手渡した時…

左手の手の平の上から発生する小さな炎で、3つ目のパンを焼いていたシャリムが…それで何かに気づいたように

…
シャリム

「ごめんなさい…」

。シャルムに謝る

。その一方でポチもその時…朝食のカレーを食べていた時の事を思い

出して

…
「でも朝食の時もずいぶん残してたじゃないか…
どこか調子悪いのか？」

、
そう言っつてシャルムから

…
「ちよつと…お腹の調子がね…。」

、
そんな答えが返ってきた時…

（なんだ？）

ポチの視界が急にボヤけてきたので…
ポチはそこで、シャルムに身体を強化する魔法をかけてもらった時の事を思い出して

…
（そうだ…そういえばあの時から目が良く見えるようになったんだっただな…）

。だからゴーレムの攻撃に対応できたり…宝箱をいち早く発見できたりした訳だ…と、頭の中で納得すると

…
そんなポチの様子を変に感じたのか…
隣であぐらをかいていたシャルムが

、
「どうしたの？ポチ
さつきから、ぼーっとしてるようだけど…」

。何か考え事？と…ポチに聞いてきたので…それに対してポチが
「わん。」

どうやらシャルムにかけてもらった身体を強化する魔法が今切れたらしい…」

。そう言つて、さっき気づいた事を話すと…

それを聞いたシャルムの青い両目が一瞬大きくなり

…

「えっ？だつて

ゴーレムの部屋を出た時…身体にかかっていた2つの魔法の効果が切れたつて…言つてなかったっけ？」

、

前にポチが言つてた事を持ちだしてくるが…それを聞いたポチが

「わん。」

あの時は、確かにそんな気がしたけど…どうやら俺の勘違いかんちがだったようだ…」

。

あの時は、1つしか魔法が切れてなかった…と、顔をシャルムの方に向けたままそう言つて…

それに対して

「変なポチ」

。

クスッ…と笑うシャルムの隣でポチは、あぐらをかきながら…左手に持ったカレーパンも一口で食べるのだった…。

だがこの時…シャルムもポチも気づいてなかった…

。

両手で持ったパンを、ハムツと食べながら…二人を見つめるシャルムの緑色の瞳が悲しげに曇くもっていた事を

………

。

《食後…》

…
それから少し時間が経ち…広げていた布を畳んでから…

小さなバスケットと一緒にリュックの中にしまったポチが、そのリュックを背負って…

シャリムと…光の球を右手に持ったシャルムと一緒に先に進んで…
ナインズゲートの前に立つと…

そこでシャリムから

「ポチさん。」

わたしを血の円の中まで運んだ時のように…お腹のところに腕をまわして持つてもらえませんか？」

、

そう言われたので…ポチが、

「分かった。」

…と、シャリムのお腹のところに両手をまわして持ちあげると…シャリムが

、

「このままナインズゲートの中に飛び込んでください」

。

そんな事をポチに頼んできたので…

それを最初に聞いた時ポチは、

「？」

話の内容が飲み込めず、不思議に思っていたが…

シャリムの事だから何か考えがあるのだろう…と思い…

「分かった…」

。

そう返事をしてから…

隣にいる…右手から両手に光の球を持ち変えた、銀髪の小さな少年にも

…

「シャルムもいいか？」

確認を求め…

シャルムから

「いつでもいいよ。」

…と、返事を返されると…ポチが今、両手で抱えているシャリムから、

「飛びこんだ時は、しっかりわたしを捕^{つか}まえててくださいね…」

。そう言われる中で

…

ポチ&シャルム

「3…2…1…ゼロ！」

…

リュックを背中に背負ったまま…ポチはシャルムと一緒にナインズゲートの中へ飛びこむのだった

．．．．．

。

はたして同時に大穴の中へ飛びこんだポチとシャルムは、このあと無事に着地できるのだろうか

．．．．．

？

《18話へ続く…》

第18話へ四人目の仲間？

《17話の続き…》

シャルムを抱えたポチと一緒に大穴の中へ飛びこんだシャルムは、胸の前で両手に持った光の球を落とさないように配慮しつつ

…
シャルム

（ゴーレムに合体魔法を放った時のように、空中停止を使って…）

、
地面に着地するまで、50メートルはあろうか…

一気に18秒止まった…あの時とは違って、今度は、1秒…2秒…と何度も小刻みに止まる事で…まるで車のブレーキを小刻みに何回も踏んだ時のように…徐々《じょじょ》にシャルムの落下する勢いを殺していき…

その一瞬の空中停止を5回くらいやった時に、チラツと…下の方を見ると…

そこには、ポチに抱えられたシャルムの姿が映っていたので…シャルムは

、
（ポチに捕まれている事で今、倍以上の体重がかかっているだろうに…

。良くあそこまで減速できるなあ…）

自分には、とても無理だと感心しながらも…

そのあと…何度も一瞬の空中停止をくり返す事で

…

（あの時と違って、ほんの一瞬だけしか空中で止まる事は出来ないけど…

一度ソレを使うたびに…確実に落下するスピードが落ちてきている。
…
これならきつと…)

…
かなり減速してから、着地するのだった

・・・・・

。そうして足に履いたサンダルを…地につけたシャルムが、光の球を両手から右手に持ち変えたあとに…

ポチ達が着地したところに青い視線を向けると…

ポチの手を離れたシャリムが、上の方を見上げていたので…

それが気になったのか…シャルムが

「どうしたの？」

…と声をかけると…シャリムは、シャルムの方を振り向いてから

…「この高さを昇るとなると…かなりの魔力を消耗します。
のぼ

7日も戦ったあとに…ここを魔法で昇ったなら…普通の人に殺されてしまってもおかしくないと思って…」

。シャルム

「でも…確かヘレルは、友達であるナインクルの名前を勝手に名乗って…」

元老の名の元に純血主義に逆らう人をたくさん殺して…

そのあげくに…それを止めようとしたナインクルをここに呼び出して殺してしまったんだろ。

純血主義を進める事に反対した元老を暗殺したって、噂もあるし…
そんな奴、死んで当然じゃないか…」

。そう話すシャルムに

…

シャリム

「シャルム…本当にそう思っているのですか？
あなたは…」

シャルム

「えっ？」

キリツ…と、真剣な目で、自分を見つめるシャリムを見て…シャルムは、

なぜか自分が大切な事を…忘れていたような気がしたのだが…そこに

ポチ

「話は、それくらいにして…そろそろ先に行かないか？」

…と、茶色い服装をしたポチが声をかけてきたので…二人は…

シャリム

「はい。」

シャルム

「分かった。」

ポチに返事を返して…この先に続く洞窟の道を歩き始めた…

…

高さも…横幅も…3メートルくらいはあるだろうか…空洞の大きさは、

ここに落ちる前に歩いていた時と…たいして変わらなかった…

そんな洞窟の道を…金の髪の少女の前で歩いていたポチが、隣を歩

く銀の髪かみの少年に

…
「なあ、シャルム。

さっき話してたのって…前に話してたヘレルって奴やつの事か？」

、
そう話しかけると…

右手に持った光の球で、あたりを照らしていたシャルムは、自分の
方に犬いぬみたいな顔を向けているポチに

…
「うん。

ナインクールを倒したあとのヘレルの行方ゆくえを知る人は誰もいない…
元老の一人にナインクールの仇かたきを討たれたと言う噂うわさもあるんだけど
ね…」

。そう話して聞かせながらも…

（でも…

シャルムが疑うたがってる通り…この話は、何かうまくいきすぎている気
がする…。

それになんだろう？

何かひっかかるんだ…何かが…）

。そう考えているシャルムの目に…

「ん？」

、
…これから歩く…洞窟みぎはしの道の右端の方に一瞬、人影が見えたような
気がしたので…

その方向に右手に持った光の球をかざすと…

埃ほこりだらけの黒い魔法衣を着た男が…洞窟の右側の壁に背中を押しつ
けたまま…あぐらをかいているのを発見する

。

シャルムの隣で歩いていたポチも…

あぐらをかいたまま…うつ向いているようにも見える…その男の存在に気がつき…

「大変じゃないか!」

、
駆け寄って、しゃがんでから…

その黒い魔法衣を着た男の背中に右手をかけて

…
「おい!!しつかりしろ!」

背中にかけて右の手の平をゆさゆさと揺らしながら…助け起こすと…その揺れで

…
???
、

「うーん…」

白くて長い髪をしたその男が、ゆっくりと青い両目を開き

…
ポチ

「気がついたか…」

。男が目を覚ました事でポチがほつと胸をなでおろす

…
（俺の目は白黒でしか映らないから…なんとも言えないけど…それにしても…）

。きれいな顔をしてるな…とポチは思う

ポチのうしろに立つシャルムの光の球で照らされた男の肌は…年頃の娘のように白くて美しい…

年齢は、見た目には、20代と言ったところだが…

男の雰囲気には、もっと上の年齢を感じさせる何かがあった…

。腰にとどくぐらい長い髪をしたその男は、目の前にポチがいる事に気づくと…

???

「コボルト!？」

、青い目を見開いて…一瞬、驚いた表情を見せるが…そのあと…すぐに落ち着きを取り戻してから…立ち上がると

…
???

「きみは？」

、低音の整えられた美声で、ポチに声をかけてきたので…ポチは

「俺は、ポチ。」

、自分の名前を告げたあと…うしろの方を振り向いて

「そして、うしろの二人の子供のうち…

。男の方がシャルム。女の子の方がシャリムと言います」

シャルムとシャリムの名前を告げたあと…

自分より少し背が高い…青い目の男の方に…犬のような顔を戻す。

一方、その青い目の男は

「そうか」

…と頷いたあと…

「オレはシュナウゼン」

…自分の名を告げるのだった

。

：

美しい男シユナウゼンとの出会い…

はたしてこの出会いは、ポチと子供達に何をもたらすのだろうか

・
・
・
・
・

？

《19話へ続く…》

第19話〈3つの制約〉

…
「オレの名前は、シュナウゼン」

。薄汚れた黒い魔法衣まほうついでを着た白髪うすぎの男は、
目の前にいるポチと…そのうしろにいる子供達にそう名乗ると

…
「もしかして君達が、紙に書かれていた、運命の者達なのか？」

、
そんな事をポチ達に聞いてくるので

…
ポチ

「運命の者達？」

、
シュナウゼンが言った事に戸惑とまどうポチのうしろで…

シャルムが右手に持った光の球を…シュナウゼンの周囲を中心に照
らしてみると…

なんと！さっきシュナウゼンが、あぐらをかいてた場所に紙切れが
落ちていたではないか！

だから…そこまで足を進めてから…しゃがんで左手に持ったその紙
切れを見ると…

（……………）

。その紙には、血のようなもので次のような事が書かれていた…

シャルム

「汝なんじの名は、シュナウゼンなり。

我、これより汝に3つの制約を告げる…。

我、汝に記憶の一部を残す…

汝、その記憶を疑わず行動すべし。

汝、手から炎が出る事を…想像するべし。

この後汝の元^{のち}に運命の者達が現れる…

汝、その者達と協力し…この先にある行き止まりの場所に刻^{きざ}まれし

古代文字を解き明かし…それを呼ぶべし…」

。 どうやらそれは、シュナウゼンに対して書かれたものようだが

…
シャルム

（どうやらこの人は…魔法使いのようだけど…

。 この文章の通りだとすると…）

そう考えながら立ち上がるシャルムの横にシャリムがやって来て

…
シャリム

「記憶喪失^{きおくそうしつ}のようですね…」

。 そう言ってくるので…

シャルムは顔をシャリムの方に向けて

…
「本当にそうなの？」

…と、シャリムに確認すると

…
シャリム

。 「わたしが見た限りでは、間違いないように思えますが…」

シャルム

「じゃあ、どうすればいいんだろう…」

。

シャリム

「…連れて行くしかないでしょうね…」

少なくともポチさんは、そのつもりの方ですから…」

。 シャリムがそう言ったあと…シャルムも…

ポチとシュナウゼンが話しているところに目を向けて…

、 シャルム

。「ポチも変に正義感が強いからなあ…」

。 シュナウゼンと話しているポチの顔に一度、視線を集中させてから

…ため息を吐くと…

隣からシャリムが、

「責任は、わたしがとります。」

だから今は、ポチさんの望む通りにさせてあげましょ…」

ね。…と、お願いするようにそう言うので…シャルムは、青く大きな目を半目にしながら

…

。「そしてシャリムの方は、変にポチに甘いと…」

。

じよじよに頬^{ほお}を薄紅色に染めて…うつ向くシャリムの横顔を見つめながら

…

シャルム

「まっ…でも怪^{あや}しいと言う理由だけで…このまま…ここに放って置くのも寝覚めが悪いし…

一緒に行くとしますか」

、

乗リかかった船だからね…と、シュナウゼンとポチのいる方へ顔を向けて…

感謝した顔でシャルムが

…
「シャルム…」

自分を見つめるのを横で感じながら…シャルムは

、
「ポチ。」

、
シユナウゼンの傍にいたポチに声をかけて

…
ポチ

「シャルム？」

…と、シャルムの方を向くポチと…

、
シャルム

「僕とシャルムが先頭を歩くから…キミは、シユナウゼンさんとあ
とからついて来て…」

。

ポチ

「分かった。」

…
そんなやり取りをして、そのあと…そんなシャルムの隣から

…
シャルム

「…それじゃ、紙に書かれていた、行き止まりらしきところまで行
くようにしましょう…」

、

笑顔で話す白いローブを着た少女に答えるように

…

シャルム&ポチ

「おおー！」

。シャルムとポチは、左手を高高^{たかだか}と上げて…
それに続いてシュナウゼンも…

「お…お…」

、
。恥ずかしそうに…小さく左手を上げるのだった

。………

そして…それからシャルムは、右手に持った光の球で辺りを照らしながら…

シャルムと一緒に先頭を歩いていたが

…

洞窟の中を進む中で…シャルムは、さっき左手に取った紙をチラッ

…と見ながら…

そこに書かれた事について考えていた…

。

シャルム

（この後、汝の元に運命の者達が現れる…

汝、その者達と協力し…

この先にある行き止まりの場所に刻まれた…古代文字を解き明かし

…それを呼ぶべし…か…

つまり…この先に行き止まりの場所があつて…

そこに古代文字が書いてあるから…

それをその場で読み上げろ…と言う訳だ…

おそらく…1つ目と、2つ目の制約は、…この3つ目の制約である
運命の者達と出会わせるまで…シュナウゼンさんを生かしておく必要があつたんだろう…）

。

2つ目の制約に書かれている火の魔法は、
動物を焼いたりして…この洞窟で生きぬくには、最適の魔法である…

。シャルム

（1つ目の制約の…記憶の一部もおそらく…

火の魔法を生かすための知識みたいなものを残しているはず…

ただどそうなるか…この紙を書いた人は、ここの洞窟についてある程度知っている事になる…）

。その時シャルムは…

ゴーレムを配置した者達ではないかと、一瞬考えたが

…（だったら…ここに行こうとする僕達を、ゴーレムの部屋で止める意味がなくなってくる…）

。ゴーレムの部屋を出る事を予想していた…という考えもあるが…そんな危険な賭け^かをわざわざする者がいるのだろうか？

…シャルムは、そこから

…（もしかして僕達は…

何者かの見えざる手に踊ら^{おど}されているのかもしれない…）

。だとしたら…ここまでまわりくどい事をする意味は、なんなのか？シャルムはそこに…その何者かの書いたシナリオの真の意味が隠されているような気がしてならなかった

…

《20話へ続く…》

第20話へ古の文字の謎を解け

シュナウゼンを同行者に加えたポチと子供達は…
光の球を持ったシャルムと、その隣を歩くシャリムを先頭にして…
洞窟の中を歩いていると

…
ポチ

。「地面が湿^{しめ}ってきたな…」

。足についてる肉球から…それを感じたポチの隣から
シュナウゼンが、

。「ああ…水たまりのある場所が近いんだろう…」

。そう話すので、ポチが

…
。「えっ？この先に、そんな場所があるんですか？」

そう言つて、白くて長い髪をしたシュナウゼンの方を見ると…
シュナウゼンから…

。「ああ…」

。じゃなければオレが、ここで生きている説明が、つかないだろ…」

。そう言われて、ポチも

。「それも…そうですね」

、…と答えると…シュナウゼンは

。「このまま先に進むと…右側の壁に空洞のような大きな穴があいて
る場所がある…」

。シュナウゼンの話では、その空洞は…人が一人通れるくらいの大き

さで…

その空洞をずっと進んで行くと…

昔この洞窟を作った人達が使っていたであろう…給水場らしき場所にたどり着くらしい…

シユナウゼン

「だけど…そこにある給水場は、どうやら遥か昔の時代に作られたものらしく…

今では、すっかり給水場の跡み^{あと}たいになつて…水たまりだけが残っているんだ…」

さらにその水たまりの場所には…たまに体長60センチくらいの大きな鼠^{ねずみ}が水を飲み^{のみ}に現れ

…

シユナウゼンは、訓練^{くんれん}して使えるようになった火球の魔法で、その大鼠を焼き殺して…

今日まで食いつないできたという…

だがその水たまりの水も…だいぶ枯^こ渴^{かつ}して、なくなってきた事で…不安になりはじめていた所で…ポチと子供達に出会ったという事らしい…

。

歩きながら…そう話すシユナウゼンの隣で、ポチは信じられない思いでいた…

。

彼は、冷静に話していたが…おそらく想像を絶するような環境の中で生きてきたのだろう…

。

ポチ

（第一、鼠だけ食べていたら…食あたりを起こすかもしれないし…）

補給もしなければならぬ身体からだの構成要素にも偏りかたよが出るだろう…

（水にしたってなあ…）

水分以外は、補給できる部分が限かぎられているし…

もし硬水が混ざっていれば命にもかかわる…

シュナウゼン

「ただどこににいるあいだ、いつも思っていた…

このオレが死ぬはずがないとな…」

おそらくその思いが、シュナウゼンを今まで生かし続けたのだろう…

ポチ

（すごい人だ…）

そう思うポチの目に…右側の岩壁に2メートルくらいの大きな穴があいているのが映うつる…

どうやらシュナウゼンの隣を歩いているうちに…

さっき話していた…給水場跡に通じる空洞が見える所までたどり着いてしまったらしい…

そこを通りすぎて…さらに先に進むと…シュナウゼンが

「しかし子供達を前衛にするなんて…気が進まないな…」

ポチにそう話しかけてきたので…それに対してポチが…

「でも…

シャルムとシャリムは、魔法の他にも体術も使えるようですし…
情けない話ですけど…ここは、二人に頼るしか…」

ないですよ…と、言おうとした時…

ポチの膝が、ドスン…とシャルムの腰に当たったので…

ポチが、いつの間にか立ち止まっていたシャルムに

「どうした？」

…と、声をかけると

…
シャルム

「行き止まりだ…」

。胸の上のところに青い宝石の飾りのついた黒いローブを着ているシャルムの言う通り…

その前には、見慣れない文字が刻まれた…岩の壁があるだけだった…

。そこでポチは行き止まりの壁に刻まれた…文字らしきところを見て

、
「なんて書かれてるんだ？」

…とシャルムに聞くと…

シャルムは右手に持った光の球で、その壁に刻まれた文字らしきところを照らしてから

…
「壁には…壁は、汝の心の中にあり…汝の真実は今、目覚めん…と書かれている…」

。そう話すので…立ち止まったポチが

、
「どういう事だ？」

…と前にいるシャルムに聞いても

…
「うーん…」

。 どうやらシャルムにも分からないようだ…

、 だが、そこでシュナウゼンが

「でも…この壁に書かれた文字の意味を知らない事には…」
先に進めない…と言おうとした時…

、 銀の髪の少年の隣にいた…金の髪の少女が

。 「壁は汝の心の中にあり…なるほど、そういう事ですか…」

謎が解けたような口調で話し…少女のうしろから

… 「なにか分かったのか!？」

… と、聞いてくるポチの方を見てから…シャルムは、前方にある文字が刻まれた…行き止まり壁の方に視線を戻し

… シャリム

「ポチさん…確か冒犬ミステリーでは、よく壁に隠し通路があるんですよ…。」

、 いきなりポチに、そんな話を話してくるので…

ポチ

「わ…わん。確かにそうだけど…それがどうかしたのか?」

… と言うコボルトの言葉をきっかけに…みんなの視線がシャルムに集中する中…シャルムが

、 「こつゆつ事ですょ。」

… 行き止まりの壁に向かって歩いて行くと

・・・

なんと！壁のところまで歩いたシャルムの身体が…壁の中へと吸い込まれていくではないか！

それを見ていたポチとシュナウゼンが呆然とする中…シャルムが

「そうか…そういう事が…」

右手に光の球を持ったままで、壁に向かって歩いていくと

・・・

シャルムも壁の向こう側に消えていったので

…

シュナウゼン

「オレ達も行こう。」

、

子供達に続けとばかりに…壁の方へ行くシュナウゼンに続いて…ポチも…

（大丈夫だよな…）

。

不安に思いつながらも…壁の向こう側へと消えていくのだった

・・・

。

はたして？その先には…何が待ち受けているのだろうか…

。

《21話へ続く…》

第21話へシャルムの推理

《20話の続き》

ポチが、行き止まりだったはずの壁を通りすぎていくと…

そこに見えるのは、横幅10メートルに高さは、7メートルはあるうか…

その先からは…先程洞窟の空洞より、はるかに広い空洞になっていた…

ポチは、その先で待っていたシュナウゼンと子供達のところに行つて

ポチ

「けっきょくどういう意味だったんだ？

あの文字は…」

膝上までしかない丈の短い白いロープを着た少女に、壁に刻まれた文字の事を聞くと

シャルム

「あれは、実は…わたし達の目に壁が見えるせいで、行き止まりの壁があると思ひこんでいるけど…

あの壁は、本当はただの幻覚で…いつでも通りすぎる事が出来るんだよ…っていう意味なんですよ」

そのためのヒントが、壁に刻まれた文字の中に隠されていた事を話し…

それに対してシャルムが、紙に書かれた3つ目の制約の事を持ち出して

…
「でも…あの紙に書かれた制約は、かなり前に書かれたものに見えるけど…」

。 そんなに長く幻覚の魔法って…維持^{いじ}できるものなのかなあ…」

、 魔法の効力がそんなに持たない事を話すと…シャルムは

。 「まずは、歩きましょう…」

このまま立ち話をしても仕方がない…とばかりにシャルムと一緒に前列を歩き

…
シャルム

。 「これはあくまでわたしの仮説ですが…シュナウゼンさん」

シュナウゼン

「ん？」

ポチと一緒に

、 後列を黒い靴で歩くシュナウゼンに

シャルム

「今までこの洞窟ですごしていて…何か不思議な事はありませんでした？」

。 例えば知らないうちに、あの文字の刻まれた壁の近くにいたとか…」

そんな事を聞いてくるので…シュナウゼンは、

そのままシャルムのうしろを歩きながらも…何かを思い出すように…

顎^{あご}の方に、右手の曲げた人差し指を近づけて…

、 「そういえば…ときどき目に見えない力に操^{あやつ}られていたような…」

催眠術にでもかかっていたのかな？」

。そう言つて…顎の方から右手を離すと…

その前を歩くシャルムは

「？…おそらく誰かが…シュナウゼンさんがあの場所で、定期的に幻覚の魔法を使って幻の壁を作るように…催眠術をかけたのでしょ…う。」

だからシュナウゼンさんは、火球の魔法以外にも幻覚の魔法が使え
るはず…

。違いますか？シュナウゼンさん…」

そうシュナウゼンに聞いて…うしろから…

「その通りだ。」

…とシュナウゼンの答えが返ってくるので

、シャルムの隣で歩いていたシャルムが、

「そうか…

そういう理由なら確かに納得できるもんね…」

そう話しているうちに

…

シャルム

「うつ…なんだ？この臭い^{にお}は…」

。

自分の鼻に、肉が腐^{くさ}つたような臭いがかかっている事に気づき…

、それは隣を歩くシャルムも…

「ん。」

、後列を歩くシュナウゼンも…

「うつ…」

。コボルトであるポチに至^{いた}つては…強烈^{きょうれつ}に…

「ふごっ！ふごおお！」

、その臭いに苦しんでいたので…

シャルムが、この臭いの元がなんなのか…周りを調べてみると

……

シャルム

「大鼠の死体が…」

、洞窟の壁の近く等に…

…60センチくらいある大鼠の皮や肉が、食^{やぶ}い破^{やぶ}られ…
内蔵^{ないぞう}などが出ているのを発見する。

…しかも、そんなふう^{ふう}に骨などが飛び出た大鼠が…その周りにも5、6匹くらい倒れていた…

シャルム

「共食いのようですね。

たぶん…自分達が食べる食料がなくなつたから…

こうするしかなかったのでしょう…」

。それを聞いたシャルムは

、「けど他にもあちこち、こういう死体があるのが見えるし…
息を止めて歩き続ける事なんてできないから…」

。なんとかしてくれ…と、隣を歩くシャルムに頼むと

…

シャリム

「仕方ないですね…。」

みなさん止まって下さい。」

…

そう言うて…白いローブを着た少女は、足を止めた者達を一ヶ所に集めると…

集まった3人と向かい合って

…

シャリム

「我が周囲に散らばる香りの欠片^{かけら}よ。

我が心に描く^{えが}母のぬくもりを清浄^{せいじよう}なる流れに乗せて…我が周囲に広めよ…」

。

上に向かつて、かかげた右の手の平に、シュワシュワ…と光を集め

…

「ビナーフローレ！」

右手の手の平に集めた光は、シャリムの掛け^か声と共に…数えきれないほどの光の粒^{つぶ}となって、分散し…

それらの光の粒は、まるで風で舞い散る花吹雪のように…シャリムと、

シャリムと向かい合うポチ達3人の周りをバニラのような香りと一緒に包み込む…

。

そしてシャリムは上げた右手を下ろしたあと…みんなに

、

「一定時間、わたし達の周りを、バニラのニオイが包み込むようにしました。

これでしばらくは、ニオイの事もあまり気にならないはずです…」

そう言うてから…右手に光の球を持ったシャルムと一緒に先頭を歩

き…

子供達の後列をポチとシュナイゼンが歩く事で…少し先に進むと

…
周りに見えていた大鼠の死体が…だんだん見えなくなって来たので

…
子供達のうしろを…シュナウゼンと一緒に歩いていたポチが…

一息ついて良かったかな…と思った時

…
シャルム

「何か来ます。」

…と、シャルムが言うので…隣を歩くシャルムが、右手に持った光の球で…ずっと前を見ようとすると

…

10メートルくらい前の方に…ものすごく大きな鼠がいるのを発見して

…
シャルム

「このくらいの距離で、あのくらい大きく見えるって事は、やっぱり…」

、
そう言つて、立ち止まると…隣にいるシャルムも

…
「2メートルは、あるんじゃないでしょうか」

…
そう答えて、立ち止まり…そして前列の二人が立ち止まったせいで…後列のポチとシュナウゼンも立ち止まって、様子を見るのだった…。

…はたしてポチ達は、このピンチを切りぬける事が、出来るのだろうか

…
…
…
…
…

《22話へ続く...》
?

第22話へその名はベンチュウ

シャリム

「わたしが行きます。」

、
シャルム達が心配をしながらも見守る中…

シャリムは、10メートル先にいる…全長2メートルはありそうな
黒っぽい灰色の毛におおわれた鼠の方に近づいていき

…
（怖いのは相手も同じはず…

わたしの予測では、ここから半分以上距離を縮めたら…わたしを怖
がって、襲い^{おそ}かかる可能性が大きい…
ならその前に…）

。大きな鼠との距離が9…8…7…6メートルに近づいた時…
そこでシャリムが突然、左の膝^{ひざ}をついて、しゃがみこんでから

…
「トークマキング！」

、
掛け声と共に地面にシャリムの右の手の平を叩き込む…

すると右手の手の平を叩きつけた場所から…光の線が地面を伝って
6メートル先の大きな鼠に向かって伸びていき…

その光の線が大きな鼠に届いた時…それでびっくりした黒っぽい灰
色の鼠は

、
「チュウウー！！」

。4本の足で5メートルほどうしろの方に逃げ出し…そこから大きな
鼠は、

近づいてくるシャリムの方を振り向いて

大きな鼠

「チュウウ…」

警戒すると…なんと鼠の頭の中に

シャリム

「ネズミさん。」

わたしの声が聞こえますか？」

すでに5メートル近くまで近づいて来ているシャリムの声が聞こえてくるではないか！

それでシャリムと話せるかもしれない…と思った大きな鼠は、2本の後ろ足だけで立ち上がりながら

「お前…」

ベンチュウの言葉が分かるチュウ？」

そう話しかけてくるので、それを聞いたシャリムは…ベンチュウという名前の大きな鼠の2メートルくらい手前で立ち止まり…

「はい。」

できれば戦わずにこの先に行きたいのですが…ここを通してもらえますか？」

そう言つて、お願いすると…ベンチュウは

「考えなくてもいいけど…こっちからもお願いがあるチュウ」

シャリム

「なんでしょうか？」

ベンチュウ

「この世界には、チーズなる美味なものと聞いたチュウ…。おれは空腹だから、そのチーズを食べたいチュウ」

…
シャリムとそんなやりとりをして

………

その様子を15メートルくらい離れた場所から見ていたシャルムは

「何をやってるんだろう？なんか交渉^{じようぎ}みたいなものやっているように見えるけど…」

。そう言つと…うしろからポチが

「どれ…俺も行ってこよう。」

シャルムは、シュナウゼンさんとここで待つてもらえないか？」

、
そう話しかけてくるので…それを聞いたシャルムは
「分かった。」

僕とシュナウゼンさんは、ここから少し進んだところで待つてるから…」

。ポチは、シャリムの手伝いに行つてきて…」

ポチ

「わん。」

、
そこからシャリムのいる場所に向かつて歩くポチを…シャルムが右手に持った光の球で照らしながら見送るのだった…

。

。

一方シャリムは…両目の色を緑から紫色に変えながら…

「わかりました」

。

ベンチュウが持ちかけた提案^{ていあん}に納得し…そのあとベンチュウに対して

…

「では、わたしの方に頭を寄せてもらえますか？」

。

そう言つて、それを理解したベンチュウが

…

「？…分かったチュウ」

、

4つ足に戻つてから…シャリムの方に頭を近づけてきたので…
シャリムは、そのベンチュウの頭部に右手の手の平を近づけて

…

「我が手に宿る光よ。

幻^{まがまが}を現^{まがまが}に感じる力を

定められた時の中でこの者に与えよ」

。

4つの足を地面につけた事で…低い位置にあるベンチュウの頭に、
シャリムは近づけた右の手の平を…キューーンと光らせて

…

「リアグラフィティ！！」

、

手の平の前で輝く光の力で…ある情報をベンチュウの頭の中に送り
こんだあと…ベンチュウから2メートルくらい離れたシャリムは

、

それからまた右手を前に突き出してから…その手の平を光らせると

…
突き出した右手の前に…なんと１メートル近くもあるチーズみたいな
なものが出現し…

その目の前に出現したチーズみたいな物体にベンチュウは

、

「…こ…これが…チーズだチュウ…」

。

それからチーズみたいなものを、美味^{うま}いチュウ。美味いチュウ…と
食べはじめ…

それを見ていたシャリムのところにポチが近づき

…

ポチ

「あのチーズは、魔法で、作った幻なんだろう？
幻って食えるもんなのか？」

、

そう言つて、シャリムの隣に立つと…

ベンチュウとの通信を一時中断したシャリムは、隣のポチを見上げ
ながら

…

「それは、できませんけど…」

リアグラフティの魔法で…ベンチュウさんの頭の中にある満腹中枢
を刺激する事で…ベンチュウさんが、じょじょにお腹がいっぱいに
感じるようにしました」

…

つまり…そのための情報を送られたベンチュウの脳は…だんだん満
腹になるように働きかけている事を…ポチに説明して…

それに対してのポチの

「だけど…」

それだつたらチーズのニオイや味は、どうしたんだ？それは、満腹
中枢を刺激^{しちき}しただけじゃ説明がつかないだろ」

。 ……という質問にシャリムは、

「それはサーチの魔法で、ベンチュウさんの情報を調べたあと……ピナーフローレの魔法で、広げたニオイの一部を……ベンチュウさんの好むような食べ物のニオイに変化させた事で解決しました。」

……だからベンチュウの近くは、バニラとは違う香りに包まれている事を話し……

それを聞いたポチが

、 「なるほどな……食べ物味の半分以上は、ニオイで決まる事が多いと聞いた事がある……」
。 そこを利用した訳か……」

、 そう言つて、納得すると……シャリムは

「ただチーズの幻は、ベンチュウさんが食べなくても……だんだん減つていくようにしてあります…」。

。 そのトリックにベンチュウさんが気づかなければいいんですけど……」

その事を心配するが……問題は別のところで起きた。

それは……チーズがだんだん減る事で小さくなつていったチーズが……そのあとすぐに消えた時、ベンチュウが

「も……もう一個……」

。 保存食にしたいから……もう一個だけ欲しいチュウ……」

そう頼んできたので、さすがのシャリムも

(どうしよう……)

。 このままじゃキリがない……)

もうお手上げたと…困^{こま}っていたところで…隣にいたポチが
「俺の出番だな。」

…

そう言つて、シャリムの一歩前に進み出る。

はたしてそんなポチの秘策^{ひさく}とは

・・・・・

。

《23話へ続く…》

第23話へコボルト屋。ポチもワルよのう

《22話の続き…》

ポチ

（ああ…くそ…俺の視界、白黒画面だから…
光の球が遠いと、ホント、キツイわ…）

。 広くなつた洞窟の中…

シャリムの前に一步、踏み出ると

…

2メートル手前にいた…ベンチュウが
うしろの2本足だけで、立ち上がり…

「お前…誰だチュウ。」

、

ポチの事を聞いてくるが…ポチには、何を言っているのか分からず

…

斜め後ろにいるシャリムに…

、

ポチ

「俺にも言葉を通じるようにしてくれ…」

、

そう頼みこむので…シャリムは

、

「わかりました。」

…と、リュックを背負ったポチの、左側に立つて…

ポチの左手を、小さな右手で繋ぐと

…

ポチが繋いだシャリムの小さな右手から…

シャリム

「ん。」

自分の魔力を…微弱な電流と共に、ポチに送り込んで…それからポチに、

…

シャリム

「今、わたしがベンチュウさんと会話をするために、必要な力^{ちから}を…ポチさんにも送りました。これで、ポチさんもベンチュウさんとお話できるはずです。」

、
そう話し…

、
それを聞いたポチは…前にいるベンチュウに…

「私は、ポチという…ケチな商人でして…
あなた様は、見たところ…ネズミ達の生存競争を生き残った立派な方の方のようですね…」

。 おだてて持ち上げると…ベンチュウも

「お前…なかなか話の分かる犬だチュウ…」

確かに、おれは、

この身体^{からだ}の大きさで、生存競争を生き残った…鼠の中のネズミだチュウ…」

。

すっかり機嫌^{きげん}を良くしたようなので…

…さらにポチは、

「犬ではなく…コボルトです。」

一言^{ひとこと}

断りながらも

ポチ

「それに、なかなかのイケメンでらっしゃる…

隣にいるシャリムなどは、あなたの事を

カッコイイ…素敵な人だ！結婚したい！…と、言っ
て聞かないんですよ。」

「まったく…困ったものです…」と、
わざとらしく…ため息を吐き

手を繋いでいるシャリムから

（そ…そんな事…わたし、一言も言っ
てないですよ。ポチさん！？）

非難する思念を送られながらも…

「よっ！色ネズミ」

…と、さらにベンチュウをおだてると…

前にいるベンチュウから

「確かに、おれは生存競争の時にメスも、殺
してしまったから…生活にゆとりが出来たら、嫁がほ
しいと、思っていたチュウ…でも今は、その日ぐ
らしが精一杯で…

そんなゆとりが、どこにもないチュウ…

それに、おれは年上が好みで、

乳くさいガキには、興味がないチュウ。」

無駄に良い話を、話して聞かされ…

シャリムの

（うつ…わたしってば…

踏んだりけったりじゃないですかあ…）

。落ち込んだ思念を、左手に感じながらも…ポチは、
いよいよ本題とばかりに

…
「チーズの事です…
申し訳ないのですが…

実は、ただ今

在庫が、切れてまして…」

、
チーズの事を話して

…
それを聞いた、ベンチュウから

「在庫切れて…また

あの魔法みたいなもので、出せないチュウ…」

。やはり、その事を聞かれたので…

ポチは、

「いえ…あれは、実は…

本物のチーズがないと出来ないものなんですよ。」

、
あれは、あくまでも魔法ではない…と、ベンチュウに話して聞かせ

…
それでベンチュウが、

「うつ…残念だチュウ」

、
落ち込んでいるところで
ポチは、

「そこで、そんな

あなたに耳寄りな情報が、あるのですが…」

、
そう話を持ち出して

、
「な…なんだチュウ？」

、
その話に食いつくベンチュウに…

ポチは、

「実は、私ども、ただ今

見逃しキャンペーンというものをやっております…」

、
なんと！見逃し^{みのが}キャンペーンなるものが…実在している事を説明し

…
そのあと…さらに^{たた}積み^か掛けるように…ポチは

、
「今、私達を見逃すと…

7日後に、チーズ100個が送られる他に…

なんと！？特典として！

ここから脱出する方法が、私達から教えられます」

そのあと…

…
どうです？お徳^{とく}でしょう…と、

、
ベンチュウに向かって、話すと…

、
それを聞いたベンチュウは、

「チュウウー…

確かに…お徳^{ほしやう}だと思っけど…

。何か保証出来るものがないと、信用できないチュウ…」

たとえば保証金とか…と、例を出すので

…
それを聞いたポチは、そこで……

シャリム

（うう…わたしってば…
踏んだりけったりじゃないですかあ…）

…
今、ポチの左手を、右手で繋いでいるシャリムが…涙を流していた
時の事を、思い出し…

………

ポチ

「シャリム…」

シャリム

「はい。今、避^よけますね。」

…シャリムの右手を…ポチの左手から離す事で…
…ベンチュウとの通信を、一回中断して…

、
それから…

ポチ

（あの時…確かにシャリムの足元に、何かが落ちたような音がした
…。）

、
だから…きっと、シャリムの足元に…

ダイヤモンドが、落ちてるはずだと…しゃがんでから…

左側にいるシャリムに、そこを避けてもらって…

その足元周辺を、調べると…

………

ポチの予想通り…なんと、そこに…

約1センチくらいの小さなダイヤモンドが、落ちていたので…

ポチは、それを右手で拾^{ひろ}ってから…
立ち上がって、

………

ポチ

「シャリム。」

シャリム

「はい。」

…またポチの左側に立ったシャリムに、手を繋いでもらうと…

右手に持った、小さなダイヤモンドを、ベンチュウに見せびらかし

て…

「それは、なんだチュウ。」

…興味深げに、

ポチの右の手の平の上を、見つめるベンチュウに…

ポチは、

「丸いですけど…これは、ダイヤモンドですよ。」

…と、答えると

…

それを聞いたベンチュウは、

「だ…ダイヤだチュウ!？」

…

覗き込むような…姿勢で、ポチの右の手の平を見つめ…

ベンチュウ

「…た…確かに、ダイヤだチュウ…。」

…

そう言つて、姿勢を戻すと…

ベンチュウ

「だからと言つて…金で、ネズミの心は…」

…

動かせないチュウ…と、言つ前に…ポチから無言で、そつと左の前足に、そのダイヤを持たされて…

…小さいダイヤを手渡したポチから…

「…マーキングをすれば、どこに置いても、大丈夫なはずです。」

そう言われたので…

ベンチュウ

「ポチも、なかなかのワルだチュウ…」

ポチ

「いやいや…ベンチュウさんには、およびませんよ。」

ベンチュウとポチは、そんなやり取りをしたあと…
まるで…どこぞの悪代官と、悪どい商人のように…

ベンチュウ

「チュウーチュツチュツチュ！」

ポチ

「ウォォーフォッフォッフォ！」

、

ワルそうな高笑いを、するのだった
・・・・・。

《24話へ続く…》

第24話へデタラメ二百+嘘八百〃針千本のーます

ポチから、左の前足にダイヤを渡された…ベンチュウが、
「通っていいチュウ。」

…
2本のうしろ足だけで、その場から離れたので…

ポチは、うしろを振り向きながら…

「さあ、行こうか…」

。

そこから、少し離れた場所で待っていた…

シユナウゼンとシャルムに合図あいずをすると…2人は

シユナウゼン

「合図だ。」

、

シャルム

「行きましょう…シユナウゼンさん。」

、

シユナウゼン

「ああ…」

、

そうやって…ポチのいる所まで、歩きだし…

、

そうやって向かって来る2人とは別に…ポチの隣で

…

シャルム

（うつ…なにか納得できないものが残るけど…）

、
…これが大人の事情というもののかと、
ため息を吐く、シャリムと一緒に、その場を後にした…。

一方…

洞窟の奥へ進む…ポチ達の背中を、
うしろの2本足で立ったまま、見送っていた…ベンチュウは

、
「まったく、チーズ100個なんて…

。せめて10個くらいにして、リアルな嘘にしろっチュウに…」

過去の会話に、ダメ出しをしたあとに

、
（まあ、満腹の気分も味わえたし…
これで、勘弁^{かんべん}してやるチュウ…）

左の前足に、丸くて小さなダイヤを持ったまま…心の中で、そう話し

…
後ろの2本足だけで…その場所を、去っていくのだった

………。

一方…

シャリムから手渡された光の球を、右手に持って…

シャリムと一緒に、先頭を歩いていたポチは、

ベンチュウとのやりとりを思い出し

…

（うおふっふ…狙い通りだ…

まさか…シャリムの涙で、こんなにうまくいくなんて…）

ポチ

「まさに…泣き落とし」

、
ウマイこと言ったと、思っているのか…

完璧だ…完璧すぎる…と、ニヤリ…と笑みを浮かべていると

…
隣からシャルムが、

「完璧すぎるんじゃないくて、台本すぎるの。
ワルい顔してるよ。ポチ。」

…
そう言っている通り

…
ポチの右手に持った光の球の、光が…ポチの悪い顔をさらに引き立てていた…

。そこ、うしろから…シャルムが

、
「もお、ポチさんったら

ベンチュウさんに、嘘ばかり言っ…

嘘がばれて、ひどい目にあっても、しりませんからね…」

。そう言っ、頬を膨はくませると

…
それを聞いたポチが

、
「昔から…良く言うでしょ。デタラメ200、嘘800って…だから許してくださいよ。」

…
そんなふうに謝っても…今度ばかりは…

、
シャルム

「許しま1000。」

…
そうは言いながらも…頭の中で

、
シャリム

（…とは、言ったものの…相手は、こちらの思惑を知っていたな…。
あの様子からすると…）

、
実は、そんな事を考えていたのだが

…
ベンチュウに見逃してもらったとは、知らずに…

シャリムの前を歩くポチは、

「ニヨフォフォフォ。」

…浮かれていた…

。そんな前の様子を見て…シャリムが…

（どうしよう…仲間の役に立って、嬉しいんだろうけど…）

、
実は、相手の思惑に乘せられていた事は、黙っていた方が、いいの
かな…と、悩んでいると…

、
シャリムの隣を歩く、シュナウゼンから

…
「どうした？何か迷っているようだけど…」

、
顔に出たのか…その事を知られたので…シャリムは

、
「あ…いえ、何でもありません…」

今は、ポチに話さない事に決めてから…シュナウゼンに

、
「そう言えば…シュナウゼンさんは、
この先に何かがあるか…知ってますか？」

、
少しでも情報が、欲しいところなので…その事を聞くと

…
それを聞いたシュナウゼンは、何かを思いだすように…
顎に、右手を近づけて…

「…希望の箱…」

、
それに対してシャリムが

「希望の箱？」

…と、一度、聞き返すと

…
シュナウゼンは、

「うん。それが…この先にある目的の場所の謎を解く鍵だと…
オレの記憶が言っている…」

。
そう言っ、顎から右手を離し

…
それを聞いたシャリムが

「その希望の箱が、どんな形をしてるか知ってますか？」

…と、尋ねると

…
シュナウゼンが、それに対して

、
「今は、わからない…」

でも、きつと、思い出せる…そんな気がする…」

。
それだけは、わかるんだ…と、答えた時

…
2人の前を歩くシャルムが…

、
「見つけよう。希望の箱を！」

…と、力強い言葉で言ったあと

…
岩や土だった洞窟の周りの壁が、
いつの間にか…銅のような金属に、変わっていた事に気づき

…
シャルム

「まさか…ここから先は、鉱洞みたいになってるのかな…」

。周囲を少し見渡したあと…また、洞窟の奥へ行こうと…視線を戻した時、突然

！
ビュオッ！

、…洞窟の奥の方から、何かが飛んできて！

シャルムの右耳の下にある髪のところか、その何かによって切られ

…
その切られた髪が、ハラリ…と、地面に落ちる。

…
そして…そのせいで、立ち止まったシャルムの隣で、それを見ていたポチが

…
「ヒイイー！」

…と、悲鳴をあげて

、
それを見てシャルムが…

「なんで！ポチが悲鳴をあげるんだよ！？」

、
そう…隣のポチに、叫んでいるあいだに

…
2人のうしろで…シュナウゼンと一緒に、立ち止まっていた…シャ
リムが

、
「…今のは、真空刃ですね…。ポチさん。

光の球で、奥の方が見えるようにしてもらえませんか？」

…そうポチに頼むので

、
ポチは、

「う…うおふ。」

、
戸惑いながらも…

洞窟の奥を見ようと…光の球で照らすと…

…

…10メートル先の方に…

全身を、メタルグリーンと呼ばれる色の、鎧で包み込んだ剣士がい
るのを発見する…

。

そして…その時

、
シュナウゼンの隣で、立ち止まっていたシャリムが

、
「あれは…鎧剣士メタルグリーン！」

、
私達の世界の西洋鎧に似た、メタルグリーンの鎧に…全身を包み込
んだ剣士の名前を叫んだ。

、
亡霊が…緑の全身鎧に、身を包んだといわれる、噂の剣士…

、
はたして…星宮が言っていた魔法使いが、この剣士に勝てない理由
とは

・
・
・
・
・
・
？

《第4戦へ続く…》

第4戦へ最初のトリック

シャリム

「あれは、鎧剣士メタルグリーン！」

、
シャリム達の10メートル先にいる…その全身鎧に身を包んだ剣士は、
1メートルは、あろうか…刀と呼ばれる東洋の剣を、右手に握って
いて…

その左腕には…円形の盾のような、鎧の一部分があつた。

、
一方、離れた場所で…

そのまま立ち止まっている、シャリム達の前で、
シャルムは…

「僕がやるよ…。ポチは、うしろに下がって…」

ポチ

「分かった。」

じゃあ、俺は、後ろから、応援しているな…」

シャルム

「ありがとう。」

、
…そんなやり取りをして、ポチを、うしろに下がらせたあと…

約10メートル離れている…鎧剣士に向かって、右手を突き出すと

…
その突き出した右の手の平の前に、シュワシュワ…とエネルギーを

ためて…

そこから…

「ファイヤボール！」

10センチくらいの火球を放つ！

その時、10メートル先にいる…鎧の剣士は、盾のようなものがついている左腕の部分を…

火球が飛んでくる方向まで動かして

…

ボシュツ！

その方向から、飛んできた火球を防ぐと

防いだ盾のところで…その火球が、かき消されていくので…

それを見たポチは、シャルムのうしろで

…

（同じだ…あの時と…）

《ゴーレムもどきの結界の外側で》シャルムが、白い円柱に向かって…火球の魔法を使った時の事を思い出していた…

そんなポチの前で、シャルムも…

10メートルくらい先にいる…鎧剣士の左腕のところについてる、盾のような部分を見て…

「あの左腕の部分…やっぱり対魔法用のものなんだ…」

予想は、していたけど…と、くやしそうに話すので

…
ポチは、シャルムのうしろから

…
「じゃあ、

あの盾みたいなところは、魔法を防げるように…強化されてるって
事か？」

…と、シャルムに事情を聞くと…シャルムは

、
「そうだね…

とにかくメタルグリーンの左腕の動きを見て…

この距離じゃ、僕の魔法が通用しないって事が、分かったよ。」

、
そう言つて…くやしそうにしているところで…

シャルムがシャルムの隣に、やって来て

…
「じゃあ、2人で同時に魔法を使うのは、どうでしょうか？」

、
そう話を、持ちかけてきたので

…
シャルムは、その話から

（そうだ…

確かに2人で、同時に魔法を使えば…左腕だけでは、対応できない
可能性が大きい…）

、
そう考えて…そのあと…

シャルム

「シャルム。」

、
シャルム

「はい。」

シャルム

「僕は、左肩を狙^{ねら}うから…」

君は、右肩の方を狙^{ねら}って！」

「はい。」

…と返事を返すシャリムに指示を出して…

そのあと…指を立てた、右の人差し指と中指の指先を…

離れた場所にいる鎧剣士の方に向けてみると…

シャルム

（あれ？構えが変わっている…）

シャルムが目を離しているあいだに、鎧剣士は、右手で握った刀を横に構えて

…残る左手を、刀の刃の所にそえる構えに変えていた…

その鎧剣士の構えを見た…シャルムは、

（ん？今

一瞬、剣が光ったような気がしたけど…）

そして…その時、頭の中に違和感のようなものを感じたのだが…
すぐに、気を取り直して、シャリムに

…

「それで、3秒後に…レーザーフレームだよ。」

…と、指示を出して

それに対してシャルムが

「はい！」

返事を返してから…すぐに、鎧剣士の左肩と、右肩を、狙って…

、
(3…2…1…)

シャルム&シャリム

「レエザアフレイムッ！」

、
キューピン！…と、2人の人差し指と中指の指先から…

。レーザービームのような炎が、一直線に、鎧剣士に向かっていく…

そして…その指先から、放たれた鋭い炎は、一瞬で、

10メートル先にいる…鎧剣士を貫いたかに見えた！

…しかし…

、
スカッ…スカッ…

、
高速で向かっていった、その2つの炎は、

鎧剣士の左肩と右肩から、すり抜け…そのまま後ろの方へ飛んで行く

…
シャルム

「何！？」

、
その光景を見たシャルムが、青い目を大きく見開くと…

その隣で、シャリムが

「やりますね…」

。10メートル先にいる…鎧剣士を見つめたまま、一言つぶやく…

そんな、シャリムの横顔を見て…

シャルムが、どういう事なのか…と、聞こうとした時…
シャリムの

「！？来ます！」

…という、かけ声と共に

、
10メートル先の鎧剣士の方から…カマイタチのような衝撃が

、
ビュオツ…と吹きさぶ風となって、シャルムの方に襲^{おそ}いかかる…

、
しかし…その時シャリムが、シャルムの前に飛び出し…

、
シャリム

「させません！？」

、
…その左手を…左下から、右上の方にまで…
、
すくい上げるように…振り上げると！

、
そのすぐ前の地面の方から…ゴツ！！と、風が上昇して…

、
その上昇した風が…シャリム達の前を守る、風の壁となって

…
まるで鏡が、光を反射するかのように…風の壁が、鎧剣士が放つ、
真空の斬撃を、はね返すと…

、
そのはね返された真空の刃は…鎧剣士の方に向かって行き…

、
鎧剣士の、鎧の腹の部分を横一文字に切断した…

、
それを見たシャルムは

、
「やった…のか？」

、
鎧剣士の鎧が…あまりに、あっさりと斬^きられたので…不思議に思っ
ていた…

。それには、どうしても、ひっかかる事があった…

、
（いつ…真空刃を出したんだ？）

、
そう…シャルムが見る限り…

鎧剣士は、ずっと…刀を横に構えたままで、一度も動いては、い
なかった…

。シャルム

（どういう事だ？一体…）

、
…そんなシャルムの考えを、肯定するかのように…シャルムの前に
立っていた、シャリムが

、
「あのメタルグリーンさんは、幻です。」

、
エメラルドの瞳で、前を見つめたまま…静かに話す

…それが、本当だとしたら…本物の鎧剣士は、一体…どこにいるの
だろうか

………？

《つづく…》

第4戦〈解ける秘密と新たな秘密〉

シャリム

「あのメタルグリーンさんは、幻です。」

隣にいるシャルムに、そう伝える

シャリムの白いローブの下の方が、上昇する風になびいて…フワリと舞う。

シャリムは、まるで、風で舞い上がる、スカートを抑えるように…

…白いローブの、お腹の下のところを…

「きゃっ。」

必死に両手で、隠しながら…うしろにいる、シャルムに

「良く見てください。」

…と、説明を続けると

…

シャルムは、恥ずかしそうに…シャリムから、顔を反らしながらも…

、

「見ろって、そんな大胆な事を言われても…」

…出来る訳ないよ。…と、なんとか話すので…

、

それで、シャルムが、何を言いたいのか…分かった、シャリムの頬は、みるみる薄紅色に染まっていき…

、

「違います！どこを見てるんですか！？」

、

シャルムのいる、後ろを向いて…

上昇する風が、止むまで…ローブの、お腹の下の所を、ずっと両手で抑えて

…
風が止んだ事で、風の壁がなくなると…

お腹の所から、両手を離れた、シャリムは、身体の向きを、鎧剣士がいる方に戻してから…

、
「わたしじゃなくて…前を良く見てください。」

うしろにいるシャルムに、ここから…9メートル先にいる…鎧剣士を見るように、強い口調で話すので

…
シャルムは、シャリムの隣に進んでから…

9メートル先にいる鎧剣士の方に目を向けると…

…
なんと！鎧剣士は、腹の方が切断されたはずなのに…

そのまま…右手に持った刀を横に構えて…
その横に構えた刀に、左手をそえる、格好かっこうを維持いじしているではないか！

、
どう見ても、不自然な…9メートル先にいる、鎧剣士を見ていたシャルムの視界が…

（あれ？）

だんだん、ぼやけていくので…

…
そこで、シャルムは

シャリム

「あのメタルグリーンさんは、幻です。」

…という、隣の少女の言葉を思い出し…

…
シャルム

「うすうす感づいていたけど…」

くやしそうな顔で…敵の作戦に、かかっていた事を、自覚する

…
やがて…

シャルムの視界が元に戻ると…

10メートル先で…

右足の膝を立て…左足の膝を地面につける、しゃがみ方をした…鎧
剣士の姿が見え始め…

、
シャルムは、10メートル先の方で…

その、しゃがんだ鎧剣士の刀を持った右手が、右側の方に伸びてい
るのを見て

…
（剣が、右側の方に伸びている…

。 やっぱり、あの時…剣は、振られていたんだ…）

シャルムは、さっき飛んできた風の刃が…

鎧剣士が、しゃがみながら…

横一文字に、刀を振った事で、出来た衝撃刃だという事を、知って

…
隣にいる、金の髪の少女に…

、
「シャリムは、知っていたの？」

…と、聞いてみると

…
それを聞いたシャリムは

「はい。」

そう頷いて…それから…

…

「わたしとシャルムがレーザーフレームを使った時、メタルグリーンさんの両肩を、すり抜けましたよね。」

前にあった出来事を、シャルムに確認して

…
それにシャルムが

「うん。」

…と、頷くと…隣から、シャリムが

「おそらく…あの時

わたし達の目に見えていたメタルグリーンの後ろで…本物のメタルグリーンさんは、しゃがみながら…

攻撃する機会を狙^{ねら}っていたのでしょ…」

先程まで…シャルム達の目に見えていた鎧剣士は、幻みtainなものであった事を説明したので

…
シャルムは、それから

…
(なるほど…つまり…あの真空刃は…

僕達の目に見えていたメタルグリーンの後ろで…

本物のメタルグリーンが、しゃがみながら、剣を振るった事で、出来たものだった訳か…)

。そこまで考えると

…
そこで、待てよ…と、ある事に気づいて…

、
(…剣を振るう…剣…!!そうか!?そういう事か!)

シャルム

「前に、剣が光った事で、なんか違和感があった時があったけど…あれは、魔法をかけられていた感覚なのか…」

。思い出したように話すと

…隣から、シャルムが

「そついう事です。」

…と、それが言いたかったのだと言いたげに

…「シャルムの言う通り…」

…おそらく…わたし達は、あの時…メタルグリーンさんの持った剣から…催眠術のようなものをかけられて…

メタルグリーンさんが、ずっと、あの場所にいると…思いこまされていたのでしょ…」

。仮説も、おり混ぜて話すので

…その話を聞いて、シャルムは

…「つまり…メタルグリーンが、魔法で幻を作りだしたのではなく…魔法にかかった僕達の意識が、メタルグリーンの幻を作り出していったって、事？」

。だから、一定の位置に、鎧剣士がいる…と思いきんでいたのか…と、理由を知るが…

、シャルム

（だけど…それなら…なぜ？すぐに、メタルグリーンが、かけた魔法が解けたんだ？）

それに…その催眠術のようなものに、かかっている間…シャルムは、一瞬だが、意識を…他の誰かに乗っ取られていたような気がした…。

（あれは、一体？）

…と、シャルムが考えているあいだに

…シャルムは、10メートル先にいる…鎧剣士が持った刀の方に、視線を集中させて…。

「たぶん…あの剣そのものが、魔法の力を秘^ちめているのでしょ…。」

…と、そう話しかけてくるので、

シャルムもまた、鎧剣士の方を見て

…
「でも…武器で使える魔法って、確か…使用回数が決まっているんだよね…」

だから…すぐに次の魔法を使わないんだよ…と、隣にいるシャリムに確認すると…

、
シャリムも…

「はい。」

…と、シャルムの考えに、同意して…

シャリム

「それに、あの魔法を、一度使えば…相手も警戒^{けいかい}するのが、分かっているでしょ…！
そう何度も、使えないのでしょうね…」

、
そう話すのを、聞いて…シャルムは

「じゃあ…このまま離れたところで、魔法を使えば…」

…大丈夫かも、しれない…と言いかけると

…

シャルムは、それを聞いて…

「それは、どうでしょう…」

…と、金色の眉まゆを寄よせるので

…

シャルムは、隣の方に顔を向けて…

「どういう事？」

…と、シャルムに聞くと……シャルムは

、

「わたし達が、このまま…魔法で遠距離攻撃を続ければ…」

メタルグリーンさんも、それが、はね返されるのを覚悟で…また真空刃を使ってくるかもしれない…」

。

はね返された真空刃も、

左腕の、あの盾みたいな所で防げば、いいわけですし…と、シャルムなりの予測も含めながら話し…

、

そのシャルムの理屈りくつを聞いて…

シャルムは、シャルムの方に向けていた顔を、鎧剣士の方に戻してから…

、

シャルム

（消耗戦しょうしせんになるかも、しれない訳か…）

。

「一体どうすれば…」

有効な手になるのか…考えこんでいるところで…

、
隣から…シャルムが

「羽つきはねを使いましょう…。」

…と、突然、言い出す。
。

それを聞いたシャルムが

「羽つきを!？」

…と驚く、

羽つきとは、一体なんなのだろうか

………?

《つづく》

第4戦〈解ける秘密と新たな秘密〉（後書き）

マジックアイテムについて…

武器や防具で使える魔法は…精神力を、まったく消費しないが…その変わり、使える回数が限定されているため…

魔法を使いすぎると…その使った武器が壊れてしまう…

。それでは、どのくらい魔法を使えば、武器が壊れるのか？

…

それについては、

1回、使えば壊れるものがあれば…10回以上、使っても、壊れないものもあるので…

くわしくは、まだ良く分かってないところが多いが…

一般的には…強力な魔法を使えるものほど、回数が少なく…

弱い魔法のものほど、使用回数が多く…何度でも使えらと、いわれている…。

第4戦へシャルムの誤算

シャルム

「羽つきを、呼び出します」

。その言葉を聞いて、

シャルムが

「今まで、みんなのために魔法を使って、^{つか}疲れているのに…
ここに来て、精神力を大量に使う物質召喚をやるなんて…無茶にも、
ほどがあるよ」

。他の手を考えよう…と、シャルムを説得するが

…それでもシャルムの決意は、変わらず

…「あれを見てください」

、シャルムに鎧剣士の方を見るように言うので…
シャルムも、その方向に顔を向けると

…10メートル先で、鎧剣士は、シャルム達の方に向けた左手を裏返
してから…

…「親指以外の4本の指を、クイクイと、曲げる事で…シャルム達を
^{まね}招き入れるように、挑発していた…」

。シャルムは、その挑発を見て

…「シャルム。」

身長が、90センチちよつとしかない…シャルムの方に、顔を向け

ると…

シャリムは、瞳の色を、緑から…紫色に変えて

…
「売られたケンカは、買わないと失礼です。」

…と、紫色の両目を静かに燃え上がらせていたので

、
その様子を見た…シャルムは

、
（ナイトモードに、なっちゃった…）

。もう…こうなったら、誰にも止められない…と、諦めたように…

シャリムから…3歩うしろに下がり…

、
そうして…シャルムが、うしろから見ている前で

…
シャリムは、左手の人差し指と中指を立てて…

…その立てた2本の指を使って

…
「パーテル、アウ”エクレド”

。上から下へ…そのあと、右から左へと十字を切る

。すると…十字を切った場所に、青い十字の光が浮かび上がり

…
シャリムが、その十字が光輝く場所へ…左の手の平を合わせて…

それから…

…
「セドトウア、ペル、ジェセム、クリスタム、フィリウム、ウニゲ
ニトウム。

純白の乙女の名を持つ翼の剣よ。

。 我が前に姿を現せ！」

呪文を唱えると…

… シヤリムの左手の手の平の前で、さらなる青い光と共に…

等身の幅が9センチ。そして、長さが50センチくらいある…双翼の剣が現れる

。

シヤリムは、手で握る所の上の方に…

白い2つの翼がついた剣を、左手で握りしめて

…

「恐れる心に勇気を示せ！」

双翼の剣アルウ”イド！！”

。

雄叫びおたけをあげながら、その左手に持った剣を掲げると

…

左手で掲げた剣を、下げると同時に、うしろの方へ振り向き…

その先にいるシャルムに

、

「シャルム。少しの間、これで時間をかせいでくれませんか？」

…

わたしは、他にすることがあるから…と、シャルムに、その剣を差し出し

…

差し出された剣の前で、シャルムが

、

「でも僕、剣は…」

やった事がない…と、迷っていると…シヤリムが

、

「あのメタルグリーンさんは、一発狙いの、力押しタイプです。

シャルムが持っている、スピードを生かせば、十分に戦えるはずで
す」

。そう言ってるあいだに…鎧剣士が５メートルくらい近くまで、迫っ
て来たので…

、それで覚悟を決めたのか……シャルムは、シャリムに差し出された
剣を、右手に取ると…

。（軽い…ナイフより軽いかもしれない…）

それに身体も少し軽くなっている事に気づき

…
シャルム

「いける！これなら！」

、シャルムを追いこして…鎧剣士のいるところまで、走っていき…

、剣を持って迫る、シャルムに対して…鎧剣士が右手に持った刀を、
ブン！…と、振り下ろすと

…シャルムは、振り下ろされる直前に、バックステップをする事で、
その斬撃をかわし…同時に、鎧剣士の頭部に、シャルムの左の手の
平を向けて、そこから…

、
「ルアイトボアウト！」

、光の弾を放って…その光の弾を、鎧剣士の頭部に、ぶつけると…
そのせいで、鎧剣士の足元が、ふらついて…隙が生じた事で、
…シャルムの頭の中に

…
（いける！これなら僕でも！）

… 欲が生まれていた。

、
だが…シャルムは、気づいていなかった…

。その心理こそが、戦いの中で、多くの人の命を奪^{うば}ってきた…心の
罨^{わな}だという事を…

。シャルムが、向かい合う鎧剣士の左足を狙って

、
右手から両手に持ち変えた双翼の剣を…まるで野球のバットを振りぬくように…左側から、ガキーン！…と打ち込んで

鎧剣士が、バランスを崩^{くず}すのを狙っていた…だが、それでも…鎧
剣士は、バランスを崩^{くず}さず…

。頭の上に持っていた刀の刀身を…ブン！と、兜割^{かぶとわ}りのように…
シャルムの頭部を狙^{ねら}って、叩きつける！

。しかし、シャルムも右手を使って、頭部を守るように、横に構えた
双翼の剣の、刃のうしろに、左手の手の平をそえて…

ガキーン！という音と共に…
向かってくる刀の刃を防^{ふせ}ぐが…

、
…そのせいで…シャルムのサンダルを履いた両足に、ズン！と体重
が、かかり

…
シャルム

「くっ…」

シャルムの足元に痺れが走っているあいだに…
その隙を狙って

…
腰の右横の方に…右手に持った刀を、もっていった鎧剣士が…

そこから、シャルムの首の左側めがけて、
スパツ！と、刀で斬ろうとするが…

だがそれは、鎧剣士と向かいあったシャルムが、首の左側を守るために…

、
剣の刃のうしろに、左手の手の平をそえながら…

縦に構えた双翼の剣に、受け止められて

、
ガキーン！と、鎧剣士の刀と、シャルムの剣の刃が、激突すると…

縦に構えた剣で、刀を受け止めたシャルムは、体重が軽かったせい
か…

、
その衝撃で、横の方に、体が吹き飛ばされて…

その先にある洞窟の壁に、ゴン！…と後頭部を打ってしまう…

。そのあと、シャルムは、ズルツ…と壁に、もたれかかるように…
倒れながら

…
（ダメだ…目の焦点定まらない…）

。脳震盪のようなものを起こしているところで…

、
鎧剣士は、追い討ちをかけようと…シャルムの方に向かって歩いて
行き

、
そして、そんなシャルムに迫った…鎧剣士の刀が、振り上げられて

…
洞窟の壁に、もたれかかるように倒れた、シャルムに向かって…
今にも、その刀が振り下ろされようとしていた…

。ポチ

「シャルムウー!!」

。ブンー!!

、
………?

はたして、シャルムの運命は……

…

《つづく》

第4戦へシャルムの誤算（後書き）

、
双翼の剣アルウ”イド。

羽つき、とも言われる…

、
白い鳩の羽のような2枚の翼を持つ剣で…

、
持ち手のところが、頭部にあたるのか…

その手に持つと…翼が逆になる特長がある…

。この剣は、羽毛のように軽く…

その手に持つと、身体が、鳥のように軽やかになると、いわれ
てい
る…

。そして…この剣は、持ち主が、遠くにいと…

…
持ち手のところが、上になって…

持ち主のところまで…パタパタと、羽を羽ばたかせて…空を飛ぶと
いう逸話^{いっわ}があるため…

パタパタ剣とも呼ばれている…。

第4戦〈闇からの声〉

そこには暗闇があつた…

そこで、シャルムが…

（真っ暗だ…）

暗闇を意識すると…

やがて…そこに、一筋の光が現れ…

それと同時に…シャルムの意識に…

（目覚めよ。）

…と、誰かが語りかける

…その、意識に直接響く…誰かの声にシャルムは…

（そうだ…この感じ…前に感じた事がある…）

鎧剣士が、かけた幻から…覚めた時の事を思い出して…

「君は、一体？」

…何者なんだ？と、話しかけるが…

だが…その、どこか懐かしい気持ちにさせる、その意識は…

「目覚めよ。」

…そう言つて、光輝くばかりで…

…その光を見ているうちに…シャルムは、意識が現実…ひき戻されるのを感じていた…

。そして…シャルムが…

「待て！君は！？」

。そう叫んでいるところで、その光が…暗闇の世界ごと、グニャリ…と曲がり…

…シャルムが、現実世界で、目を覚ますと…

。その青い目に…シャリムと鎧剣士が戦っている光景が映っていた…

シャルムが気を失っているあいだに…鎧剣士の刀と、何度か剣を合わせていた…シャリムは、自分の右側の壁に倒れていた、シャルムが立ち上がってくるのを見て…

、シャリム

「良くがんばってくれましたね…」

。シャルムに、お礼を言ってから…鎧剣士の方に、顔を戻すと…

、
「あとは、わたしに任せてください！」

、正面から、垂直に、振り下ろされる鎧剣士の刀を…

、残像が残るような…素早いバックステップで、ヒラリとかわして…

、そのあと、すぐに…

腰の左側の鞘に、刀を納めるように…

、右手の剣を、腰の左側に、もって行って…

…
そこから…右ななめ上に、刀を、スパッ！と切り上げると…

、
…そこから真空刃が、発生して…

シャルムと、向かい合った鎧剣士を吹き飛ばし

…

真空刃を受けた鎧剣士の鎧の、腹から胸の方にかけて…ピリッと、
電気の光が走る…

。

それを…洞窟の壁の近くで、シャルムが

「あれは…真空電撃刃…！」

…と、そう言つて、見ている前で…

シャルムは、真空刃のせいで、うしろの方に、吹き飛ばされてから
…仰向けに倒れた、鎧剣士に向かつて

、

「真空刃を、使えるのは…あなただけでは、ないんですよ…」

。

そう言つたあと…シャルムの方に、双翼の剣を向けて…

、

「シャルム！わたしの剣に、ファイヤーボールを放つて下さい！」

………そう叫んだので

、

それを聞いたシャルムは、右手の手の平の前から…

双翼の剣の刃はこばに向けて

、

「ファイヤーボール！」

…10センチくらいの火の球を放つと

…

シャルムは、その火の球を双翼の剣の刃で受け止めて、

右手に持った、その剣の刃を火球の魔法の炎で燃え上がらせる…

。

そして、そのあと、起き上がった鎧剣士の方に、身体を向けると…
右手に持った炎を宿した剣を、逆手持ちさかてもにして…

さらに、剣を持った右手に、左手をそえた事で…

両手で逆手持ちをした剣の刃を、地面に突き刺して

。

「地を這はう、火炎の波動によつて…我が敵よ！燃え上がれ！」
…と、シャリムが叫ぶと

…
突き刺した剣の刃から吹き出した炎が、地面を伝つて…立ち上がった鎧剣士の方へと、ほどばしる！

、
シャリム

「火炎烈風波！」

、
すると…地面を伝つて、鎧剣士に向かった、剣の炎は、鎧剣士の足元から、ボツと…

鎧剣士の周りを包み込むように燃え上がり

…
その鎧剣士のまわりから、燃え上がった炎が、あまりにも高温であるために

…
鎧剣士の鎧の色が、メタルグリーンから…オレンジ色の鉄の光へと変わつて…

、
横から、それを見たシャルムが…

「今だ！シャリム！！」

…と、シャリムの方を見ると…

「あれ？」

…そこには、シャリムの姿は無く…

、

それを離れた場所から見ていた、シュナウゼンの

「違う！あそこだ！」

…と、右の人差し指の指先が差し示すように…

、
一瞬の間に、鎧剣士の頭上に跳び上がったシャリムが、両手で振り上げた剣の刃を、

鎧剣士の兜から…^{かぶと}股の下の方に…^{また}ブオン！と、一気に振り下ろした事で…

、
鎧剣士の頭から、股の下にかけて、一直線の光の軌跡を残して

…
地面に着地したシャリムが、そのあと…クルンと、鎧剣士に背中を向けてから

…
その間に、両手から右手に持ち変えた剣を、ブン！と一回、振ると…

。
鎧剣士の鎧の、正中線に描かれた剣の光から、ピシピシ…と亀裂^{えが}が走り

…
その亀裂から…

…おそらく…オレンジ色の鎧の内側から、出ているであろう…白い光が漏れる…

そして…白い光の亀裂が、やがて…炎に包まれた、鎧剣士の鎧全体に広がった時…

その鎧は、目くらむような…まばゆい光と共に…バキーン！と、たくさんの鎧の欠片^{かけら}となって、飛び散った。

、
そして…まるで、爆発したように…鎧が飛び散った、その場所から…少し離れた場所にいた…シャリムのところに

…

シャルム

「やったのか？」

、
銀の髪の少年が近づいて…そう話すと、シャルムが

…
「いえ…これからが本番です。」

…と、話す通り…

鎧剣士の右手に持った刀と一緒に、鎧が飛び散った時の光のせいで

…魔法の炎が消えた、その場所に…

。黄緑色の骸骨^{がいこう}が立っていた…

、
それを見たシャルムが

「あ…あれは！まさか…ライトボーン！？」

…そう叫ぶ中…

、
ライトボーンと呼ばれた、全身が黄緑色の骸骨は

、
破片^{はへん}となった鎧と、一緒に飛び散った刀のところまで行ってから…

、
刃の一部が、地面に突き刺さった…その刀を、左手で引き抜き^ぬ…

。そのあと、シャルムがいる方へ身体を向ける…

。その先でシャルムは、骸骨姿の剣士に、こう告げるのだった…

、
「じゃあ、始めましょうか…第2ステージを…」

《つつく…》

第4戦〈闇からの声〉（後書き）

《真空電撃刃》

、
身体全体に広がっている静電気を、剣の刃に集中させて…
剣に集めた電気を、

、
かまいたちとなった真空の刃と一緒に放つ技わざの事…

主に、東洋の剣士が使う技らしいが…なぜ？シャリムが、これを使えるのかは…今のところ謎である…。

第4戦へ魔封じの結界を打ち破れ！

…黄緑色の骸骨が左手で、地面に刺さった刀を引き抜いた時…

シャルムの近づいていた、シャルムは、その方向に、右手を向けて

「ルアイトボオツ！」

、
右の手の平の前から光弾の魔法を発射しようとする…

、
「あれっ？」

、
なぜか？手の平の前で、エネルギーが集まらなかった…どういう事だ…と、不思議に思っているところで…

、
その近くにいたシャルムが…

「まわりを見て下さい」

…と、そう言ったので…それを聞いたシャルムが、言われた通り、
周りを見て見ると…

。
「えっ？」

…
なんと！周りの壁の色が…銅の色からメタルグリーンの色に…変わ
っていた…

、
それを見たシャルムが、鎧剣士の鎧が砕け散った時の爆発的な光を
思い出して

「まさか！あの時の光で？」

。この辺りが魔法禁止区域にされてしまった事に、気づいたところで
…その近くにいたシャルムは

、
「そうです。今、この場所で、魔法を使う事は、出来ません…。
おそらく…メタルグリーンさんの鎧を壊した時に、このトラップが
作動する仕組みになっていたのでしょうか…」

。そう言うってから…右手から左手の方に、剣を持ち変えて…

、
「やられましたね。まさか、こんな伏線が、あつたなんて」

。笑顔を、シャルムの方に向けると…笑顔を向けられたシャルムは

、
「そんな笑顔を向けている場合じゃないでしょ。」

…と、少し困ったような顔で、苦笑しながらも

…
黄緑色の骸骨剣士の元へ向かう…シャルムを見送るのだった…

。そして、シャルムが

9メートル近く離れていたポチとシュナウゼンがいるところに行っ
ているあいだに…

シャルムは、黄緑色の骸骨剣士の2メートルくらい手前から跳び上
がって

ジャンプしながら骸骨剣士の頭部に向かって、
頭上に掲げた左手の羽剣を振りおろすが

…
それは骸骨剣士が頭の上で…横に構えた刀に防がれたあと、

骸骨剣士がシャルムの剣を防いだ左手の刀を力いっぱい振り払った
事で…

シャルムは左手で握った羽剣ごと、うしろの方に弾き飛ばされるが

…そのまま吹き飛ばされて…2メートルくらい後方までいった時…

シャルムは、身体をネコのように丸めて、フワリと…吹き飛ばされる勢いを殺してから…地面に着地して…

そのあと、顔を、左肩の方に向けて…自分の後ろにいるシャルムに

…「シャルム！魔法禁止区域の解除を！お願い出来ますか？」

、頼みこむと…シャルムは、シャルムに

「でも魔法禁止区域の中じゃ魔法は使えないよ！」

…そう言ってきたので…シャルムがその事に対して

「そうですね。」

、確かに…魔法は使えません。ここでは…」

、そう言葉を返すと…それを聞いたシャルムが

「…ここでは？…そうか！そういう事か！？」

、シャルムの話で、何かに気づいたのだろうか…後ろにいる、シュナウゼンとポチに

「さあ、二人ともいくよ。」

、…そう言って…それに対して

「え！？」

…と答える、シュナウゼンとポチと一緒に、これまで通ってきた道を逆走するのだった…

。 シヤリムは自分達から遠ざかっていく3人の足音に気づくと…

… 「なら、わたしもやるべき事を、やりますか！」

。 … と左手で握った双翼の剣で、黄緑色の骸骨剣士に向かって行くのだった…

そして、これまで来た道を戻っていたシャルム達の周囲が、メタルグリーン色の鉱石から…

岩や土で出来たところに変わった時

… シヤルムは、そこで足を止めて…先ほど走ってきた鉱洞の場所へ振り向き

… … そこで、同じように足を止めて、振り向いたポチとシュナウゼンの前で、

手の平を広げた両手を突き出すと…

、 … なんと広げた両手のまわりから…白い光が出ていたので…

それを不思議に思ったポチが、右手に持った光の球の光を、シャルムの方に向けながら

。 … 「確か…魔法禁止区域の中では魔法が使えないんじゃないなかったか？」

、 … 犬のような耳だから…子供達と距離をとりながらも、聞こえていたのか…

… … その事を尋ねると…シャルムは、両手を前に突き出しながら

… … 「確かに魔法禁止区域の中じゃ魔法をかき消す結界の力が働いて魔

法が使えない…

でも結界の外からなら、それは、関係ないでしょ」

。そう言つて

…「そうか…」

犬のような口で呟く^{つぶや}ポチを納得させたものの…

、シャルム

（だけど…魔法をかき消す結界を打ち破る^{やぶ}には、僕の力だけじゃ足りない…。）

…その事に気づいて…

後ろにいるシュナウゼンとポチに向かって…

「ポチ！シュナウゼンさん！僕の背中に手を当てて！力を送って下さいー！」

…叫び声をあげると

…「わかった。」

、「うおふ。」

、シャルムの背中に、シュナウゼン右手が…

そのシュナウゼンの背中に、光の球とリュックを足元に置いたポチが両手を当てて、力を送り込むが…だが…それでも

…（駄目だ。それでも魔力が足りない…）

。もう駄目だ…と、シャルムが思った時

…

、 フツ…と何者かの大きな手がポチの背中にそえられる…

。 (…この感触…人のものじゃない…まさか？これは…)

、 ポチ

「ベンチュウさん!!」

、 「チュツ…本当のヒーローは、遅れて来るものだチュウ。」

、 ベンチュウの前足を通じて…ベンチュウの力を借りたポチの力が、
ポチの両手から…シュナウゼンの背中に送られ…さらに
その力を受けたシュナウゼンの突き出した右手から…さらにシュナ
ウゼンの力を加えた魔力が、シャルムの背中に送られていき

…

。 (ものすごい魔力だ…)

。 「いける！これならきつと！」

シャルムの魔力が、ガラスが割れたような音と共に、魔法を封じて
いた結界を打ち破り…シャルムの前方に見えるメタルグリーン色の
壁が…

、 まるでシャルムの両手の周りにある光が乗り移ったかのように白く
発光し…

、 シャルム

「いっけえええー！」

、 壁中を照らすように広がる白い光が、シャリムとライトボーンが戦
っている場所まで広がっていく…

そしてライトボーンが上段から振り下ろす剣の刃を

…頭の上で横に構えた双翼の剣の刃で防いだシャルムが

、
「やりましたね。シャルム。」

、
微笑みを浮かべた時…

もはや魔法禁止区域全体まで広がっていた壁の光が消えて…周囲の
壁が、元の銅のような金属の色に戻るのだった…

《つづく…》

第4戦〈魔封じの結界を打ち破れ!〉（後書き）

視界の対照について

…

これが表現が難しいところで…

例えば、誰だれが左上から右下に剣を振り下ろしたとすれば…

対人して向かい合う人からは、その人の視点を考えて、右上から左下に振り下ろす描写となる訳です

。

だから例えば…

「おい、何で剣を右下に振り落としたのに…

次の瞬間、左下に振り落としたと表現が変わっているんだ。」

…と、思いかも知れませんが

…

剣を振る人と、その人と向かい合って剣を受け止める人では、視点が違いますので、そういう表現になります

。

すいませんが、筆者の表現不足として、対人戦闘の説明は、これで許して下さい。

第4戦〈熱戦！激戦！超接近戦！〉

横幅10メートルに、高さは7メートルはあろうか…

銅のような金属の壁に囲まれた場所の中で

…左手に剣を持ち変えたシャリムと、黄緑色の骸骨剣士が、2メートルくらいの距離の間で対峙^{たいじ}していた。

光の球がないせいで、辺りは暗いが、ライトボーンは、その名があらわす通り…暗闇の中で、骨だけの身体を黄緑色に発光させてライトボーンと向き合っていたシャリムも黄色のオーラで全身を照らしていた。

そして、ライトボーンは、いつの間にか拾いあげていた…3センチくらいの鎧の破片を

刀を持たない方の手である…骨だけの右手の曲げた人差し指に、はさんだ親指の上に乗せて…それをコインのように

…ピン！

弾く^{はじ}

その宙に舞った小さな鎧の破片が、コッソ…と、地面に着いた時…ドン！…と、シャリムとライトボーンは、それぞれの武器を持って飛び出していた！

そして…タン！

跳び上がったシャリムを迎撃^{げいげき}しようと、ライトボーンが振り上げた左手の刀を振り下ろそうとした時

…
シャリムは、ライトボーンに向かって…ジャンプしながらも、身体をひねって、横に払おうとする左手に握った剣の下の方に…さらに右手を加えて

、
両手で持った羽剣を…そのまま横に払うが…その途中で

！

ガキーン！

！

上の方から叩きつけられるライトボーンの刀の一撃と激突し…
ぶつかり合う刀と剣の刃が一瞬、十字を形作る

。

そして、ジャンプで勢いをつけたシャリムの両手に持った剣に…
ガキーン！…と、刀を弾かれたライトボーンが、バツ…と、うしろの方へ跳躍すると

…

シャリムも身長が90センチちょっとの少女とは思えぬ驚くべき跳躍力で、バックジャンプして距離をとるが…その時

、

シャリムの金色の前髪は何本かが…ハラリ…と、地面に落ちる

…

（刀と剣が、ぶつかった時の風圧で切れたのか…）

、

地面に落ちる自分の髪を見て…これがライトボーンの実力か…と、
シャリムの額からツウ…と、一筋の汗が流れ落ちるが

…

（でも…）

、

ポチャやシャルムの気配が、ここに近づいてくるのに気づくと…

、

（守りたい人達がいるなら…）

その間に、両手から…左手のみに戻した剣を構えて

「やるしかないでしょう！」

…5メートル先にいる…ライトボーンに向かって飛び出す！

だが…フェンシングのようなシャリムの片手突きを先読みしていた
ライトボーンは

左手に握った刀を、腰の右側の方に引き寄せ…そこから左斜め上に、
一気に

スパアツ！！

斬り上げる！

すると…そこから発生した風の刃が、シャリムに襲いかかり

…その風の刃が放たれる瞬間に、それを察知したシャリムは

（真空刃！？）

立ち止まると同時に、左手で握った双翼の剣を、目の前でかざしつ

つ…残る右手を、剣の刃身にそえて…そこで

「はっ！！！」

列破の気合いを入れると…

顔の前に、剣をかざすシャリムの前に一瞬、視界では確認できない透明な壁が出現し…

かまいたちのような…その斬撃を防ぐ

！

しかし、シャリムが真空の斬撃を防ぐ、その一瞬の間に…ライトボーンが両手で握った刀は、ツツウー…と、反時計回りに孤へ円の事《を描き…

それを見たシャリムの視界が

、
（あれ？）

ぼやけていき…

やがて、ぼやけた黄緑色の骸骨剣士の姿が2つに分かれ始め…

…シャリムの視界が再び、はつきりした時…シャリムの目の前には、なんと二人の黄緑色の骸骨剣士の姿があった

。

シャリムは、その時ライトボーンが両手に持った刀で孤を描いた時…軽い催眠状態にかかった事に気づき

…

（ダブルか…）

。

幻術にかかった事を自覚する

。

（ダブルは、確か視覚を通して…相手の脳に暗示をかけて、自分を二人に分かれているように見せる術のはず…）

、

「ですが…」

、

そうシャリムが呟くと…

二人になって並び立つ、ライトボーンは、

両手で握りしめた刀を頭の上に構えて…剣道の面打ちの体勢で、
ダツ…と、いつせいにシャリムの方へ駆け出すが…
その瞬間、シャリムは

、
「例え、この目が2つの姿を映しても…」

。スウーッと目を閉じて…次の瞬間、駆け出して来たライトボーンが
叩きつける刀の刃の一撃を

、
両手に握った双翼の剣を、頭の上に構えて…
ガキーン！！…と防ぎ

。 「耳から聞こえてくる刀を振る音は、1つです」

振り落とされた刀の衝撃を感じて目を開く…
シャリムの目には、一人の骸骨剣士の姿しか、映っていなかった…。
だから、白いローブを着たシャリムは

、
両手で打ち下ろした刀で、そのまま押しきろうとする…ライトボー
ンの左側の足の方に狙い^{ねら}を定め^{さだ}めて

…
（確かに…わたしは、子供だから…キックのリーチも短いし…威力
も少ない…。でも！キックを放つ右足に魔力をためて、真空の風を
まといえ…）

、
「わたしの右足は！見えざる風で敵を切り裂く刃^{やいば}となる！」

、
真空の刃をまとった右足を、ビュオ！…と蹴り放つ

。しかし…その攻撃を予測していたのか…

いつの間にか右手を刀から外していたライトボーンは、
刃がぶつかり合っていたシャリムの剣から刀を離すと…
シャリムの空圧刃斬脚が放たれる直前に、バックジャンプで、その
場から離れ

…
「ぐっ…」

。シャリムの右足が空を切るが

…
（かわされた？でも！）

、空を切った右足の勢いいきおいを利用して…
バレエダンサーのように踵かかとを上げた左足を軸じくに自分の身体を一回転
させてる間に、体勢ていしを整えてから

…
「行きます！」

、身体からだの右側の方で
持ち手を、右手を左手の上にして、両手で持った双翼の剣の剣先を、
ライトボーンの方に向けながら…突撃すると…

3メートル先で、それを迎え撃つライトボーンは、両手で握りしめ
た刀を、左上からビュン！…と、右下に振り落とそうとするが

…
シャリムは、突き出した剣を、とっさに頭の上に構えて

、ガキーン！！

、それを防いだあと…
ライトボーンが、シャリムの剣に防がれた自分の刀を押し出そうと
するが

…
シャリムは、自分の持つ剣の刃を左下に傾ける事で、ライトボーン
の攻撃を受け流し

…
ライトボーンの刀が、剣の刃を伝って、シャリムの左下の方に滑っ
ている間に

…
シャリムは、剣から左手を離しながら、一步、右の方へ移動すると

…
向かい合うシャリムの左下…

つまり右下の方に、刀を受け流された黄緑色の骸骨剣士は、その勢
いで右膝をつくが…

すぐに両手から左手だけに刀を持ち変えて、
右下から左の方に向かって、ブン！…と払う

！
しかし…その攻撃を先読みしていたシャリムは、その斬撃が来る直
前に

右手に持った剣を、後ろの天井近くに放りなげてから…
シャシャシャ…と3回バク転して…ライトボーンから距離をとった
あとに

…
その場所に落ちてくる剣の持ち手を、パシッ…と左手で取ると…
次の瞬間、ズキン…と右足に激痛が走り

…
（空圧刃斬脚を使った時か…）

、
右足の筋肉を痛めた事に気づくが

…
「でも！」

それでもシャリムは、すぐに！

体勢を立て直したライトボーンに跳びかかり…

、
カァン！キーン！カァン！カァン

！

左手に持った剣の刃で、ライトボーンが左手で振るう刀と打ち合う

。

そして…離れた場所から近づいて来た

シャルムとシュナウゼンの目に最初に映ったのは、その時の光景だった

。

《つづく…》

第4戦〈空中のアスリート〉

魔封じの結界を破るために結界の外に出て…

またシャルムとライトボーンが戦う場所に…ポチとシュナウゼンと一緒に近づいたシャルムは

「見て！シャルムだ」

光の球で辺りを照らすポチの隣で、そう話すと…

背中にリュックを背負ったまま歩くポチも

「その様子だと無事なようだな…」

犬のような視力で遠くは、あまりはつきり見えないので…シャルムの話の聞いて、安心する

それから…シャルムは、後ろを歩く、黒い魔法衣を着た長い白髪の男と

…
シュナウゼン

「なあ君達は、マーズの人達なのか？」

シャルム

「ここにとらわれてたくらいだから…たぶん違うと思いますよ」

「そうか…」

そんな話をしながら、シャルムが戦っている場所に近づいて、その戦いを見守る…

。そのためだろうか…その後すぐに、ライトボーンと戦っていたシャリムの身体の周りのオーラの輝きが強くなり…
身体が空中に、フワリと浮かんだのは

、それを知った、シャリムが左手に持った剣で、ライトボーンの刀と打ち合いながらも

チラッ…と、シャルム達のいる方を見て、シャルムが広げた両手を、前に突き出している事に気づくと

…（ゴーレムと戦った時の魔法の応用か…

確かに、あの時と違って、シャルムが浮遊するための魔法の力を送り続けてくれるから…）

。シャリム

「同じ目線で戦う事ができる！」

、50センチくらいの空中に浮かんだ両足で、その空中に出来た足場を利用しながら…

ライトボーンが左手で振るう刀と打ち合う

…

そんなシャリムとライトボーンの打ち合いは、どちらも洗練された剣の腕前なので…

まるでライトボーンが、自分の周りを飛び回る妖精と、剣舞を踊っおどているかのように…優雅で、

シャルムの後ろの方で、それを見ていたシュナウゼンを

。 「まるで幻想の世界で戦ってるかのようだ…」

そう言わしめるほどに、ライトボーンの刀と打ち合うシャリムが、

流れるような動作で

ライトボーンを華麗に舞うと…

まるでシュナウゼン達の頭の中に、情熱的な曲が流れてくるかのよう
に感じられて…シュナウゼンは

「しかし何故？高さが加わったとはいえ…

リーチの短いあの子が戦いを、あそこまで支配できるんだ？」

、
シャリムの剣技がライトボーンを、わずかに押している状況を実況
すると…

それを聞いて…前からシャルムが

、
「確かにシャリムの方がリーチは短いけど…シャリムの方が常に攻
撃の先手を取っているし…

攻撃の初手が次の攻撃につながるようになってるから…ライトボ
ーンも、シャリムの剣を防ぐので精一杯になってるんじゃないかな」

。
そう話すので…シュナウゼンは

、
「なるほど…つまりシャリムもすごいが…

ライトボーンも、それに対応できるだけの力を持っている訳か…」

。
あの骸骨の頭の中は、空っぽそうなのに、そんな対応力がどこにあ
るのか…と、不思議に思うが…

、
そんなシュナウゼンの考えを読み取ったのか？シャルムが

「たぶんライトボーンには思念みたいなものがあって、その思念に
詰まった経験がライトボーンの身体を動かしているんだと思う」

。
そうシュナウゼンに話しながらも

…
（だけど…シャリムなら、もうその事に、とっくに気づいているはずだ）
。

そう考えたシャルムは、シャリムが左手に持った剣で、ライトボーンと打ち合いながらも…

ライトボーンの周りを反時計まわりに移動している事に気づき

…
（円を描くように移動しているのか…
それになんだろう…

剣を持たない右手の人差し指と中指を立てて、何かを描いてるように見えるけど…

、
まてよ…動かした右手からポタポタ落ちてるあの赤いものは…まさか！？）

、
そう…それは、まぎれもなくシャリムの血だった

…
傷口は浅いようだが…まさかライトボーンに切られたのか？…と、シャルムが気にしていると…

そのせいで、シャリムにかけている魔法を維持^{いじ}させるための集中力が途切れてしまい

…
「しまった！」

、
そんなシャルムの声と同時に…シャリムの身体が地上へ落下して…

、
（すぐに魔法をかけなおさないと…）

、
そう考えるシャルムの頭の中に

…

。 【素早さを上げる魔法を！かけてください】

テレパシーだろうか…シャリムの言葉を伝えられて…シャルムは、
【分かった】

、 そう返事を伝えてから…

。 「風の精霊よ。汝の祝福によって。純粋な悟りの真名を持つ子に、
汝の如き軽さを与えよ」

。 「風より速く彼の者に届け！イクスアルペイ！」

。 シャリムに素早さを上げる魔法をかけると

… かけられたシャリムは、ライトボーンの頭上から振り落とされる刀
を…1回目のバックステップで紙一重でかわして

それから…2回、3回、4回、5回…と連続でバックステップして、
黄緑色の骸骨剣士から3メートル以上の距離をとるが

… その間に、ライトボーンは、左手に持った刀を、腰の右側の方に置
く、抜き打ちの構えをとり

… 骨で出来た右足を前に出してから…

、 両足を少し落とす事で、足元もしっかりしている所を見て…シャリ
ムは

… （剣を握った左手に…広げた右手を近づける、あの構え…真空刃か
…）

… 「なら、わたしも…」

…

左手の羽剣を腰の右側に置く、ライトボーンと同じ構えをとり

…
シユナウゼンの前で、ポチと一緒に見ていたシャルムが

…
「まさか真空刃を撃ち合う気なの？シャルム」

。 見ている前で、シャルムは腰の右側から左手で持った剣を

…
シユパツ！

、 抜き放つ！…

…が…しかし…その抜き放った剣は、シャルムの手元を離れ…
ヒュンヒュン回転しながら…ライトボーンの頭上を飛び越していき

…
シャルムも左手から剣が離れたと同時に、ライトボーンの元へと飛び出す！

だが…それを迎え撃つライトボーンは、間合いの中に入ってくるシャルムの首筋に狙いを定めて…

腰の右側に置いた刀を

斬^{ザン}！！

…抜き放つ…

。 すると…それまでシャルムの隣で、シャルム達の戦いを見ていたポチが

、 「うつ…」

。 その時に、シャルムの首が斬られたと思って…思わず犬のような顔を右側に背^{そむ}けるが…

ポチの隣で、その光景を目を背けずに見ていた…シャルムに

「大丈夫。シャリムの方を見てよ」

。そう言われて、恐る恐るシャリムがいた場所に…右手に持った光の球の光を向けると

…何故か？ライトボーンに首を斬られたはずのシャリムが、斬られる直前の場所に、そのまま立っていて…

やがて、その姿が蜃気楼しんきろうのように消えていく…

そして、幻まぼろしと重なっていた為に、ポチの目に見えなかったのか…霧きりが晴れたように…その場所から…

両足の膝ひざをついた黄緑色の骸骨剣士の姿が、ぼんやりとだが…見え始めた

。ライトボーンの刀の先が地面に突き刺さっている…

どうやら倒れないように…とつさに両手を使って、刀を逆手持ちに

して、地面に突き刺したらしい…

。それに気づいた…ポチは

、
「こ…これは一体…」

驚く中…

膝をついたライトボーンの、さらに奥の方から

…
「シャリム…」

。金の髪の少女が持つ、バニラの香りがしている事に気づく

…はたして？ポチが顔を背けた、あの一瞬のあいだに何があったのだ

ろっか
°
《…くっ》

第4戦〈破魔の閃光〉（前書き）

《これまでのあらすじ》

。

シャルムの着ている黒いローブより足元の丈が短い…膝上までしか丈のない白いローブを着たシャリムは、

3回連続の後転や…かまいたちのようなものを纏った右足で蹴りを放つなど、したあとで…

左足を前に出して…腰の右側に、左手に持った剣を納める

…

3メートル以上前の方で向き合っている…黄緑色の骸骨剣士と同じ構えをとっていたが

…

腰の右側に置いた、左手に持った剣を、自分の左上に切り上げた時剣が自分の左手から離れてしまう

…

はたして、回転しながら黄緑色の骸骨剣士を飛び越した、その剣を追うように飛び出したシャルムの運命は…

第4戦〈破魔の閃光〉

剣が左手を離れたすぐ後に飛び出したシャリムは…

黄緑色の骸骨剣士が左手に持った刀を払い斬りをする直前に

…
「ビジョンー!!」

。

駆け出す自分の前に、自分の幻^{まほうし}を出現させて…ライトボーンがシャリムの幻の首を切っている一瞬のあいだを利用して

…その後ろにいたシャリム自身は、一度は固まりかけていた右手首の血を、急に自身の体温を上げる事で、またポタポタと流れるようにすると…

バツ…と、傷口を広げるくらいの勢いで、右手を払^{はら}う事で

…刀を払うライトボーンの足元をシャリムの血で広げたあと…

続けざまにシャリムから見て…ライトボーンの足元の左側の方にスライディングして

…ライトボーンの右側を滑^{すべ}り抜^ぬけると

…それから…1秒も立たないうちに立ち上がって、そのまま駆け出し…その5メートル先で立ち止まると

…回転したせいで滞空時間^{たいくう}が少し長かった剣が…目の前に回転しながら落下してくるので

…その持ち手の所を左手で、パツ…と、うまく取りだしてから

…意思の力で右手から流れ出る血を止めて…

ライトボーンのいる、後ろの方に身体を向けると同時に

…
（ライトボーンさんの足元から道のように続く血の線を伝って…）

、
左手の剣を逆手持ちにしてから、その持ち手に右手を加えて

…
（剣の刃に冷気をまとわせて…）

。 剣の刃先から地面に突き刺すと

…
剣を突き刺したところから…ライトボーンの足元に広がる血の場所
まで…血の道にそって、冷気がほどばしり

…
それから、0コンマ何秒もかからないあいだに…
シャリムは地面に突き刺さった剣から両手を離すと

…
そのすぐ0コンマ何秒後に…突き刺さっているその剣を
今後は左手のみで、地面から引き抜いて
そのあと…1秒のあいだに左手に持った剣に自分の力を集中させて

…
（このわずかな時間では…真空の刃で斬る事は出来ない…）

。 「けど！」

、 腰の右側に剣を納める…真空刃の構えをとった、シャリムは

。 （魔力を加えた剣の風圧で 打撃を与える事ができる！）

真空刃を放つための剣を斜め上に振り上げると…
それによって生じた風圧の打撃は

、
背を向けている…黄緑色の骸骨剣士が、刀を振るために踏みこんだ
左足の膝の裏に直撃して

…
シャルムが突き刺した剣から放った冷氣によって凍った、たくさんの
血が残っている場所の上に立って事もあり…
バランスを崩して前に倒れそうになったが

…
とつさに左手に持った刀を下に向けてから
その持ち手の部分に、右手を加える事で

…
刀の持ち手のところを右手で逆手持ちにしてから…
一度、左手を離し

…
そのすぐあとに左手を加える事で…両手で逆手持ちにした刀を、
地面に突き刺すまでの間に…両足の膝を地面につけながら…
地面に刀の刃先を突き刺して、前に倒れるのを防ぐと

…
魔力によって生じた熱を地面に突き刺した刀を使って送りこみ…
凍っていた…足元に広がるたくさんの血を、その刀の刃に伝わる熱
で溶かす

。…
それが…目を離れたポチがシャルムに声をかけられてから…事態
を把握するまでに起こった事であるが…

…
その10秒後…
そんなポチの隣で、それまで、それを目を離さずに見ていたシャル
ムが、今度は、驚く番だった

。…
突然！ポチ達の7メートル先にいる黄緑色の骸骨剣士の…前、後ろ、
右横、左横…と、等身大の4つの炎の五芒星が、刀を地面に突き刺

したライトボーンの周りを囲むように出現して

ポチの隣で、シャルムが

「これは、結界魔法陣」

！

膝をついた状態から…立ち上がるうとしているライトボーンの周りを囲む、4つの炎で燃える五芒星について、口にするので

それを聞いていたポチが

「なんだ？その結界魔法陣って…」

右手に光の球を持ちながら…シャルムに聞くと…

シャルムは

「結界の中に敵を閉じ込めながら…魔法を発動させる攻防一体の技だよ。」

でもいつの間に、こんなものを…」

そう言っ、不思議がるが…その隣で、リュックを背負うポチは

（いや…俺の耳には確かに聞こえていた…

あれは…俺がシャルムに声をかけられる直前の事）

…
ライトボーンが両足の膝を地面につきながらも…両手で逆手持ちにした刀を地面に突き刺そうとした時

ライトボーンの4メートル以上うしろの方で…

突き刺した剣から両手を離れたシャルムは

前の方に突き出した左手の甲こめに、手の平を広げた右手をつけて
両手を重ね合わせると

…
「我が敵の前にラファエル、敵のうしろにガブリエル、敵の右手に
ミカエル、左手にウリエル。我が敵の周りに五芒星は燃え、敵の頭
上に六の星が輝く」

。 … そんな… わずかに前に、犬のような耳に聞こえた時の事を思い出
していたポチの隣でシャルムは

刀から両手を離してから… 立ち上がったライトボーンの2メートル
くらい上の方に… 光り輝く六芒星が回転している事に気づき

…
「ライトボーンの頭上に六芒星が！」

、
（まさか？ あれは…）

。 「だけど… あれには、膨ぼうだい大な魔力の量が必要なはず…」

。 一体どこでそんなものを… と考えるシャルムが、ライトボーンの足
元を見ると

… 先ほどシャルムが右手を振って飛ばした血の他に…

ライトボーンの周りを囲むように… 血の円が広がっている事に気づき

…
（血の円…ブラッディサークル… そうか！？ マーキングで…）

だが…シャルムには、ふにおちない事が1つあった

…それは空中に浮かんだシャリムが左手に持った剣で、ライトボーンの刀と打ち合っていた時の事

…（流れ出る血で円を作りながら…動かしていた右手は、あの五芒星を作り出す為のものかな？）

、しかし、そんなシャルムの考えは…次の瞬間に、すぐ打ち消される

…まるでライトボーンの動きを封じるように配置された五芒星の魔法陣のところに…

前にラファエル、後ろにガブリエル…右の位置にミカエル、左にウリエル…と、4人の天使の姿が一瞬、浮かび上がり…

その姿を見たシャルムが

、
「四大天使…」

。その言葉を口にした瞬間

！
ライトボーンの頭上の六芒星の回転が止まり…

回転が止まったその六芒星からライトボーンに向かって、光が発射されて

…少し間を広げた両足の膝を曲げながら

突き刺さった刀の持ち手に両手をかけて、その聖なる光に備えた^{そな}ライトボーンに

。…前に突き出した両手を、今度は、上に突き出した…シャリムの、

「降り注^{そそ}げ！！」

フォオリアルアイツ！」

。 叫びと共に、頭上の六芒星から放たれた光が直撃して！
光の円柱が、黄緑色の骸骨剣士のすべてを包み込む

。 はたして、その眩^{まはゆ}い閃光に、たまらず目を閉じたシャルム達が、その後に見たものとは

…

《つづく…》

第4戦へ星幽体の十字剣

「降り注げ！！フォオリイルアイツ！」

カッ！！

、
ホーリーライトのまばゆい光で…思わず目を閉じたシャルム達が目を開くと

…
プスプスツ…と、ホーリーライトが直撃したところの周辺が薄い煙けむりのようなものに包まれて…

…
どんどん薄くなつていく煙の中から…

やがて…暗闇の中で黄緑色の光を放つライトボーンの姿が浮かび上がってくる

…
地面に突き刺した刀の持ち手に両手をかけて

、
ホーリーライトに耐たえきつた、その姿を見て…シャルムは

「そんな…ホーリーライトは、アンデットに最も有効な…魔法の1つのはず…」

それに耐えきるなんて」

…
思わず右足を一步踏み出すと…

そのサンダルを履はいた右足のつま先に、何か当たっている事に気づき

…
「入れ物？」

、
一度しゃがんで、その小さな瓶びんの入れ物を右手に取って

瓶はに貼り付けてある紙の部分を見ると…

そこには、聖なる光止めクリームと書かれている

…
そう…日焼け止めが紫外線から肌を守るように…実は、ライトボーンは、このクリームを骨だらけの身体に塗^ぬっていたのだ…

。（瓶の状態から見ると…使ってから、まだそんなに日が経^たってないようだけど…

それまで冷凍とか…何らかの方法で、保湿とかされていた…と考え
ると…まさか…

誰かが魔法使いと戦う事を予想していた？）

…
そうでなければ日焼け止めでさえ…先進的な物である、この時代に…
こんなものを使うなんて考えられない…と、シャルムが思っている
ところで…

うしろにいたシュナウゼンが

、
「見ろ！ライトボーンの足元が…」

。
そう言われて、シャルムがその周辺の地面に目を向けると…

なんと！シャリムの描いた血の円いっぱい光が広がっているではないか！

、
そこで、しゃがんでから…右手に持っていた小さな瓶を地面に置いて、

立ち上がったシャルムは

、
突き刺さった刀を、左手で地面から抜いて、シャリムのいる方に身体を向けたものの…

刀を持った左手が上がらず…

まるで全身が痺^{しび}れたかのように…光の円の上で、一切動けない…

今、シャルム達に背中を向けている…ライトボーンの様子を見て
………

空中に浮かんだシャリムが左手に持った剣で、ライトボーンの刀と
打ち合いながら…

右手を動かした時の事を思い出し

…
（そうか…シャリムの目的は、ホーリーライトで敵を倒すのではな
く…）

煙のようなものが晴れる前に何があったのか想像していた

…

10秒前…

ライトボーンのまわりで、まだ煙のようなものが濃_こかった時…

突き刺さった刀から両手を離れたライトボーンの

周りに広がる血の円の上に幾_{いく}つもの光の文字が浮かび上がり

…

それをライトボーンの4メートル以上うしろから見ていた…シャリ
ムは

、

（そう…わたしは…メタルグリーンを倒して…ここが魔法禁止区域
になった時

ここに対魔法使用用の対策が、いくつかたててある事に気づいてい
た…）

。

だから…ホーリーライトが効かない事も、ある程度、予測していた
シャリムは、ライトボーンの周りを飛びまわっていた時の事を思い
出して

…

（だから…あの時わたしは、ホーリーライトの強力なエネルギーを

地面に描いた血の円に吸収させて…

そのエネルギーを使って、別の魔法に作り変えるための術式を、右手の人差し指と中指の指先で描いていたんだ…）

そして…ライトボーンの周囲に円形に並んでいた、光の文字が、フツ…と消えてから…

ライトボーンが突き刺さった刀を抜いて
シャリムの方に向かおうとした時

…
すでに左足の膝を上げていたシャリムは、

右手のチョキの形で立てた2本の指先を額に近づけて、何かを念じながら…

ダン…！と、その左足で強く地面を踏むと

…
それに呼応するかのように…ライトボーンの足元の地面が、血の円いっぱい^{いっぱい}に光だして…

再利用されたホーリーライトのエネルギーが見えない力^{ちから}となって
その光の円の上に立つライトボーン^{ほし}の身体を縛る

…

…

それらの出来事を想像したシャルムの頭の中に

…

【そうです。わたしは、考えてました…ライトボーンさんを倒すのではなく…

ライトボーンさんの魂を、呪われた思念から切り離す方法を…】

…伝えられる…シャリムの言葉と共に…

4メートル以上先の方で、シャリムと向き合っている…ライトボーンの背後に、ライトボーンと同じ大きさの人影のようなものが出現

して

、
シャリムは、目の前に突き刺さっていた剣の持ち手に左手をかけて
…それを引き抜くと…

その剣を持った左手を下げたまま…スツ…と、その紫色に変えた目を閉じる

…
すると、どうだろう…

そこで立ち止まったシャリムの前に…
目を開けた、もう一人のシャリムが現れ

…
左手に持った剣を、いつでも振れるように身体の左側に構えて…
ライトボーンに突っ込むように…地面の上を滑^{すべ}って行くではないか

…
そして、そのまま滑るように突き進んで…ライトボーンの骨だらけの身体をすり抜けた瞬間！

ライトボーンの背後にいる人影に向かって
シャリムは、その時、振り上げていた左手の剣を、目にも止まらぬ速さで十字に振って

その人影をすり抜けると

…
すり抜けたシャリムの姿がスウツ…と消えて…

そのシャリムが振った剣の刃の軌跡^{きせき}は…
ライトボーンの後ろの人影に十字の光を残す

…
そして、その十字の光から…影を喰^くいつくすかのように…ジワジワと光が広がって…

その広がっていく光が人影すべてをおおい尽くすと…その人影だった大きな光は…

まるで風で舞い散る桜の花びらのように…

。 たくさんの小さな光に姿を変えて飛び散った…

そして、血の円いっぱいに広がっていた光が、フツ…と消えて…
黄緑色の骨の身体だった…ライトボーンが、ただの白骨となり…
糸の切れたマリオネットのように…前の方に倒れると…

。 アストラル体を自分の身体から出すため…

右手同様に、剣を持った左手を下げたまま…ずっと目を閉じていた
シャルムも

…
左手に持った双翼の剣が…役目を終えて、フツ…と消えた途端に…
ちから力尽きたように仰向け倒れた

…
ポチが右手に持つ光の球の光によって…それに気づいたシャルムは、
10メートル以上離れた場所から

…
「シャルム！」

、
駆け出して…

シャルムの前で両足の膝をついてから…

シャルムの頭の後ろに右手をかけて、助け起こすと

…
（使い果たした魔力を自動回復するために眠りに入っただんだね…）

。 そんな事を思いながら…シャルムが
シャルムが目覚めるのを待っているあいだに

…
そこから10メートル以上離れたところで…
シュナウゼンがポチの隣に行つて

…

「この先に捜し物があるんだ…
手伝ってくれないか？」

。そう言つて、誘いをかけてきたので…

ポチは、シュナウゼンがシャリムと話していた時の事を…そこで思
い出して

…「ひょっとして…希望の箱の事ですか？」

、そう言つと…シュナウゼンは、少し不思議そうな顔で、ポチの方を
見て

…「聞こえていたのか？」

…と、ポチに聞くと

ポチは、

。 「コボルトだから…耳と鼻は、いいんです」

丁寧^{ていねい}に、そう答えたあと…シュナウゼンに

…「ひょっとして…記憶が戻ったんですか？」

…そんな事を聞くので…シュナウゼンは、少し小声で

、 「ああ…だんだん思い出してきたんだ…

だから、子供達が休んでいるあいだに…希望の箱を見つけて…
あの子達をビックリさせてやろう…」

。そう言つて、顔をシャルム達の方を向けると

…「そう言つ事なら…早く行きましょう…」

。
右手に光の球を持って、歩き出すボチと一緒に
子供達のいるところを追い越して…
さらに奥へと進んで行くのだった…
。

《25話へ続く…》

第25話へその希望は、見方を変えれば絶望となる…」

ポチと一緒に、子供達がいた場所を追い越したシュナウゼンは、そこからさらに50メートルくらい先に進むと…そこで一度、立ち止まり

…
「うん。この場所だな」

…
…そう言つて

…
そんなシュナウゼンの隣で立ち止まって、ポチが

…
「どうしたんですか？」

、
シュナウゼンの足元を、光の球で照らすと…
シュナウゼンから

…
「この下に希望の箱が埋^うまっているんだ。
オレは、疲^{つか}れてて…あまり体力が残^つてないから…君が掘^ほり出して
くれないか？」

°
そう言われたのだが…ポチとしては、地面が固^かそうなので

…
「やつては、みまずけど…掘れないかもしれません…」

°
右手に持った光の球をシュナウゼンに渡してから…

、
あまり期待しないで下さいね…と言おうとした時…シュナウゼンに

「大丈夫だ。穴を掘つても…手^{いた}が傷まないようにオレが魔法をかけ
るから…」

。 　まずは、リュックを置いて来てくれるか？」

　シュナウゼンにそう言われて…ポチは、

「うおふ。」

… 　そう返事をしたあと、

少し離れた場所に行つて…そこで、背中に背負つたリュックを地面に置くと

…

そこから元の場所に戻つたところで…

ポチに向かつて、広げた右手を突き出している…シュナウゼンが

、

「英雄の母たる銀足の女神よ…鋼の源たる汝の息吹を我が手に集め…鉄の器となるための祝福を彼の者に与えよ」

。

突き出した右手の手の平から青白い光を

…

「オーラメタリオン！」

… 　ポチに向かつて放つと

その放たれた青白い光は、次第にポチの全身を包み込んでいく

…

そして、魔法を使つたあとで…シュナウゼンが、その場所を離れる中

…

その青白い光に包まれた両手を広げて…その手の平を見ながら…ポチは

、

（なんだろ？身体の周りを何かが包み込んでるような…この感覚は…）

。

これなら思つた通りに穴を掘れるような気がする…と、自分の着ている茶色の服の両手の腕の袖をそで巻くまし上げてから

…
その場所に両足の膝をついたポチの両手が

…
「俺の両手よ！モグラのように突き進め！！」

°
ココホレワンワン！！ココホレワン！！と両手を使って、地面に穴を掘ると

…
その両手が…まるで畑の中を耕す^{たがや}鋤^{くわ}のように…地面を、サクサクと掘り進んでゆく

…
シユナウゼンは、そのポチの雄姿^{ゆうし}を見ながら…両手をギュツ…と握りしめて

…
「頑張れポチ！ここが君の最大の見せ場だ！！」
…と、叫び声をあげるのだった…

ちょうど、その頃…
地面の上に正座したシャルムの膝の上で…横になっていたシャリムが目覚まして…
緑色に戻った瞳を、うつすらと開けると

…
「シャルム…」
膝をかしてくれたシャルムの名前を言ってから…身体を起こして…
そのあと…キヨロキヨロと辺りを見てから…シャルムに

、
「…ポチさん達は？」

、
珍しく少し動揺^{どうよう}した顔で確認すると…

それを聞いたシャルムが

…
「シユナウゼンさんと一緒に、先に言つたよ」

。それがどうかしたの？…と聞こうとした瞬間
シャリムは、あわてたように

…
「いけない！」

駆け出そうとするが…その時

…
「うつ…」

右足に、ズキイン！…と痛みが走り…

そのせいで前の方に転んでしまう…

。そして…近くで、それを見ていたシャルムが

、
「シャリム！」

うつ伏せに倒れた金の髪の少女の名を叫びながら…そば側に寄ると…
その少女であるシャリムは、ググツ…と立ち上がりながら

…
「シャルム！！肩をかしてください！！」

。自分の身体の左側にまわりこんだシャルムに頼んだシャリムは、シャルムの左肩に左手を置いて

…
そのまま肩をかして一緒に歩いてくれるシャルムに

、
「え？い…一体どうしたの？」

…と聞かれた事に対して、シャリムは

。「説明は、あとです！今は、とにかく急いでください！！」

。そう答えながら…身体の右側で支えてくれるシャルムに…

「わかった」

。歩いている足を早めてもらうのだった

…
シャルム

。（ポチさん…）

。

一方、20センチくらいの深さに掘り進んだ時だろうか…

両手を、犬かきのように…使って、地面を掘っていたポチの右手に、
その時…カチッ…と何か当たった

。

どうやらそれは、石で出来た何かのようなので…ポチは

、

「これが…」

それが取れるように…周りを掘った事で…

ポチの掘った穴の中から…20センチくらいの石で出来た箱が姿を
現す

。

ポチは、土で汚れたコボルトの両手で、それを穴の中から取り出し
て…地面の上に置くと

…

その石で出来た箱のフタのところに…

古代文字のようなものが、数多く刻まれていたので…シュナウゼンに
、

「もしかして…これって、シュナウゼンさんが昔、埋めてた物なん

ですか？」

タイムカプセルみたいな物じゃないか？…と、近くにいたシュナウゼンに聞くと…

黒い靴を履いた…長身のシュナウゼンは

「まあそんなところか…

実はさ…その箱に、オレは、あるジnkスをかけてるから…出来れば、その箱を埋めたオレ自身は、開けたくないんだ。

だから君が、その箱を開けてくれないか？」

そうポチに頼むので…

頼まれたポチは、その箱を両手に取ったまま

「うおふ。わかりました。」

立ち上がった、その時に

（あれ？思ったより軽いな…これなら片手でも…）

そう思ったポチは、そのあと…右手の上に置いた

その箱のフタに左手をかけて開けると

ピカッ！！

突然！開けた箱の中から光が飛び出してきたので

「うおっ！」

思わず目を閉じたポチが、それで、びっくりしたせいで…思わず左手に持っていたフタも落としてしまう

…
しかし…ポチの間近にいたシュナウゼンが…
「この時を待っていた!!」

。その光を浴びながら…目を閉じると

…
ファサ…と、腰まで流れる白い髪は、漆黒しっくの色に染まり…
黒い魔法衣は、その色とは逆の…純白の色に染まる

…
そして、そんなシュナウゼンが、閉じた目を開いた時…
青かった瞳の色は、血のような…赤い色に変わっていた…

。一方…白黒の視界だったにもかかわらず…

箱を開いた時の光が、あまりに強かったために…

びっくりして、目を閉じたポチが…目を開けた瞬間

!?

ゴオオ!…と、突然吹いた強烈な風が、ポチを周囲の壁の方へ吹き飛ばし

…
吹き飛ばされたポチの背中が、ドン!…と壁にぶつかった時…その衝撃で

…
「がつ…」

。犬のような口を開いたポチが…

そのまま、ズルツ…と、壁にもたれかかるように…くずれ落ちる

。そして…ポチを吹き飛ばした強風が影響してか…

リュックと一緒に置いた光の球が、コロコロ…と地面を転がっていく中

…
ポチが壁にぶつかった時に、ポチの右手から離れた…石の箱が地面に落ちた時

…
「ポチさん！」

。少女の声と共に、黄色の光と青白いオーラの光が近づいてくる

…
そして…青白いオーラを放つシャルムに
身体を支えられたシャルムが10メートル近くまで近づいた時…
シャルムに肩をかしてもらいながら歩くシャルムは

…
「やっぱり神の見えざる手は、あなただっ たんですね…
シュナウゼンさん…いえ…ナインクール」シュナウゼン…」

。シャルム
「えっ!?!」

。驚く、少年の青い視線の先で

…
光の球が遠のいたせいで…薄暗い闇に包まれた男は、口元に、ニヤッ…と笑みを浮かべた…

。《26話へ続く…》

第26話へシュナウゼンの賭け

。 周囲12メートル四方は、あろうか…

薄暗い部屋の床に…

、 3メートルはある、大きな五芒星が描かれている…

その赤く光る魔法陣の上に…

。 紫色のローブを着た黒髪の男が立っていた…

「ライトボーンの思念が途絶えただと…

。 まさか…ライトボーンが倒されたというのか…」

動揺する星宮の近くにいる…

、 青いローブを着た長い銀髪の青年が

フェルゼ

「驚くのは、それだけではないようです。

奴らのいる地の底から…

。 圧倒的な気配を感じます…」

そこまで話した時…

。 パンテオン中が地震が起きたかのように、ゴゴゴ…と大きく揺れる…

、 それで、ますます動揺した星宮が

。 「くっ…この強大な魔力は…」

。 そこまで言った時…

地の底から這上^{はいあ}がるような不気味な声が聞こえてくる

…
????

「闇が広がる地の底から…我は今、蘇^{よみがえ}った。
誇り高いマーズ帝国を新たに築^{きず}くために…

我を封じた者達すべてを滅ぼしてくれるわ!」

、
それを星宮の隣で聞いていた、フェルゼは

「頭の中に直接聞こえる、この声が…ナインクールの…」
…薄明かりの中で…

初めて聞くその声に、寒気のようなものを感じるのだった…
。

そして…その地下の鉱洞の中では…

履^はいている靴^{くつ}まで白くなったナインクールが、
ジリジリ…と、フメートルくらいまで、距離をつめて来るシャリムに

…
「いつ…オレがナインクールだと気づいた…」

。
その事に触^ふれると…シャリムは

、
「幻覚の壁を通りすぎて…それについて、わたしが聞いた時…
あなたは、わたしが何も話していないのに…

催眠術^{あやつ}に操^{あやつ}られているかも知れないと言いました」
。

そう言つて、そのあと

…
「催眠術にかかった者が、操られている事を自覚している例は少ないんです。」

まして…記憶がないあなたが、催眠術について知っている事など…
普通は、考えられない…

つまり…あなたは、あの時すでに、記憶を取り戻していたんです」

。そこまで話すと…

、フメートル先にいるナインクールが

「仮に、その話が本当だとして…オレの記憶は、いつ戻った？

まさか最初から戻っていた…なんて事は、言わないだろうな…」

。

黄色から桃色に変わった光のオーラで、洞窟の中を照らすシャリムを
試す^{ため}ように…その事を聞くので、シャリムは、

「そう…

確かに、あなたは最初…わたし達と会った時に記憶を失っていた…

でも幻^{まぼろし}の壁を通った時に…あなたの記憶は戻っていた…

それまでにあった事といえば…幻の壁に刻まれていた文字を読んだ
事…」

。

そう言つて…そこから…

「そうです。

あの壁に刻まれていた文字には、2つの意味があったのです」

。

この答えを導き出した…シャリムは、さらに

、

「壁は、汝の心の中にあり…汝の真実は今、目覚めん…

この言葉には、あの壁が幻で出来ている事を、気づかせるためのヒ
ントが隠されていただけではなく…

あなたの記憶を目覚めさせるために必要な言葉も含まれていたんで
す」

。

つまり…壁に刻まれた文字の前半の…

壁は汝の心の中にあり…は、幻の壁だと気づかせるための言葉であり

…後半の…汝の真実は今、目覚めん…は、

シュナウゼンが、ナインクールとしての記憶を取り戻すためのパス
ワードだと…言うので

…それまで、シャリムの話を聞いていた…ナインクールは

、
「なら…オレ自身が、あの文字を何故、読めなかったんだ？
わざわざそこまで、まわりくどいする事の意味は、あるのか？」

、
そこまでの理由は、何かとシャリムに問いかけ…
それに対してシャリムは

「それは、あなたを見つけた時に…
あなたの足元にあった紙に、書かれた事が関係しています。

おそらく…あなた自身が自分の記憶を封じたのは、
あなたを見つけた人に…自分がナインクールだと、気づかせないよ
うにするためでしょうが…

そこには、もう一つの考えがあった…と、わたしは、思っています…」

。そこまで話すと…

6メートル先で、ナインクールは、興味深そうに

…「ほう…それで？その考えとは…」

。何だ？…と聞き返すので、シャリムは

、
「あなたほどの人なら…」

記憶を失ったふりをして…相手を騙す事も出来るはずです。

でも、ここにいたら…いつ人が来るのか…わからないし…

鼠を食べ続ける事にも抵抗がある…

だから…あなたはそこで、ある賭けに出た」

。そこまで言うと…シュナウゼンが

、
「その賭けとは？」

最後まで、シャリムの推測を聞こうとするので…シャリムは

、
「まず記憶を失った時の自分自身の状況を、想定した、あなたは…それを解除するためのキーワードが刻まれた、幻の壁を作り上げてから…」

あなたを見つけた人が幻の壁まで行って、そのキーワードを読むように仕向けるためのメモを残し…

…そのために…何年かは、生きられるようにするための知識も一緒に、そのメモに書き残した…」

。そうは言ったものの…まだ肝心な事が残っていた。
だから…ナインクールは

、
「だが、いつ来るかわからない人を待つ理由は、何だ？」

もしかしたら…オレは、まったく人が来ない事も…想定していたかもしれないだろう…」

。その事について聞くと…

それが聞かれるのがわかっていたシャリムは

、
「だから、賭けに出たんです」

。　　そう言ったあと…

、　　シャリムが、ポチが倒れていた場所に近づいた事で…すでに5メートルくらい後方にいるシャルムに

、　　「シャルム！！魔法使いが最後に頼るものは、何ですか！？」

大きな声で呼びかけて…

それについて、シャルムから

…　　「それは、直感だよ！」

、　　…そんな答えが返ってきて…シャリムは

、　　「あなたを助ける人が来る事が…直感的にわかった、あなたは、その直感に従^{したが}って…計画を実行したんです」

。　　そして…そこで現れたのが自分達だ…と、ナインクールに話し…それを聞いたナインクールは

、　　「大したものだな…」

。　　そう言つて、そのあと

…　　「そうやって、推理する事で、オレの注意を話の方に集中させて…そのあいだに自分は、あそこに倒れているコボルトを助けようと考えている…」

しかし、一気に行けない事を考えると…

。　　お前…身体のどこかをケガしてるな？」

今度は、ナインクールが…シャリムの状態を推理すると…

、
そのあと右手に、フツ…と、小さな氷の槍を出現させて

、
「ただオレが話を聞いてるだけだと思ったか？」

、
ポチの方に向けて…

肩の上で、右手に持った槍を投げようとする…槍投げの態勢に入る

…
それを見て、シャリムが走ろうとしたものの…

…
まだポチまでの距離は、5メートルくらいあり…それに

…
(うつ…)

動くたびに…右足に激痛が走り…思うように身体が動かない…
しかし…ナインクルが右手に持った氷の槍を

、
「そこで見届けるがいい！コボルトの死に様を！」

、
洞窟の壁に、もたれかかったポチを狙って、ブン！…と、投げた時

…
ポチを助けようとする想いに、つき動かされて…シャリムは

、
(ポチさん！)

、
まだ残っていた…素早さを上げる魔法の力を借りて、槍よりも速く動いていた

。.
一方…その10秒以上前に

…
壁に背中をつけたまま…目を閉じていたポチは、
そのまま、やられたふりをしようと…

両足をダラインと伸ばしていたが…

シャリムの推理が終わって…周囲が慌^{あわ}ただしくなってきたようなので

…
両目を開くと…

なんと！ナインクールが、ポチを狙って…氷で出来た槍を投げよう
としているではないか！？

、
それを見て、ポチが…

。（ややややバい！このままじゃ死んじゃう！）

。あわてて、立ち上がろうとするが…

無情にも、その途中で

、
「そこで見届けるがいい！コボルトの死に様を！」

。ナインクールの投げた氷の槍が…

早く立ち上がろうと…焦^{あせ}ったせいで…

かえって立ち上がれなくなった…ポチの胸を貫^{つらぬ}こうと…せまってきた…

終わりを覚悟したポチは、強く目を閉じた

…
だが次の瞬間！

…
氷で出来た槍はポチに届^{とど}かず…

…
変わりに…ポチの顔や茶色の衣服に、ぴぴっ…と血がかかる

…
一体？自分が目を閉じてるあいだに何があったのか…確認しようとして

…ポチが目を開くと

…
「シャリム！？」

、
そこには…氷の槍に、
お腹に貫かれた…小さな少女の背中があつた…

《第5戦へ続く…》

第5戦へその光は、頭の中の幻覚さえも破壊する

お腹を氷で出来た槍に貫かれたシャリムは、ポチの方を振り向き

「大…丈夫ですか…ポチさん…」

…そう話す途中で…

お腹に刺さった氷の槍が…役目を終えたら、一気に溶けて、ただの水となり…

血と一緒に流れ落ちるのを感じると

…そんなシャリムのうしろ姿を見ながら…ポチは、立ち上がって

「ただ大丈夫じゃないだろ！お前が！」

。 どうしよう！どうしよう！と混乱しているうちに、頭の中に…シャルムから

… 【ポチ！早くシャリムを連れて！ここから離れるんだ！】

… そのための方法を伝えられて…

、 それを察したように…ナインクールが

。 「逃がすと思うか…」

突き出した右手の手の平を、ポチに向けると

… そのナインクールを狙^{ねら}って、9メートル離れた場所から…右手を突き出していたシャルムが

「そうは、させない！」

叫んだ途端に

…
ナインクルの足元に光の円が出現して

…
「何!？」

そこから出た白い煙けむりのようなものがナインクルを囲みこむ

…
そして、それが白い雲の弾幕だと知った…ナインクルは、右手を下ろして

、
(なるほどな…

オレと子娘こむすめが話しているあいだに…雲の弾幕を出すための魔力を集中させていたか…

別の手を考えていたのは、オレだけじゃなかった訳だ…)

。そこまで考えると

…
「だが！」

…その言葉と共に、
ナインクルが左肩の方に近づけた右手を、バツと、右横の方に伸ばすと…

その右手を払った時に生じた突風しゅふうが、周りの雲を吹き飛ばしてくれたおかげで…

全身を包み込む程の青いオーラの光を放つ…シャルムの姿が、はっきりと見えるようになったので

…
ナインクルは、突き出した右手の手の平を、シャルムの方に向けて

…
「足止め程度にも、ならなかったな…」

…そう言って、

右の手の平から、光弾を発射するが…

その光弾は、スカツ…と、シャルムの胸をすり抜けて…そのシャルムが幻の用に消え去ると

…

今度は、そこから右に1メートルくらい離れたところに…またシャルムが現れたので…

そこからナインクールは

、

「ビジョンか…」

。

また突き出した右の手の平から…光弾を発射するが

…

またシャルムの胸を光弾がすり抜けて…

そのシャルムの幻が消えると…

その幻が消えたところの、1メートルくらい前に…

1人、2人、3人と…3人のシャルムの姿が現れたので

…

横に3人並んだ…シャルムの分身の術を見せられたナインクールは

、

（そういえば幻影が…その姿が幻にもかかわらず…

身体から、なぜか？オーラの光を発していたな…）

。

いくらなんでも変だ…と思ったので、

ふと…ポチやシャリムのいた場所に目をやると…予想通り

…

（逃げたか…）

。

ポチとシャリムの姿は、なかったが

…
（おかしい…

あれほどの傷で先に進んだのなら…しばらくは、地面に血の跡あとが残るはずだが…）

、
血の跡が残ってない事で…ナインクールは、ハッ…と、ある事に気づき

…
（そうか…そういう事か）

…
「なるほど…さっきの雲の弾幕は、今オレのしている世界が幻だと気づかせないようにするためだったとは…
いい仕事をするじゃないか…少年」

。
実は、先ほどの周りを囲んだ白い雲は…

その時に、幻覚を見せる魔法を使ったのを…気づかせないようにするのためのものだ…と、

幻の世界の外側にいる…シャルムに向かって話しかけたナインクールは

、
右手の人差し指と中指を立てて…

その立てた2本の指先で、ササッ…と自分の前に、五芒星を、一瞬で描いてから…

続けて…右側、後ろ、左側…と、時計まわりに五芒星を描くと…

ナインクールが正面に戻った時に…前、右、後ろ、左…と、

ナインクルの周りを囲むように現れた…4つの大きな五芒星が燃え上がり

…
ナインクールが、ハッ…と天井に向かって上げた右手の手の平の、3メートルくらい上の方では、光り輝く大きな六芒星が回転し…

右手を、上の方に伸ばしたナインクールが

「我が前にラファエル、我が後ろにガブリエル、我が右手にミカエル、我が左手にウリエル。我が周りに五芒星は燃え、我が頭上に六の星が輝く…」

。ホーリーライトの詠唱を終えると…

前、後ろ、右、左…と、ナインクールの周りを囲む、4つの五芒星のところに…それぞれ天使が現れ

…「降り注げ！フォオリイルアイツ！」

。その言葉と共に…頭上に光り輝く六芒星が止まり…

その止まった六芒星から、カツ…と、光が発射されるが…

その光は、だんだん細くなって…とうとう円錐の形となった、その光は…

ナインクールの上に伸ばした右の手の平に吸収されていき…

右手に吸収されたせいで…ナインクールの身体中が、破魔の光のエネルギーで満ちあふれ

…全身を包み込む…青白い破魔の光が、少しずつ広がる中で…

両足の間を開いたナインクールが、両腕を胸の前で交差させてから

…「見る者すべてを焼き尽くす神の光よ…

。聖なる光を贄に巻き起これ！」

。そう言つて、集中させた魔力を…

バツ…と、交差させた両手を、力一杯横に広げて

、「フォオリイルアイツエクスブルオオジョーン！」

。その力強い言葉で…大の字になった全身と共に、魔力を解放した時…その解放した魔力を起爆剤にした光の爆発を巻き起こし

…カッ！…と、その眩しい光の爆発と共に…シャルムの作り出した幻想の世界を吹き飛ばしてしまう…

そして幻想の世界を、ぶち壊した…その光の爆発は、現実の世界でも…天井に、その光がとどくほどの爆発を起こし…

その現実世界での光の爆発は、8メートル離れた場所にいるシャルムでさえ

…「うわあああっ！」

、3メートル後方まで吹き飛ばしてしまった。

…そして、吹き飛ばされたせいで…仰向けに倒れたシャルムが

（バ…バカな…ホーリーライトを右手に吸収してその吸収したエネルギーで、光の爆発を起こすなんて…）

。ナインクールを幻の世界に閉じ込めていた時に…頭の中で見ていた映像を思い出しながら…

身体を起こして、立ち上がった瞬間に…

…11メートル先のナインクールのいた場所から…光弾が飛んできて

飛んできた光弾が、とつさの事で…防ぐ暇がなかったシャルムの胸部に直撃すると…

シャルムは、
「がっ…」

。 焼けるような熱さを胸の方に感じながら… 仰向けに倒れるが

… (まだだ… まだ倒れる訳には、いけない…)

。 身体をブルブル震わせながらも… 氣力を振り絞^{しほ}って、立ち上がるシャルムの胸部に、

無情にも… ナインクールの放った光弾が、また直撃して…

。 仰向けに倒れたシャルムが、もう立ち上がる事は、なかった…

。 そうして、動かなくなったシャルムのところに…

10メートル… 9メートルと… 近づいて来たナインクールが…

シャルムの倒れた場所のすぐ近くまで行くと

…

「よく頑張ったな…

。 褒^ほ美^びにとどめを刺してやろう…」

右の手の平を、シャルムに向けるが…

その時…

「むっ…」

何者かの氣配を感じたナインクールは、

シャルムに向けた右手を下ろして

…

「誰だ…」

シャルム達が来た場所から、やって来る… 何者かに声をかけると… その何者かの影は、だんだん大きくなり

…

。 「子供を痛めつける、お前を見過^{みす}ごせなくなっただんだチュウ…」

その大きな影は、やがて… 後ろの2本足だけで歩く鼠^{ねずみ}の姿に変わっ

ていく…

。そして… ナインクールは、9メートル… 8メートルと、自分の方に近づいて来る… 灰色の鼠に、

「ベンチュウか… 何しに来た？」

。ここに來た理由を問うと

…
ベンチュウが前足を使わずに、立って歩きながら

…
「もちろん、お前を止めに來たんだチュウ…」

。そう言つて、ナインクールに近づいて来るので…

それを聞いて… ナインクールは、

「オレを止めに？」

、
身体の周りから… まがまがしい赤い光のオーラを発光させて、その

あと…

「ほう…

…
面白い冗談だ…」

。そう言つて、不敵な笑みを浮かべるのだつた…

《つづく…》

第27話《三者三様》

まがまがしいほどの赤いオーラを纏^{まと}った… ナインクールが

、
「覚悟はいいな… ベンチュウ…」

。仰向けに倒れているシャルムの後ろで、待ち受けていると

…
そこから6メートル離れた場所で…

後ろの2本足だけで立っていたベンチュウが

、
「魔法を使う暇は、与えないチュウ」

！
鼠の本来のスタイルである… 4つ足となって、特攻をかける

！
そこで、ナインクールは、うしろに、1回2回3回… と、バックス

テップして、距離をとりながら… 右の手の平を、

突進するベンチュウの頭部に向けて、光弾を放つが

…
頭部に直撃しても、ベンチュウの突進は止まらず…

ナインクールとの距離も、縮^{ちぢ}んでいくばかりだが…

（だが光弾が直撃した時… ベンチュウの勢いが確実に鈍^{にぶ}った…）

。あと一発で確実に倒せる… と、ナインクールが考えていると…

「何!？」

、
さつきナインクールがいた場所で、ベンチュウが急に足を止めて…
そこで仰向けに倒れているシャルムの黒いローブを、口に加えると…
それを着ているシャルムごと天井へと放り投げる

。そして、宙に浮かんでいるあいだに…シャルムの身体が反転して、仰向けから…うつ伏せ^ぶの状態に変わると

…
その下で待っていたベンチユウが、

その状態のまま…空から落ちてくる、シャルムの身体を…背中受
け止めてから…

そのまま逆走して、ナインクールから逃げ出したので…

ナインクールにとって、予想外の展開となったが…

（まあいい…

どのみち奴は、もう長くはない…

それより今は…）

。反対側の方に身体をむけて…コボルトや少女がいた場所に目をやる
と…

そこには…壁に背中が寄りかかったままのポチの姿と…

その前で、うつ伏せて倒れているシャリムの姿があったが…

ナインクールが、その周辺の地面の方に目をやると…かすかだが…

奥の方まで、ポタリポタリと続く血の跡があった…

。（なるほど…幻影の世界では、すでに先に行っているように見せか
けたせいで…現実世界に戻って、その姿があると…

つい…そこにいるものだと思ってしまう…。

。周りが暗い事も手伝って、確認する事も…おろそかになるからな…。
うまく人の心理を利用したものだ…）

。少女は、おそらく…ここに来る前に、作戦をたてていたのだろう…

。（そして、おそらく…オレと会話しているあいだも…あの少女は魔法を使つて、少年の頭の中に指示を送っていた…）

。 それほどの少女だから…長く放っておけば…厄^{やっかい}介な存在になると、
ナインクールは、

。 （しかし…あのダメージなら…いくらあの少女でも、回復するまでに時間がかかるはずだ…）

だから…シャルムが回復しないうちに叩くために…

。 シャリムとポチの後を追って…洞窟の奥へと進むのだった…

一方…ナインクールが行く方向から…逆の方向へ走っていたベンチ
ユウは、

。 （やつぱり…ただでは、すまなかったチュウ…）

。 首の右側に、氷の矢が刺さって…そこから血が流れていくせいで…
身体中から力が抜けていくのを感じていた…

。 （あの時かチュウ…）

。 そう…ベンチユウがシャルムのローブを、口に加えて、宙に放り投
げた時に…

。 ナインクールが氷の矢を放って…それがベンチユウの首に刺さった
のだった…

。 （だけど…休んでいる暇はないチュウ…

。 なんとか…この少年だけでも助けないと…）

。 ナインクールが自分達を追って来ない事など…

。 必死に逃げているベンチユウには、知る由^{よし}もなかった…

。

だが氷の矢で、首から流れ出る血が…無情にも、シャルムを乗せて走るベンチュウから、体力を奪っていく…

（わずかな距離しか走ってないのに…長い時間を走っているようだ
チュウ…）

。

だから、せめて…もう少しだけでも走りたかった…
多くの仲間達が待つ…あの場所へ…

。

そして…周囲の壁の色が、銅で出来たような金属の色から…
土や石ばかりある…洞窟の色に戻った時

…

首に刺さっていた氷の矢が溶けたせいで…大量の血液を失っていた

…ベンチュウは、

シャルムも背中に乗せている事もあり…

もはや走る体力もなくなり…歩くようになると…

重くなった4つの足取りで、一步…二歩…三歩…と、必死に歩いて…
…少し進んだところで

…

「…チュウ…」

。

ドスン…と、力尽きたように…横に倒れた…

。

（…あとは…一人で…頑張るチュウ…よ…）

。

横になった自分の背中の方で…仰向けになっているシャルムに…
頭の中で話しかけるベンチュウ…

…

せめて、多くの仲間達が逝く…この場所で眠る事が…救いだろうか…

。 ……
一方…その話しかけられた、シャルムの意識の中では異変が起こっていた…

…
【…目覚めよ…】

…誰かの声が聞こえる…

。 それは、意識の中でシャルムが

…
「だから！誰なんだ君は！」

苛^{いらだ}立ったとしても…

。 【…目覚めよ…】

、 そう告げるばかりで…何も変わらなかったが…シャルムが

。 （待てよ…）

。 【彼】について考えた時…異変が起こった…

シャルムが【彼】について思い出そうとすると…

。 驚くべき事に、確かに【彼】の記憶がシャルムには、あった…

いや…正しくは【彼】の記憶の中にこそ…

、 本当のシャルムがいた…というべきか…

（…そうか…僕…いや私は…）

そして【彼】は、すべてを思い出した

…

・ ・ ・ ・ ・

目を覚さますと…

。 側そばに、大きな鼠の死体があつた…

立ち上がつて、横たわつた鼠の身体を、右手で触れると…

まだかすかに、暖かみが残っている…

。 どうやら死んでから… そんなに時間がたつてないらしい…

この姿には、見覚えがある…

シャルムが魔法禁止区域となつた場所を元に戻す時… 力を貸してくれた大きな鼠だ…

。 「ありがとう…

ナインクールは、私が倒す。

。 だから今は、安らかに眠れ…」

ここまで自分を運んでくれた鼠に礼を言つて、

【彼】は、ナインクールのいる洞窟の奥を目指す…

。 その先に待つ… 宿命の戦いに決着をつけるために…

《28話へ続く…》

第28話へ始まりの物語

ナインクルの魔法に…お腹を貫かれたシャリムが、その傷を塞ぐ
ために…

目を閉じて、自然回復に専念せんねんしていると…

「ハッ…」

目を開けた時…ポチが自分を背負って、歩いていたので

…

【ポチ！早くシャリムを連れて！ここから離れるんだ！】

…

…
そういえばあの時、シャルムに…

自分をおんぶするように伝えられたポチが…

暗闇の中で、ずっと自分をおんぶして歩いていてくれた事に気づく…

。

すると、背負っていたポチは、シャリムが目覚めた事に気づいて

…

「気がついたか…」

。

優しく声をかけるが…なぜか？返事が变えつて来ないので…ポチは

、

（疲れているのかな…）

。

だけど…なぜか？小声で何か言ってるシャリムを放っておいて…その
まま歩くと…

その少しあとに…シャリムから

…
「ごめんなさい…ポチさん…さっきは、思考速度を速めるための魔法を使っていたので…答えられなかったんです」

。そう言ってきたので…ポチは

、
「思考速度を速める魔法？」

…それが何なのか？聞いてみると…シャリムは

、
「この魔法を使うと…集中や詠唱といった魔法を使うために必要なものを、
いろいろ短縮できるんです。」

…つまり頭の中《脳》の機能を高める魔法らしい

…それを聞いたポチが、
なぜ？そんなものを…と聞こうとした時に…シャリムから

…「おそらく…シャルムでは、ナインクールさんを
そんなに足止め出来ないでしょう…」

。だから…いつでも不足の事態に備え^{そな}えられるように…早めに手を打っておきたいんです…と言われたので…ポチも

…「そ…そうか…悪かったな、邪魔して」

。そう言っ、会話を終わらせようとしたのだが…シャリムが

、
「いいえ…せっかくの機会ですし…お話ししましょ。ポチさん」

…
そう言うので…ポチは

、
「で…でも…お前…お腹の傷が…」

。そもそも無事か…どうか…確認したかっただけなので…

長話は、身体に響くんじゃないか…と思ったのだが…シャリムから…

「平気です。」

。自然治癒は、会話しながらでも出来ますから…」

。そう言われたので、ポチも…

「わかった。」

シャリムがそこまで言うなら…話そう。」

…その話に乗って、

ポチの返事を聞いて…

「やった。」

…と喜ぶ、シャリムと話す事になった

………

まず質問したのは、シャリムだった

…

「ポチさんは、もしここを無事に脱出できたら…故郷へ帰るんですか？」

。

それは、ポチの心を…少しでも明るくしようという…シャリムの思いやりだったのだが…

ポチの答えは、意外にも

…

「いや…帰れない…」

家族に、少しでも裕福な生活をさせてやりたくて…都会に来たのに…お金を稼げないどころか…こんなコボルトの姿になって…

。 恥ずかしくて…家族にも、村のみんなにも…会わせる顔がないよ…」

後悔の言葉ばかりで…そのあと

…

。 「本当…これから、どう生きていけばいいんだろうな…」

迷っている事を、口にしていたので…シャリムは

、

「じゃ…じゃあ

わたしのために生きてください。」

…そう言つて…それを聞いて、

「はっ？」

足を止めて、振り向くポチに

…

「その変わり…わたしが、ポチさんがいつか村に帰った時…胸をはれるような…立派な男の人になれるように…支えますから…

…ダメですか？」

。

そこまで言つので…ポチは、顔を前に戻して、歩きながら

…

「いや…だ…駄目じゃないけど…」

…そう答えると…

今度はポチが、シャリムに聞く番だった…

。

「な…なあ、お前…どうして…俺に、そこまでしてくれるんだ…」

。

今ふり返れば…シャリムは、最初からポチに親切だった…。

しかも…何となくだが…ポチの事を知っていたような…素振りを見せる事があった…

。

だからだろうか…ポチの背中で、シャリムは、洞窟の天井を見上げて

…
「昔…罪を犯した精霊がいました…」

。はるか昔の物語を語り始めた…

「その精霊は、ここより…ずっと深い地の底に…閉じ込められていて…

顔以外の身体は、すべて氷に覆われていたので…身動きすらできなかったんです…。

でもある日…そこに、一人の人が、精霊の前に現れました。

そして…精霊の前に現れた人は…ずっと閉じ込められた精霊を可哀想に思っ、百以上もの物語を精霊に話してくれました。

だけど…111番目の物語を語ってくれた時…

何も食べていなかった…その人は、風邪をこじらせて倒れ…

その風邪の悪化が元で、死んでしまいました…。

そして…その死を看取った精霊は、思いました…。

きっと…この人は、いつか生まれ変わる…。

だから…自分の罪が許されて…この身体が自由に動けるようになって…

この人に会いに行こう…

そしてもし…その人が困っているようだったら…今度は、自分が助けてやるう…と…」

そして…その人間は、ポチの故郷の番犬族の村の人だった…と、話すシャリムにポチは

、
「もしかして…その精霊がお前で…人間が俺って、話じゃないだろうな…」

話を聞いてから…ずっと気になっていた事を聞くと…シャリムは、ポチの左肩に、自分の左の頬ほおをすりつけて

…
「さあ…どうでしょう？」

。 どう見ても…わたしは、人間の女の子ですよ。ポチさん…」

。 そう言うので…ポチは

、
「まあ、そりゃそうだが…」

。 でも…うまくごまかされたなあ…と思ったが

…
（でも、こんな軽い身体で、よく頑張ってくれてるよ…ホント）

。 そう思ったポチが…

「シャルム…大丈夫だよな…」

。 そつ…シャリムに声をかけて、それに対してシャリムが

、
「いざとなれば逃げるように…念話で話してありますし…大丈夫です」

。 ポチを安心させようと…声をかけた時…そのシャリムの緑の目に

…
「あれは…」

。 なんと洞窟の通路の奥から…かすかな光が見えるではないか！

、 そんな、背中のシャリムの変化を感じて…ポチが

、
「どうした？」

…と声をかけると…シャリムが

「奥の方から、明かりが…」

。そう言うので…ポチが、

「急ごう」

そう言っで、足を速めると…シャリムから

…

「大丈夫ですか？疲れていませんか？」

、小鳥のような可愛い声で、体調を気づかわれたので…ポチは

「心配するな。」

俺は、負け犬と呼ばれるほど…部族の中でも逃げ足に定評のあった男だぜ。

、ナインクールからだって、お前を背負って逃げてやるさ…」

犬のような口から見える犬歯を…どこかのマンガのように、輝かせると…

背中から…シャリムが、

（ど…どうしよう…）

すぐ格好かっこういい風に言ってるけど…

。言ってる内容が、ものすごく変…）

まるでどこかの親父ギャグを聞いた時のような…寒さを感じるのだった…

。はたして…そんなシャリムとポチが明かりの奥で見たものとは…

《30話へ続く…》

第29話へたどり着いた場所…

周囲が、銅のようなもので出来た…トンネルみたいな洞窟を進んだ
ポチが…

シャリムを背負って、明かりのある場所まで進むと

…
その先には…ちょうど人が入れるくらいの、入り口があり…
さらにその先には

…
パンテオンⅡ移転装置

ポチ

「こ…これは…」

。天井までの高さは、10メートル以上…

周囲は、30メートル平方にも及ぶ、広い場所となっていて

…
入り口の10メートルくらい先には、20メートル近くはあろうか

…円の形をした巨大な穴がある…

…どうやら…光は、この穴の底の方から出ているらしい…

。そしてポチに、おんぶされたシャリムが周りを見渡すと…

銅のような金属で出来た壁の中に…機械のようなものがはめこまれている場所が多い事に気づく

…
そこから考えると…

…どうやらここは、ドーム状の建物になっているらしい…

…だから…シャリムが

、
（まさか…こんな地下深くに、こんな場所が建てられていたなんて

…）

もしかしたら…ここに来た人が、この建物に驚いて、他の世界に行けるなんて…都市伝説が生まれたのかもしれない…と考えているあいだに…

ポチが、その中心の穴の方に向かって、歩いて行って…その穴の下が見える所まで近づくと

…
底の方で、シャルム達が…ファイヤーボール等の魔法を使う時に現れる光が、液体となって…

マグマのように、グツグツ…と沸き立っていたので

…
（この狭い池^{せま}みたいなところから…光が出ていたのか…）

この周辺が明るかった秘密を知ると同時に…

足元の近くに、この穴の上を渡るための足場のようなものがある事にも気づき

…
ポチに、おんぶされていたシャリムも…

鉄で出来た…その足場の先に、金色の六芒星^{えが}が描かれた場所があり

…
その場所を支えるように…反対側や右斜め前、左斜め前から伸びている…その橋のような足場が、十字に架^かけられている事に気づく

…
そして、四方から伸びている橋のような足場に支えられた…その中心の場所の上の方を見ると…

天井に、巨大なビームライフルの先端のようなものがあるのも確認できて…

その大きな発射口を見たシャリムは、
その発射口の真下にある…六芒星のあるところに描かれている魔法

文字が、変換式のものである事から…

ライトボーンに、ホーリーライトの魔法を使った時の事を思い出し

…

（なるほど…あそこから、真下にある六芒星に向かって、何らかの力が放たれて…

的となった六芒星が、放たれたその力を利用する事で…別の力が作動する仕組みになっているのか…）

。

だからシャリムが、両目を紫色に変えて…この場所について調べていると…

そのシャリムを背負ったポチから

…

「なんか、変なニオイがするし…かすかに音が聞こえたりしてるけど…

どんな場所なんだろうな…ここ…」

。

視界が、白黒でしか映らないし…ぼやけて見えるので…

人間だった時に見たかったな…と、残念そうにつぶやくと…

それがシャリムの耳に入って

…

（お腹のところの血も固まってきたし…）

そろそろ良いかと思った、シャリムは

…

「ポチさん…もう大丈夫ですよ。」

…ポチに声をかけて

、

「そうか…無理するなよ…」

心配そうに答える…ポチの背中から

…

「はい。」

…と返事をしながら…降りたあと…
ポチの背中に、左の手の平を当てて

…
「ポチさん。入り口の方に身体を向けて、目を閉じてもらえませんか？」

…
「そうお願いしてきたので…ポチが、
「わかった…」

。穴の見える場所から…入り口の方に、身体の向きを変えたあと…
シャリムに言われた通りに…目を閉じると…

そのポチの背中に、シャリムの左手が当てられた時に…
（何！？）

、
なんと！頭の中に…見知らぬ景色が浮かんでくるではないか…

。しかも…たまに視点が、ところどころ変わっている所を見ると…
これは、誰かの見ている景色のようだ…

その事から…ポチは、自分の背中の下の方に、左手を当ててるシャリムに

…
「…これって…もしかして…」

聞こうと思った事を、言い終わる前にシャリムから

…
「はい。サーチの魔法を使っている時のわたしの視界です」
…そう聞かされたので、そのままシャリムと

…
ポチ

。 「なんか…景色と一緒に、光る文字が映っているんだけど…」

シャリム

「ああ…それは、サーチの魔法で、この建物についての情報を引き出しているんです」

ポチ

「まわりの方に見えるあれは、何なんだ？」

シャリム

「あれは、ランプというものです…」

この建物の装置が稼動すれば、点灯とかしたりするのでしょうか…」

ポチ

「じゃあ、あれは？」

シャリム

「あれは…ここにあるエネルギーを計測するための目盛りです。

これもランプと似たようなもので…」

このエネルギーが、貯まれば貯まるほど…光のゲージが上がっていく仕組みになっているようですね…」

0から100パーセントまであります…」

ポチ

「四方に、1つずつ突き出ている…あの細長いものは？」

シャリム

「あれは、避雷針？…いや違うか…」

どうやら雷を吸収するためのもののようですね…」

そこから考えると…ここを稼働させるには、電気とかが必要になってくるのかな？」

ポチ

「うわっ！なんか見ている景色が…光の文字で、いっぱいになってきたんだけど…」

シャリム

「ごめんなさい。ごめんなさい。ここの建物の情報が、いろいろ複雑だから…」

頭の中の処理が追いついていないんですよ」

ポチ

「なんか…さつきから、景色の中の文章の入れ替えが激しいな…」

シャリム

「さつきの魔法で、頭の中の情報処理を倍速にしているから…そうなっているでしょう…」

ポチ

「うおふ…うおふ…」

シャリム

「こ…今度は、なんですか？ポチさん…」

ポチ

「いや…考えてみれば、これって…」

俺の背中に、手を当てながら…キョロキョロしてるって事だよな。なんか想像するとシュールな光景だな…と思って」

…

シャリム

「も…もあ…失礼ですよ！ポチさん！」

そんなやり取りをして…そのあとのポチの…

「なあ…

なんか俺の頭の中に星の船の中みたいだ…って、情報が入って来てるんだけど…」

その質問に…

「い…いえ…つまりそれは、オーバーツ…この時代にしては、偉く先進的なものだな…と思って…」

。 答えるのに困ったのか…

シャリムにしては、えらく齒切れの悪い口調で答えた時…

ポチの耳が、

「ん？」

ぴくぴくつと…まるで犬のように小刻みに揺れて

… 「向こうの方から、誰かの足音が聞こえてくる…」

。 そう言つて、さっき自分達が入って来た…この建物の入り口の方へ意識を向けたので

… その先にある…何者かの気配を感じとった、シャリムも…

頭の中を…建物の情報から…その何者かを調べる情報に切り替えると

… （「…これは…」）

。 その大きな気配を持つ者が誰なのかを知り…
せまりくる脅威^{きょうい}に身体を震わせるのだった…

《31話へ続く…》

第30話〈魔術師の目に映るもの〉

《30話の続き…》

…
背中に当てた左手から…シャリムが少し震えているのを感じとった
ポチは

、
「ん？どうした？シャリム…」

。
声をかけたシャリムから

…
「どうやら…ポチさんの聞いた足音は、ナインクールさんのものの
ようです」

…
その事を聞いたポチは、最悪の状況になった事を知って

…
「な…なななナインクールだつて！」

大ピンチじゃないですかーと…
閉じていた目を開きそうになったところに、シャリムから

…
「落ち着いてください、ポチさん。
まだ手はあります…」

。
そう言われて、

「本当か？」

…
と聞き返すポチに、シャリムは

、
「はい。だからそのまま目を閉じて…心に映る目で、わたしのやる
事を見守っていてください…」

。そう言って、落ち着かせて…それを聞いて

、
「わかった。」

ポチが頭の中に浮かぶ映像を見ている中で…

シャリムが、魔法をかけるための意識を集中させると…

ポチ達のいるところから…入り口の近くに向かって、たくさんの光の文字が流れていき…

流れていった、たくさんの光の文字が…やがて3メートルくらいの円周を形作っていく

…
そして円周状に並び、その多くの光の文字がある所に…

さらにシャリムの方から流れてくる…たくさんの光の文字が加わる事で、

その場所にある…多くの光の文字で出来た円周が、2段3段と積み重なり

…
そこからさらに…その文字だらけの円周が積み重なっていくところを…

、
頭の中に浮かぶ映像で見ていたポチは

、
（まるで文章で出来た塔だ…）

。これが魔法をかける時に、シャリムが見ている世界か…と、驚いていた…

だが、のんびりしている暇はない…

とうとう、多くの光の文字で出来た円周を完成させたシャリムは、
どんどん近づいてくる…ナインクルの気配を感じとって…

その左手で、ポチの右手を握ると

…
「行きますよ！！ポチさん！」

。 近くにある、橋のような足場までに走って…
それに驚いて、目を開いたポチが

、
「お…おい？」

行くつて、どこへ？と…聞こうとする中…

その手を繋いだポチを、引っ張って走った…シャリムは

、
「あの魔法陣がある中心部まで行きます！」

。 橋のような足場を利用して…魔法陣のある場所まで、一気に進むと…
そこで、入り口がある方に身体を向けてから…ポチにまず

…
「わたしの後ろに下がってください。」

…そう言つて、

それを聞いたポチが…

「うおふ。」

じゃあ俺は、うしろの方で、応援してるからな」

。 そう答えてから…シャリムのうしろに下がると…

シャリムは、

「ありがとうございます。じゃあ頑張っちゃいますね…」

。 じゃんけんのチョキのように…右手の人差し指と中指を立てて、
その2本の指先を、額の前に近づけながら…集中していると…

なんか、うしろの方で立っていたポチが暇そうだったので…シャリムは

「ポチさん。目を閉じて、わたしの肩に手を置いて下さい…」

ポチに声をかけて、それでポチが言われた通り…目を閉じながら…前にいるシャリムの右肩に、右手を置くと

「うおっ！なんか俺達のまわりにも、たくさんの光の文字が…」

ポチの言う通り…シャリムが、入り口の近くに作った文字だけで出来た円柱が…ポチとシャリムのまわりにも作られていき…しかも

ポチ

「円柱の周りに、もう一つの円柱が…」

ポチの言葉通り…それは…ポチとシャリムのまわりに作られていく…文字だらけの円柱の周りに…

さらに、円周に並ぶ文字が積み重なっていく…

その文字だけで作られていく…二重構造の円柱を、まるで立体映像のように…頭の中で見せられたポチは、この事について

「こんなに結界みたいなものを作って…

いったい何をする気なんだ？」

前にいるシャリムに聞くと…シャリムは

「外側にあるものは…

ポチさんの言う通り…防御するための結界みたいなものですが…

内側にあるものについては…隠し玉に係る事なので、今は…話す事は出来ません」

そう話して…そのあとポチが…
「隠し玉？」

、
重要そうなキーワードを繰^くり返すと…シャリムは、二重構造になっている2つの円柱を作りながら

…
「そうです…」

その秘密をナインクールが知ったら…すべてが終わります。
だから…今は話す事ができないんです」

°
敵を騙^{だま}すには、まず味方からという、ことわざがあるように…
より安全にシャリムの計画を実行するため…今、ポチには話せないのだと言う

…
その事から…ポチは、
（俺から秘密が漏^もれるのを防ぐためか…）

°
それだけシャリムが必死になっている事を知って、目を開くと…
「わかった。」

°
俺も、それ以上は何も聞かない…」

°
何しろ相手は、あのナインクール…何があるのか分からないので…
ポチは

、
「フレイフレイ！シャ・リ・ム！頑張れ頑張れ！シャ・リ・ム」

°
ナインクールの方まで声が届かないように…少し控^{ひか}え目に、シャリムを応援すると…

それを聞いたシャリムも

…

「あ…ありがとうございます」

。 頬を染めながら…二重構造の円柱を完成させて

、
（そう…頭の中の情報処理を倍速にしたのは、魔法を短い時間で完成させるためでもあるんだ…）

。 だから…と、わずかな時間を利用して…隠し玉の準備に入るのだった…

そして…

その11秒後に…この建物の入り口に入ったナインクールが、入り口を通りすぎた時…

額の近くに、右手の2本指を立てたシャリムが、すかさず

…
「えいつ！」

。 烈破の気合いを入れると…さっきシャリムが仕掛けた魔術文字のトラップが発動して…

目に見えない円柱の中に入った、ナインクールの身体に

…
「何！」

ドシン！と…ものすごい重力がかかる…

その音を、離れていたところから聞いてたポチが

、
「出オチか！」

…と叫び声をあげると…

その前で集中していたシャリムは、それを聞いて思わず

…

「もお…先制攻撃と言ってください！」

ポチに答える緊張感のない中で…戦いの火ぶたは、切って落とされた…

。

《つつく…》

第6戦へシャリムの賭け

ナインクールは、移転装置のある建物の中で…

シャリムが何らかの仕掛けをしている事を予想して、どんな魔法にも対応できるように…

自分の中に眠る魔力を最大限に高めていた…

だから、シャリムが入り口の近くに仕掛けた…見えない円柱の中で…

「何!？」

…
何倍もの重力がかかる魔法に、身体が押し潰^{つぶ}されそうになっても…

(ククク…

用心深い娘の事だ…これくらいの畏^{おそ}は、仕掛けてある事は読んでいた…)

腰まで届きそうな長い黒髪をしたナインクールが

「はっ!」

烈破の気合いを入れると…ナインクールのまわりからポチを吹き飛ばした風が吹いて、

ナインクールの身体にかかっている…魔法の重力を吹き飛ばしてしまった

。そうして、魔法を吹き飛ばしたナインクールは…この建物の中心部にいるシャリム達の方へ目を向けて

…
(なるほど…反撃を受ける 事を考えて距離をとったか…

確かにあそこなら…中距離から長距離の魔法じゃないと届かないかな…)

。それでも試^{ため}しに、シャリム達の方に右手を突き出して…広げた右の手の平の前から光弾を放つと

…その光弾は…シャリムの前で、ガキーン！という金属の音と一緒に弾^{はじ}かれて…

それでナインクールが

（まさか…）

、
気にしているところを読み取ったかのように…離れた場所からシャリムが

…「あなたの考えてる通り…この魔法陣の上に立つと…見えない金属が出てきて、魔法陣の中にいる人を守る仕組みになっているんです。

…
…そう話すので…ナインクールは

、
（それは、厄^{やっかい}介だな…）

。考えていたが、そのあと…シャリムの足元を見て…

（待てよ…

あつたじゃないか…金属系のもものでは、防ぐ事が出来ない強力な魔法が…）

。そこから、何か思いついたのか…

両腕を横に広げてから、両の手の平を開くと

…
…右の手の平のところから、球のような形をした雷^{いかずち}を…
…左の手の平のところから、青白い光を出現させて

…
「我が右手に雷を、我が左手に波動の光を、そこから生じる波動の雷は…」

。すべてを貫く新たな魔法となる…」

…
シャリムの方に向かって両手を突き出して…

その両手の手の平の前にある…雷と青白い光を重ね合わせると

…
「紫電雷光波!!」

その叫び声と共に…魔力がつづく限り放射し続ける事ができる青い稲妻を放つ

!

だがその魔法は…シャリムにとって

…

(よし!うまく引つかかってくれた)

…事を意味していた。

…

なぜなら…見えない金属の壁があると言うのは、

この状況を作り出すためにシャリムがついた嘘にすぎず…

本当は、1つ目の円柱の周りに築いた…もう一つの円柱が、ナインクールの光弾を防いだ時

…

…

ガキイン!という金属の音が出るように細工した、シャリムは

…

(あと2、3発光弾をもらえば…この円柱の結界は、間違いなく崩れる…だからその前に…)

。

「あなたの思ってる通り…この魔法陣の上に立つと…見えない金属

が出てきて、魔法陣の上に立つ人を守る仕組みになっているんです。

「

…

そう言つて、ナインクールが雷系の魔法を放つように誘導していたのだった…

。

……

だから雷と混ざった波動の光が青い稲妻となつて、円柱の外側に作つたもう1つの円柱を貫いて…シャリムの方へ迫ろうとした時…

その状況を予想していたシャリムは、その直前に、手の平を広げた両手を前に突き出して

、

（準備は整つた！ここで隠し玉を発生させる！）

、

そう考えたシャリムは、それから…

「えい！」

気合いを入れると…まるで魔法を放つ前に出現する光のように…

シャリムの突き出した両手の前に、1メートルくらいの虹色球体がまぶしい光と共に現れて

…

光線となつて…見えない円柱を突き破^{やぶ}つてきた青い稲妻を、ギョオオオーと、吸い込むが…

その青い稲妻の威力がすさまじいだけでなく…放射された時間が長いために…

それを魔吸いの球で吸い込んでいるシャリムの履いたサンダルが、中心部の足場の上で…

「くっ…」

ズ…ズザザ…と、うしろへ押されるように滑^{すべ}っていく

…

一方…両の手の光の前から、紫電雷光波を放ち続けていたナインクルが…それに気づいて

…
「魔吸いの玉ときたか」

…
隠し玉の存在を知っても…口元に余裕よゆうの笑みを浮かべる中…

まだ止む事のない稲妻の光線に…押され続けているシャリムは

、
（まずい…予想より魔法の力が強い…）

何とかしないと…と思っ
てい
るところで、ガシッ…と何者かが肩を掴つかむ…

それで、シャリムは、

（ポチさん…）

うしろにいるポチの方を見ようと
するが…振り向く前にポチから

…

「まだ足場は、余裕があるから気にしなくていい…」

俺がしっかり支えてるから…シャリムは、そのまま光を受け止める事に集中してろ…」

。

そう励はげまされたシャリムは…

「はい！」

突き出した両手の先にある魔吸いの球に意識を集中させる。

だがナインクルが、突き出した両手から放射し続ける青い稲妻を、受け続けていたせいで…

青い稲妻を吸収していた虹色の魔吸いの球に…ピシッと、亀裂きれつが入り…シャリムも

「くっ…」

氷の槍に貫かれた傷口が開き…

（だ…駄目！このままじゃポチさんも…）

。着ている白いローブの…お腹と背中のところ、シャリムの血で染まる…。

だが10秒以上も…光線のように突き進む青い稲妻を放射し続けていたナインクールが、

「これで終わりだあ！」

。一気に押しきろうと、叫んだ時…

突然！建物の入り口の方から飛んで来た火球が、ナインクールの後頭部に、ドン！！と当たり…

「誰だ！」

気がそらされた事で…魔法に対する集中力が、一瞬途切れてしまい…そのせいで、突き出した両手の前から出ていた…光線のような稲妻が途切れた事で…

放射されていた青い稲妻は、すべて魔吸いの球に吸収されてしまった…そしてシャリムは…その時、前に突き出していた両手を…

（今だ！）

、
「く…くあああつ…！」

…と、上の方へ伸ばすと…前にあった虹色の球体も、天井の方にある…ビームライフルの先端のようなものの近くまで浮かび上がって…そこで

…バリーイーン！！…と砕け散った事で、球の中にたまっていた魔法のエネルギーが、分散した青色の稲妻となって飛び散り

…その事でポチと…ポチから離れた場所にいたナインクールは、とっさにしゃがみこむ…。

しかし…しゃがみこんだポチの前で、平気で立っていたシャリムが

「大丈夫です。」

…と言う通り…分散した稲妻の多くは…

端にある壁の…上の方についた四方の避雷針のようなものに向かつて、それに吸収されていき…

そのためだろうか…

立ち上がったナインクルの赤い目に、周囲にあるすべてのランプが点灯し…

エネルギーを測定するためのゲージも…MAX《最大値》のところまで光っている光景が映る

…

一方、ポチも周りの壁から機械のように稼動しているような音を聞いて…立ち上がると…

視界を始め…さまざまな感覚に違和感がある事に気づいて…前にいるシャリムに、

「なんか…

まわりが、グニャッと曲がってるように感じて…気持ち悪いんだけど…」

何とかならないか…聞こうとした時に、シャリムから…

「ポチさん。

これから大きなエネルギーが光と一緒に流れてきます。

だから、わたしの肩をしっかりと掴んで、目を閉じて下さい…」

そう言われたので…ポチは、

「わかった。」

言われた通りにシャリムの肩を…うしろから両手で、しっかりと掴んで、目を閉じる

……

すると、ナインクルの赤い目に…

まるで円柱の形をした立体魔法陣のように…多くの光の文字が、シ

ヤリム達の周りを囲みこんで…

さらに、その多くの文字で出来た円柱の外側を…黒い稲妻がいくつも走っている光景が映り

…

「空間が断絶されているだと…」

。

その時、ビームライフルの先端のようなものの所にエネルギーが集まって…その発射口のところが光始めたので…

「まずい！」

、

まともにその光を見たら目が潰つぶされる…と思って、目を閉じると…次の瞬間！

…

ずごおおおん！！という…轟音ごうおんと共に、足場が地震のように揺れる…

そして、その揺れがおさまり…閉じていた目を開けると…

明かりが一切なくなつて、暗闇に包まれていたが…

少し時間が経つと…この建物の予備の電源が働いて…パッと、電気がついたように明るくなつた…

。

しかしこの時代には…まだ電気という知識がなかったため…ナインクールは

、

「な…何だ？何が起こつた？」

、

不思議に思つて、まわりを見てみると…

なんと四方から伸びていた…橋のような足場が途中から無くなつて

。いるではないか…

当然その先にいたポチ達も…中心部の足場ごといなくなつて

…

「一体なにをしたんだ？奴らは…」

考え込んでいるナインクルの耳に、うしろから

…

「ワープシューターを作動させたんだ…」

。

誰かの声が聞こえたので

「誰だ！」

身体をうしろの方へ向けると…

入り口の方から…人影が近づいて来て…

それが明らかになると…ナインクルは、

「お前は！？」

…と驚いた顔をする。

それもそのはず…近づいて来たのは、彼が倒したはずのシャルムの姿だったのだから…

。

《31話へ続く…》

第31話「何故彼らは消えたのか」

ワープを起こす少し前…シャリムのうしろに立っていたポチが、
「なんか…」

まわりが、グニャツと曲がってるように感じて…気持ち悪いんだけど…」

。そう言っている通り…

ポチやシャリムが立っている場所一帯に歪^{ゆが}みが生^{しょう}じた事で…そのまわりにある空間そのものに、魔法の影響が及びやすくなっていた…だが、その中でシャリムは…

「ポチさん。」

これから大きなエネルギーが光と一緒に流れて来ます。

だから、わたしの肩をしっかりと掴んで、目を閉じて下さい…」

。そう話して、ポチを落ち着かせると…それから…

「分かった。」

そう言つて、うしろから…両手でシャリムの肩を掴むポチの前で

…

（よし！ちゃんとアクセス出来た。あとは…）

。うしろを振り向かずにはシャリムは

、

「ポチさん。これから…わたし達の身体を元素まで、分解させます。何も見えないし…聞こえなくなると思いますが…わたしの存在を感じ取ってください」

。

うしろから見下ろすポチにそう頼んで…

、

「よくわからないけど…とにかくシャリムを信じていればいいんだ…」

。そう答えるポチに…シャリムが、

「はい！」

返事をしたすぐあとに…シャリムは、自分とポチの身体を…

頭から…両手…胸…腹…両足の順に、自分達の情報を含んだ、多くの光の記号へ変化させると…

その多くの光の記号が飛び散って、周囲にある円柱を構成する多くの光の文字と、一文字一文字…混ざり合い…

そして、分解を示していた円柱を構成する魔法文字が、記号と混ざり合った事で…円柱を構成する多くの小さな光となって…

その多くの小さな光が、次の瞬間…二乗三乗と、何倍も魔法を強化するための光の文字に変化する…

。そして…強化を示す多くの魔法文字で出来た円柱は、天井にある…

ビームライフルの先端のようなものの発射口のところから発射される光と融合して、

ずごおおん！という轟音と共に…目標地点まで転送されるのだった…

。……

シャルム

「……と言う訳だ…」

。そこまでがシャルムの予想した話だったのだが…

そんな途方のない話が簡単に信じるとというのが無理な話だった。

だから2メートル近くまで、シャルムに近づかれてもナインクールは、

「バカな…仮に魔法の影響が強まった事で、奴らが気体レベルまで

分解できたのは、本当だったとしても…ワープなんか出来る訳がない…。

第一、理論的には可能でも…それを実行できるほどの力は、この世には無いと言われているじゃないか」

…
それを実行するには、世界を100回以上滅ぼすほどのパワーが必要だという…魔術師達の見解を持ち出すと…

その見解については、確かにシャルムも

…
「そうだな…確かに理論的に説明できても…それを実行できる力は、この世界にはない…」

だがこの世には、私達にも予測できない不確定な力があるだろう…」

。そう話すのだが…それでもナインクールには

、
「魔法か…だが魔法は、この世界の大気を構成する元素と呼ばれるものを…オレ達の意味で変化させる事で起こるものだ…」

だがワープを起こすには、この世界の大気のエネルギーをすべて使っても…まだ全然足りない事になる…

なのに、それほど大きなエネルギーを…どうやって呼び出したんだ？」

…
その部分が分からないので、説明を求めると…シャルムは

、
「ワープが起こる前と…起こったあとで、何か変化した事はないか？」

。そんな事をナインクールに聞いてくるので

…
「暗闇が急に明るくなった事が…」

。そこまで言つと…

今、背中を向けている方向の先にある…穴の方から光が出ていた事を思いだして…

（待てよ…

ワープする前も、確かに薄暗かったが…うしろの穴の方から光が出ていた事で、視界には困らなかった）

…

そんなナインクールの考えを読んだかのように…シャルムは、

「どうやら思いだしたようだな…」

。

そう言つて、さらにシャルムの、はるか前にある穴について

…

「あそこにある穴の中には、ブラッディーライト《光の血》と呼ばれる…強い魔法エネルギーを含んだ液体が貯蔵^{ちよぞう}されていた…」

。

ワープを起こす前…穴の中で池のように貯^たまっていた、光る液体の正体を話し…

それを聞いたナインクールが、

「それで、転送させるための魔法をエネルギーを増大させた事で…ワープを起こす力の源になったというのか…だがそれだけでは…」

。

そこまで言つと…シャルムも…

「説明がつかないか…

確かに、いくらブラッディーライトで、大きな魔法エネルギーを出せるとしても…

ワープを実行できるほどのパワーなど、あるはずがない…」

ナインクール

「だったらどうして？」

シャルム

「そうだな…理論的には、可能だと思つて作られたワープシユータ
ーだが…」

あきらかに出力不足な事が判明して、過去に一度も使われた事がな
かつたといわれている…

だからシャリムは、自分を光情報に変身させるために作つた文字型
の魔法陣を…自らの情報を加えたブースターへと変化させて、

天井からワープさせるために発射された光のエネルギーを高めたん
だ…

これは、あくまで私の予想だが…その光が及ぶ範囲を圧縮した事を
考えれば…その時のエネルギーは、元のエネルギーの10乗以上に
なつていたと思う…」

シャルムは、つまり…空気を圧縮して発射する空気銃を…

考えの及ばない程の威力に改造して、目標に向けて発射した状態だ
という事を話したが…

それでもナインクールは

「だが、それほどのエネルギーなら…奴ら自身も蒸発されてもおか
しくないはず…」

それに仮に蒸発せずに光と融合したとしても…融合されたさまざま
な物の中から…どうやって自分達の存在を保つつもりだ？

目標地点に着いたら、役目を終えた転送の光と一緒に消滅してしま
う可能性もあるじゃないか…」

。そんな状態から身体の再構成する事など…とても無理ではないかと
話し…

それを聞いたシャルムは

「確かに…だからシャリムは、魔法を使う直前に精霊に呼びかけ…それに応じた精霊を術者とする事で…その問題を解決したんだと思う…」

。だから術者となった精霊が、シャリム達の存在を保存して、再構成もするのだろうと話すと…ナインクールは

、
「バカな…純粹な力の結晶である精霊が、意思を働かせたというのか…」

そんな事は、伝説のエルフでもない限り不可能だ。

それともまさか…あの娘がエルフだって夢物語を話すつもりじゃないだろうな…。」

…
さすがにそれは、とても信じられないと話すので

…
シャルム

「確かにシャリムは、エルフじゃない…」

でもエルフほど強大な力がなくても…シャリムには、精霊と接触できる訳があるんだ…」

。ナインクール

「なんだ？それは…」

シャルム

「シャリムは、ニンフなんだ。」

…
《32話へ続く…》

第32話「炎の転生」フレイムクラスチェンジ

ニンフ…それは物語に登場する半神半人の事である…だが、そんな事実をナインクールが素直に信じる訳がなく

…
「ニンフ…ニンフだと…」

。 ククク…何を言うかと思えば…」

こいつは、お笑いだと笑い声を浮かべて

…
「精霊は、あくまで霊体にすぎず…肉体など持たないんだぞ…。
それで、どうやって子供が生まれる…」

。 人間に取り憑いたとでも言うのか…と笑うナインクールに、シャルムは

…
「不治^{ふじ}の病にかかった幼い娘がいた…」

。 そんな話しを始めて、それを聞いて…

「むっ…」

笑いを止めたナインクールの前で、さらに

…
「その幼い娘が、看取^{みと}る母親の前で、最後の峠^{とうげ}を迎えようとした時…
母親の前に、銀の腕をした男が現れて…」

その男は、セブンスソウルという本の中に宿った精霊の魂の一部を娘の魂に共有させた事で、

幼い娘の魂を人から精霊のものへと転生させて…娘の命を救った…
つまりシャリムは、精霊の魂と人の器を持った半神半人と言う事だ」
。

だからシャルムは、ハーフェルフ並の能力を持っているのだと、理由を話すと…そこから2メートルくらい離れた場所でナインクールは、

「なるほどな…」

言葉で頷いたあとで…さらに

「そういう意味でのニンフか…」

。そう言つて、そのあと…

「ところで…」

手の平を広げた右手をシャルムに突き出して

「お前は誰だ？」

聞いたかった事の本題に入ると…シャルムから

「誰だ…とは？」

予想通りの答えが返つて来たので…そう言つと思っていたナインクールは

「ふざけるな…雰囲気も感じる魔力の大きさも…さつきとは、まるで別物だ」

。静かな怒りを含んだ声で、そう言いながら頭の中で

（そつだ…確かにどこか似ているところがあつたが…ただの他人のそら似だと思つていた。

だが…この感じは、まるで…）

。そう考えているあいだに…右の手首を切ったシャルムが、いつの間にか…そこから流れでる血を使って、自分の周囲に血の円

を描き…

それから数秒も経たないうちに、その血の円から…ボシュッと、炎が燃え上がったので…

それで驚いたナインクールは、

「何!？」

。シャルムに向けていた右手を下げてから…

タン！ターンと、2回バックジャンプすると…

シャルムを焼き尽くした炎の中から…

ナインクールと同じくらいの長身の男の人影が見え始める…

。そして、その男の身体から発生した風で、周囲で燃え上がる炎が消失飛んで…男の姿が明らかになると…

バックジャンプして、穴の近くまで距離をとった…ナインクールの顔に

「バカな…」

どろよう動揺が走っていた…

。シャルムと同じように少し長い銀の髪…

大きくなった黒いローブを着た長身の身体…

何より大人びたその顔が、ナインクールの知っている男と同じ顔だったのだ…

。そして事実を受け入れた時…静かな怒りに震えていたナインクールのオーラが、大きな怒気を含んだ…まがまがしいものに変わり

…「お前は…」

、その言葉のあとに、ワナワナ…と怒りの表情で

「再びオレを裏切るために現れたと言うのか！ヘレルツ！！」

。その魔法使いの男の名前を叫ぶと…

ヘレルは、それとは対象的に…冷静な表情で、

「決着をつけよう…ナインクール…」

。すべての戦いに終止符をうつために…」

そこから6メートルくらい離れた場所にいたナインクールにそう話し…

それを聞いて怒りに満ちたナインクールは、広げた右手の上に炎を…左手の上に球状の小さな竜巻を出現させて…

ヘレルに向かって両手を突き出した事で、その炎と小さな竜巻を組み合わせて…そこから

…

「ふざけるなああ!!」

。炎の竜巻をヘレルに向かって放つ

しかし…その直前にヘレルが突き出した右手のすぐ前に、2メートルくらいの光の縦線まことが出現して…

向かって来る炎を纏まとった螺旋状の風を真つ二つに切り裂くと、

2つに切り裂かれた炎の竜巻は、ヘレルを避けるように…斜め後ろの方に向かって行ったので…

それを見たナインクールは、

「魔法を受け流したのか…チツ…」

。相変わらず魔法というものを知り尽くしてやがる」

驚きの声をあげるが…だが驚いたのは、ヘレルも同様で

…

。（バカな…前より魔法の威力が上がっている…）

。

一体どういう事だ…と、ショックを受けているあいだに…ナインクルから

…
「戦いの最中に考え事など…ふぬけたか！！ヘレルッ！」

。 30センチくらいの大きな火の球が放たれるが…
途中で縦に3つの…10センチくらいの火球に分かれて、ヘレルに
せまって来たので

…
その直前にヘレルは、突き出した右手の前に…

青いガラスの色をした…頭のから膝の下まで守れる程の大きな壁を
出現させて

…
「くっ…」

。 頭部。胸部。腹の下の方を狙ってきた3つの火球を、ドン！ドン！
ドン！と、すべて防ぐが…手の平の前の青いガラス色の壁が消えた
時…

その壁を作ったヘレルの右手に痺れが走る

…
ヘレル

（防御壁を広げた事で、魔法で受ける衝撃が強まったとはいえ…火
球にこれほどの衝撃は受けなかったはずだ…。

至近距離で魔法をつけたからか…いや違う…

。 やはり前より魔法が強くなっているんだ…）

そしてヘレルが話す…

。 「手荒い歓迎のだな…」

その言葉を合図に…最後の戦いの幕があがるのだった…

《...》
°

最終戦へ仕組まれていた強さ…」

「アイストオム！」

「ぐっ！」

…
それからナインクールが放つ魔法を防いでいたヘレルは

…
「ルアイトボオウツ！」

。 「くっ…」

。 右手に作った青いガラス色の壁でナインクールの魔法を受け止めながらも…

いくら何でも復活直後にナインクールの魔力が強まっているのは変だ…と考えて、

（調べてみるか…）

。 サーチと…青い目を紫色の目に変えてナインクールの状態を調べてみると

…
（これは…）

ナインクールに、魔法の威力を五割ほど高める魔法がかかっているを知り

…
（これは、確かに威力は5割ほど上がるが、一定時間がすぎると…

。 疲労が2倍になる短期決戦に向けた魔法のはず…）

。 一体どうして？と…考えたヘレルは、そこで

…
（そうか！？そういう事か！）

。何故その魔法をかけたのか…そのからくりを知って

…
（なら…ここは…）

。突き出した右の手の平の前から…ナインクルの足元を狙って

、
「ルアイトボオウツ！」

。光弾を放ち…その放たれた光弾をバックジャンプしてかわすナインクルに向かつて

、
「お前は、また暴力で人々の誇り^{ほこ}を呼び起こすつもりか？ナインクル！」

。そう叫ぶと…ナインクルは、お返しとばかりにヘレルの胸を狙って、右の手の平の前から光弾を放ち

…
「その何がいけない！

国を強くするのは、国に対する忠誠であり…プライドだ！

友情？対話？今さらそんなものにすぎたところで！マーズの何が変わると言っんだ！！」

。その言葉と一緒に放たれた光弾を、シャルムは光弾を放ったあとの…右手の前に出現させた青いガラス色の壁で防いでから

、
「道は1つじゃない！！」

。 お前の勝手な思い込みを！人々に強制させるな！」

手の平の前の青いガラス色壁を消してから叫ぶと…

そのあと何故か叫んだヘレルに向かって…風が集まっていくので…それを不思議に思ったナインクールが、

（なんだ？）

赤い目を紫色に変えて、その原因を調べると…

あらゆる方向からヘレルの方に向かっていく…流れ雲のようなものが見えて

…

（空気を自分の方に集めているだと？

そうか…確かにこの状態で長期戦になれば…

周りの空気が少なくなるだけでなく…魔法の元となるエネルギーも減少して不利になる事は確かだ…）

。

しかし逆に考えれば…

（流れが奴に集まっているあいだに攻撃すれば…

この流れが追い風になり…オレの有利な展開になるはずだ…）

だから周囲の空気が集まってるあいだに…どれだけヘレルに攻撃できるかが勝利の鍵になる…と考えたナインクールは、身体が大の字になるほど…力いっぱい両手を横に広げて

、

その右の手の平の先に球の形をした雷を…

左の手の平の先に青い光を出現させると…

ヘレルの方に向かって右と左の手の平を重ねる事で、球体の雷と青い光を重ね合わせて

…

「紫電雷光波！」

その叫び声と一緒に、重ねた両手の前から青い稲妻を放つ

！

そして光線のように突き進んだ青い稲妻は、ビシャアアー！と、入り口の近くにいたヘレルに襲いかかるが…何故かそれは…ヘレルの身体をすり抜けていき…

そのヘレルの姿も…徐々《じょじょ》に薄くなつて、消えていくので…

それを穴の近くの場所で見っていたナインクールは

「バカな…ビジョンだと！！」

…と、一応驚いて見せたが…

「なーんてな」

。

そう言つて、両手の前から放射していた青い稲妻を止めて…ヘレルの方に突き出していた両手の構えを解くと…

それから右手の前を光らせて…その光の中から出現させた手の平サイズの火の球を…

ヘレルの幻が消えた場所の左側の方に向かって

、

「ファイヤアボオル！」

。

張り手をするように右手を突き出した事で…その火球を放ち…

それはただ…何もない場所に向かって放ったように見えたが…それがヘレルの左側までいった時…

ドン！！

何かがぶつかった音と共に、うつすらとだが…その場所にヘレルの姿が現れ…

時間が経つにつれ…その姿がハッキリと見え初めると…

さらにナインクールは、追い討ちをかけるように…

手の平の前に火の球を出現させた左手を、また張り手のように押し出した事で

…
「ファイヤアボール！」

、
ヘレルの顔を狙って火球を放ち…

その火球を、ヘレルは顔の前で両手を交差させた事で防いだが…さらにナインクールは

、
「うおおあああ！！撃つべし！撃つべし！撃つべし！」

左手から右手、右手から左手と、火球を出現させた手の平を連続して押し出す事で…何度も火球を撃ち出し…

その火球の連弾がヘレルの…

顔をガードした両腕や胸や腹などの身体のあらゆる場所に直撃し

…
連続して火球の直撃を受けたヘレルの黒いローブは…燃えたりはしなかったものの…

少し焦_こげたりしてボロボロになり…

そんな黒いローブを着たヘレル自身の身体も…何度も直撃を受けた事で物理的なダメージを受けていた…

。そんな不利な状況の中でヘレルが、

（なるほどな…

確かに空気が集まる場所では火が良く燃えるから…

火属性の攻撃をされると…直撃した着衣の場所の発火を防ぐので手いっぱいになる…

おまけに私は大気中の空気を集めている状態だから…物理的なダメージにまで魔力をまわす余裕がない…。だが…）

。そんな考え事をしている中…そのまま攻撃を続けていたナインクールが

「11!12!13!14!じゅうごおっ!」

、
右、左、右と、一気に押し切ろうと…何度も張り手をくり返した事で、

さらに撃ち出す火球を連射させていたが…

しかし…顔をまもろうと両腕を交差させた事で、顔への直撃を防いでいたヘレルの

「そろそろ…タイムリミットだ。」

…という言葉通り…ナインクールの身体に

「うつ…」

一気に疲れが走る…

。そして…先ほどとは対照的な疲れた顔で両手を下ろしたナインクールは

…
(な…何だ?この疲労は…それに…息が…く…苦しい…

くそっ…オレの周囲から奴の方へ空気を移動させたのは、こういう意味があつたのか…

しかし…)

。そう考えている最中に…攻撃が止んだ事で、顔の前で交差させていた両手を下ろしたヘレルに

、
「追い風のうちに私を倒そうと攻撃に集中するあまりに…

自分の状態に気をまわすのがおろそかになってしまったようだな…」

。そう言われた事で

…
ナインクール

（そうか！道理で復活直後にもかかわらず…魔法が冴^さえているとは思っていたが…

。 　いつの間にか魔法を強化する魔法にかかっていたのか…）

。 　その事に気づき…そのあとすぐに

…
「そつだ！あの時…」

。 　（思い返せば…あの少女に紫電雷光波を使ったあとから…調子が上がっていたような気がする…）

、
「まさか!？」

そのまさかを証明するように…入り口の近くにいたヘレルは、

「そう…」

。 　お前は私と戦う前から…すでにハンデを負わされていたんだよ」

。 　ナインクルの考えを察したように…そう答える

…
だがそうなる…1つの疑問が生まれてくる…

、 　だから白い靴を履いたナインクルは

「だが…ハア…いつだ？」

。 　ハア…いつ…魔法にかかった？」

。 　激しい息切れを起こし始めながらも…ヘレルに答えを求めて

…
「良いだろう…とヘレルも

…
「これはあくまで私の推測にすぎないが…」

。

仮説をたてて…当時の状況にせまるのだった…

。

はたして攻撃を強化する魔法をかけたシャリムの目的とは？

そしてそれはヘレルの言うハントと、どんな関係があるのだろうか？

…

《つづく…》

最終戦へ今明かされる勝利への布石

この世界で人は精霊と契約して魔法使いになると…

魔法を使えるようになるが…その変わり身体に使った分だけの疲労が加わる仕組みになっている…。

それゆえ攻撃力を上げる魔法などは、魔法がかかっている時間が過ぎて…元の状態に戻ると…そのぶん多く疲労がかかる欠点があった…。

なので…20メートルはある巨大な円形の穴の前にいたナインクルは…

入り口の近くにいたヘレルに向かって

「だから…ハア…お前は、ハア…それに…気づかなかった…オレを…ハア…利用して…

攻撃力が上がる魔法が…かかっているうちに…ハア…出来るだけ…多くの…魔法を…使わせるように…ハア…挑発…した訳か…」

そう言う…それに対してヘレルは

「そうだ…。復活直後のお前なら…まだ体力は、万全ではない…

だからお前と戦っていた時のシャリムの目的を知った私は…その作戦をそのまま利用させてもらったのさ…。」

そう言うものの…ナインクルにはどうしても、ふに落ちないがあった…。

それは…

「だが…ハア…それなら…オレが…いつ…強化…ハア…の魔法に…かけられ…たか…気づい…たはず…だ…それ…なのに…」

何故気づかなかったのかを息切れしながら話すナインクールに…ヘレルが

「おそらく…シャリムは、効果が徐々《じょじょ》に出てくるように魔法を少し変えたのだろう…」

。そう言うので…それでナインクールは、

（そうか！？

確かに魔法の効果が少しずつ出てくるようにすれば、魔法をかけられた本人も…自分の中で起こっている変化に気づきにくい…

くそっ…まさかサポート魔法の利点を…こんな形で使ってくるなんて…）

。効果が少しずつ出てくる事に比例して、かけられた本人の体調の変化も少しずつである事に気づき…

さらにヘレルに自分の周囲の空気を減らされて…絶対絶命のピンチになっている今の状況に

…

「くそっ…」

そう一言はき捨てて

…

（しかも身体に重力をかける魔法と一緒にかけた事で、強化の魔法をかけた事に意識がいかないようにしたのか…

まさか幼い小娘一人に、ここまで**翻弄**^{ほんろう}されるとは…）

。

入り口の近くでかけられた魔法に二重の意味がある事に気づき…頭の中で嘆^{なげ}いていると…さらにヘレルから

、

「お前は今、始めてシャリムにハメられたと思っているだろうが…実は、お前があの子の魔法にかかったのは…その前に一度あったん

だ…」

。 そう言われて…

ハアハア…と、空気が薄い事に苦しみながらも

…

ナインクール

。 「どついう…事だ？」

離れた場所にいるヘレルに聞くと…

、 そんなつぶやくような小さな声でも聞きとれたのか…ヘレルは

「お前…私が前にシャリム達を逃がすために張^はった雲の弾幕を吹き飛ばした時…

。 いつ私がお前に幻覚を見せる魔法をかけたのか…不思議に思わなかったか？」

。 そう言ったので…ナインクールは、それを聞いて

…

「そう…いえば…」

。

シャルムだった頃のヘレルが畏にかけたのかと思っていたが

…

（気にしなかったけど…確かにそうだ…

。 あの時のヘレルに、オレを幻術にかける様子は一度も無かった…）

なら…あの時ナインクールに幻覚の世界に閉じ込めたのは、誰だったのか？

それはヘレルの言う

「良く思い出してみる…

その前にシャリムの推理を聞いてた時…お前はあの子と一緒にあの

子のオーラを見ていたはずだ…」

。その時の状況を回想する事で…ナインクールは、

「…あつ…」

誰に幻覚を見せられていたのか、始めて気づく…

。ナインクール

（そうだ…確かにあの娘が推理する途中で…

黄色だったオーラが赤い色が混ざったような色に変わっていたような気がする…。

もしかして…あの時オレに暗示をかけるような情報を、あのオーラの光の中に入れていたんじゃないか…

そしてオレがその暗示のようなものによって、幻術にかかっている事に気づくのを遅らせるために…

幻術にかかるまでの時間を予測したあの少女は、一定時間後に雲の弾幕を張るように…事前にヘレルに指示を出していた…）

おそらくそれは、魔力を使い果たしたシャリムが意識を取り戻してから…ナインクール達の元に行くまでの間に話し合われていた作戦じゃないか…と、

サブリミナル効果のようなものを利用したシャリムの作戦について…ナインクールが考えているあいだに、ヘレルから

…「今思えば…あの時から、あの子は気づいていたのかもしれない…常に強気で、相手を自分より格下に見ているために…敵の目論見^{もくろみ}を甘く見がちな、お前の欠点を…」

。そう言われた事で…ナインクールが

…（くそっ！くそっ！くそおお！）

。 欠点を指摘されて、くやしがっているところでヘレルは

… 「お前の敗因は、ただ一つ… シャリム「アリア」アーシュロット…
あの少女にかか関わった事だ…」

。 すべてシャリムの手の平の上であつた事を告げて

… 「そして…」

。 さらにナインクールに向かつて、右手を突き出し

… 「最初の位置取りの時から… お前はもう… 負けていた…」

。 そう言つて… それに気づいたナインクールが、
「!?!?しまつ…」

。 穴の近くに位置するその場所から逃げようとした時… そうさせまい
!と… ヘレルが、
「遅い!」

突き出した右手の手の平の前から、突風を放ち

… その吹きすさぶ突風でナインクールは、うしろの方に広がる巨大な
穴のところまで吹き飛ばされた事で… その穴の中に落下してしまつ
たので…

そこで地面に直撃した時のダメージを少なくするために、残りの魔
力をかき集めて… 物理的なダメージを防ぐバリアのようなものを身
体の周りに張ろうとしたが… その時…

「何!?!」

上の方から…

ヘレルが放ったであろう…30センチくらいの大きな火球がナインクールに向かって迫り…

ナインクールの頭に一瞬、このまま物理的なダメージを防ぐべきか…それとも穴の上から降ってくる火球に備えて対魔法のバリアを張るべきか迷いが生じてしまい…

結局二兎追うものは一兎も得ずという…ことわざが示す通り…その一瞬の迷いが致命的なミスとなり…

何もできないままナインクールは、火球をくらって

…
(ちくしょおお!!)

火の球の炎で黒い魔法衣が燃え上がった事で…
一瞬で全身に火が燃え広がり…火だるまになりながら落下したせいで…

穴の底に広がっている鉄の地面に、後頭部から背中にかけて強打し…絶命するのだった…

そして火球を放つために穴の近くに行ったヘレルが

「終わった…」

そう言つて、ナインクールが落ちた大きな穴に…クルリと背中を向けて

入り口の近くまで行った時…ヘレルの頭の中に

…
《いいえ…まだ終わりではありません…》

多重音声を含んだ女性らしき声が聞こえてくる…。

その声を聞いて…

「誰だ!?!」

ヘレルが後ろを振り向くと…

ナインクールが落ちたはずの大きな穴の中から…何者かの黒い影が

飛び出してくる…。

そして少し距離があるとはいえ…その姿を見たヘレルは、

「バカな…」

…と息を飲んだ。

なぜなら…死んだはずのナインクールがそこにいたのだから…

いや…そのままの姿といえば、それは少し違う…

ナインクールの身体は、どす黒い雲のようなオーラに覆われて…

その背中には…大鷲おおわしのように大きな2枚の黒い翼が生えていた…。

そしてそれを見たヘレルに…多重音声の誰かの声は

《あれこそがケムダー…

マーズを世界を支配できるほどの大国にしたいというナインクールの野望に取り憑つき…純血主義の理想という名の欲望を、あの者に吹きこんだ真の敵です…》

そのナインクールの姿を借りた何者かの名前を告げるのだった…

《つつく…》

最終戦へケムダー……それは不死の身体を持つ者」

忘れてはならない事がある……

理想とは、多くの人々が追い求めるものであり…個人の理想は他の者を傷つける場合もある…

ナインクールの場合もそうだった。

彼は、自分の理想を過信かしんするあまりに他の理想を偽善と呼び…ひき戻せない自分だけの理想の道へ突き進んでしまったのだ…。

もしかしたら、その引き戻せない自分の理想へ進んだ時からナインクールは、ケムダーに取り憑かれていたのかも知れない……

だがそうだとすれば……どうしても分からない事がヘレルにはあった。

だからヘレルは、入り口の近くで

（本に書かれていた伝承では…

ケムダーに取り憑かれた者は、取り憑かれる元となった欲望にふさわしい姿に姿を変えると聞く…

○ だけどインクールには、今まで姿を変える事はなかった…)

何故だ？と考えているところで、また多重音声の女性らしき声が、まるでヘレルの考えを読み取ったかのように

《欲望が理性に勝つた時、憑かれた者はケムダーへと姿を変えます。おそらくあの者は、その強靱な意思で、今までケムダーを意識の底へ封じこめていたのでしょう…》

つまりヘレルがナインクールを倒した事が引き金となつて、ケムダーに身体を乗つとられたのではないかと、ヘレルの意識に伝えてくるので…ヘレルは

、
（そうか…私が倒したせいもあるが…おそらく私が…ナインクルがシャリムの策にかかった事を告げた事で、奴の意識を支えていたプライドが傷つき…

ケムダーに意思を乗っ取られるきっかけを作ってしまったんだ。
くそっ…まさかそれが裏目に出るなんて…）

。そう…かつてヘレルが、ナインクルと戦った時…

ナインクルがケムダーに変わる気配は、一度もなかった。

だからこの推論で正しいはずだ…と考えたヘレルは、8メートルくらい先にいるケムダーの姿を見据えて

…
「さて…これからどうするか…」

。いつ相手に攻撃されるか怯えながらも…これからどう攻撃すべきか考えているところで…例の頭に響く多重音声の声から

…
《ならば先制に、この2つの魔法を使いなさい》

。そう伝えられたあと…急いで！と、急かされるので…ヘレルは、
「…わかった…」

。その言葉を信じて…

、右手の手の平の上に、手の平サイズの小さな竜巻を出現させて

。「我が右手に風の渦…」

。そう言ったあと、今度は…左手の手の平の上に、重力球のような黒っぽい球体を…光と共に出現させて

…

「我が左手に範囲を固定させる重力の証を…」

そして…ケムダーに向けて両手を突き出した事で、重ねた手の平の
前にある2つの魔法を組み合わせ

…
「そして生まれたエリアの風は、触れる者すべてを切り裂く刃とな
る…」

。 ナインクルの姿をしたケムダーの3メートルくらい上空に向けて
、
「ウィンドカッターデイメーション！」

。 いくつもの風の刃が渦巻く2メートル以上もある球体を放ってから
…その2秒後に無詠唱《合体魔法で良く使っセリフを省略して魔法
を使う事》で

…
「ファイヤアストーム」

。 突き出した右の手の平の前の光から…ケムダーに向かう火柱を、
左手の手の平の前の光から…ケムダーに向かつて突き進む螺旋状の
風が巻き込んだ事によって生じた、炎の竜巻を放つ

！
何故？幾つもの、かまいたちで出来た球体を放った2秒後に、炎の
竜巻を放ったのか…

それは…威力が高いが敵に向かうスピードがゆっくりな幾つものか
まいたちで出来た球体に比べて、炎の竜巻は敵に向かう速度が速い
ために…

ケムダーに向かつて突き進んだ炎の竜巻は、ケムダーのいる場所の
手前で、幾つもの風の刃で出来た球体を追い越し…
向かってくる炎の竜巻をかわそうと、背中 of 二枚の黒翼でヒラリと

舞ったケムダーを、

炎の竜巻の上空から来た…幾つものかまいたちで出来た球体が吸い込んで…

かつてナインクールが落ちた後ろの巨大な穴の上まで移動しながら…その中に吸い込まれたケムダーの身体を、幾つもの風の刃で切り刻んでいく

…

そして幾つものかまいたちで出来た球体が、その役目を果たして消えた時…

それらの風の刃に切り刻まれたケムダーの身体が巨大な穴の上空にいたために…ケムダーはその穴の底まで落下して…

穴の底に広がる地面に身体が激突するのだった…

。

だがヘレルには分かっていた…。

これが終わりではない事を…

それから10秒後…そのまま入り口の近くに留ま^{とど}っていたヘレルの青い目の視界に…穴の底から飛び出して来たケムダーの姿が映る…

。

そして穴の前の地面に着地したケムダーの身体には、幾つものものがまいたちで全身を刻まれたせいで…身体のあちこちで傷口が開き…血が流れている…。

特に穴の底に落ちた時の地面にぶつけた頭部の部分は、その時の衝撃で天頂のところが少し失われていた…。

だが全身にあった傷口は…少し時間が経つにつれて、徐々に塞^{ふさ}がり…欠けていた頭部から噴水のような血が飛び出し、それが新たな肉を形成して…その肉が頭部を形成していく…。

そして50秒後には、ケムダーの身体は何一つ傷のない完全な身体へと戻っていた…。

そしてその再生される光景を…

「なっ……」

呆然と見ていた…ヘレルの顔に向けたケムダーの左の人差し指の指先が光った時…

ピツ…と熱いものがヘレルの右の頬をかすめる。

一瞬ヘレルは何があったのか分からなかったが…すぐにそれが光弾が頬をかすったためだと知る。

しかもそれは、ヘレル等が放つ高速の光のエネルギー弾ではない…本当に光の速さで飛ぶ光弾なのだ。

だからいくら腕の立つ魔術師のヘレルでも…

（どうやって勝つんだ？こんな化物に…）

勝てるはずがない…と絶望していたが、そこに

…
《いいえ、今ならまだ勝つ可能性があります》

またあの多重音声のような声がヘレルの頭の中に聞こえて

…
《本来のケムダーの再生能力なら…あの穴の底に落ちたわずかな時間のあいだに身体の傷を完全に回復させて戻ってくるはず…

おそらく変化したばかりなので…まだケムダーとしての力が弱いのでしょう》

。そう伝えてくるので…ヘレルが

、
「だけどそれでも不死身に近い事には変わりはないだろう…。
どうやって倒すんだ？そんなものを…」

。倒しようがないじゃないかと、話すと

…
《方法ならあります》

。

ヘレルの頭の中に聞こえる多重音声の声と共に、ヘレルの１メートル手前の天井近くが光り輝くと…

その光の中から…剣身を下にした形で、白い翼の剣が出現し…天井近くの光の消滅と共に地面に落ちて…剣先が地面に刺さる

…

それを見てヘレルは、

「こ…これは双翼の剣アルウ”イド。

シャリムが召喚した剣が何故こんなところに…」

。

驚いていると…多重音声の小さな声から

、

《すぐに半歩。左に移動しなさい》

。

ヘレルの頭の中に聞こえてくるので…ヘレルはすぐに伝えられた通り左の方へ移動すると…

ヘレルのいた場所のすぐ右側を光が通りすぎる…。

それで、ぞつとしてるあいだに多重音声の声から

…

《今のうちに剣を取りなさい》

。

頭の中に伝えられたヘレルは、

「分かった。」

その返事と共に…剣が刺さった場所まで移動して、右手で剣を引き抜くと…

ヘレルの頭の中に聞こえる…

《さあ貴方が取った剣の刃に精霊すら斬れる神殺しの力を与えましょう》

。

その声と共に、ヘレルの右手に持った双翼の剣の刃に白い光が宿る

の
だ
っ
た
…
°
《
つ
づ
く
…
》

最終戦へ戦いの果てにあるもの…」

まるで子供用から大人用に変わるように…刃や持ち手のところが大きく変わった両翼の剣をヘレルが右手に取った時…ヘレルの頭の中に…
「ん？」

《ここにいては危険だ》と、頭の中に危険信号が走り…右側の方にジャンプすると…その直後に身体の左側を光速の魔法弾がすり抜けたので

…
（そういえば…この姿になってから頭の中が冴^さえている気がするな…）

そんな自分に驚いていると…また多重音声のあの声がヘレルの頭の中に

…
《それはあの子が貴方が元に戻ったら…あなたの潜在能力を最大限に高めるように仕組んだのでしょう》

。シャリムが…シャルムからヘレルへと戻った時に…このような状況になっているのを予想していたのではないかと伝え…さらに

、
《そして…まだ酸素などの元素が貴方の方に集まっている事で…今の戦況は限りなく貴方に有利に働いているのです》

。だからケムダーは、そう何度も魔法を使えない事が…ヘレル頭の中に伝わってくるので…ヘレルは

、
（そうか…ケムダーのところには、魔法を使用する為に必要な元素が少ない…）

それに復活直後のために、身体の回復が本来のものではないらしいし…)

倒すなら今しかないと、ヘレルは思ったが…

だがケムダーのうしろに生えている二対の黒い翼を見て

、
(だがあの黒い羽で逃げられたらどうする？

その有利な条件もすべてが終わりだ…)

。だがそんなヘレルの考えを見通すかのように…多重音声の声で伝わる意思の

。《大丈夫です》

…という励ましと共に、美しい歌声がヘレルの耳に聞こえてくる…

やがてその歌声は部屋中に響き渡り…

その部屋中に響き渡る歌声に召喚された風が竜巻となってケムダーの周りを包み込んでいた…

。そしてその竜巻によってケムダーの身体が…ズタズタに切り裂かれている光景を見て

、
「精霊語による詠唱歌だ！？」

…
(しかも遠隔なのにこの効果とは…

なるほど…これ程の力ならシャルムだった私がヘレルになった瞬間に情報として頭の中に入ってきたシャリムのメッセージも理解できる…)

。精霊の呼び出した竜巻に包み込まれたケムダーの二対の黒い翼は、いくつもの黒い羽となって千切れ…その身体にいくつもの切り傷が

走っていく…

しかし…その時ケムダーが胸の前で両方の腕を交差させた瞬間。

ケムダーの周りに漂^{ただよ}っていた黒いオーラがケムダーをかばうように

…ケムダーの身体を覆^{おお}っていき

…
そしてケムダーの身体を覆った、その黒いオーラが竜巻による斬撃を防ぐ光景を7メートル離れた場所から見て

…
「オーラがシールドになったと！」

驚きを隠せないヘレルに、多重音声から…だんだん美しい声にとま
まっていくな精霊の声から

…
【ですが…防御に集中している今こそチャンスです。10秒後…ケムダーにかけた魔法を解きますから…貴方は、そのタイミングをはかってケムダーの元に駆けよりなさい】

。そう伝えられ…ヘレルは

「分かった」

。6…5…4…3…とタイミングをはかり…残り2秒となった時に
右手に持った剣の刃を左肩の近くに構えながら…ケムダーとの7メ
ートルの距離を一気に縮めるが…竜巻が収^{おさ}まった時…

なんとそれを予想していたかのように…突っ込んでくるヘレルの方
に右手を向けていたケムダーが、

。その右手の人差し指と中指の指先から光速の魔法弾を放つ

だがヘレルもその攻撃を予想していたのか…

至近距離から撃ってきた光速の弾を…それまでに身体の前に七重に
張った青いバリアで防ぐ。

しかしケムダーの突き出した右手の2本の指先から放った魔法弾は…

ヘレルの張った青いバリアをバリンバリンと突き破^{やぶ}っていき…6つ目のバリアを破った後の最後のバリアのところで、やっと魔法弾を相殺する事が出来たが

…
なんとケムダーは、その間に左手までもヘレルの前に突き出していて…

突き出した右手を引つ込めると同時に左手の2本の指先から光速の魔法弾を放ち…その攻撃がヘレルの頭を貫く…

しかし走って来たヘレルの頭からその魔法弾はすり抜け…さらにヘレルは、そこからケムダーの身体までもすり抜けていく…

。そしてケムダーをすり抜けた直後に、そのヘレルが幻となって消えた時

…
「うおおおおお！」

ケムダーの頭上まで飛び上がっていた…ヘレルの両手に持った剣の刃が振り下ろされて…

ケムダーとなったナインクルの頭から股間の下まで身体を引き裂くようにに光の線を描く…

そう…それはシャリムが鎧の剣士を倒す時に使った垂直斬りの一撃だった…

。

そしてそのまま刃が地面に激突した双翼の剣が役目を果たしたように…ヘレルの手元から…フツと消えた時…

ナインクルの正中線走った光は、その光の線からナインクルの傷だらけの身体にどんどん広がって…

ナインクルの身体を覆っていた黒いオーラは、まるで蒸気^{のぼ}が昇るかのように浄化され…

しだいに身体を覆いつくすほどの光となった浄化の光は、ヘレルが青い目を閉じるほどのまばゆい光となる…

そしてヘレルが閉じた目を開いた時…ナインクールの姿はそこになく…
支えを失い崩れ落ちた人間の骨がそこにあるだけだった…。
そつ…いくら凄腕の魔法使いといっても、こんな地下の奥深くで長いあいだ生きていける訳がない

…
とつくにくちはてていたナインクールを生かしていたのは、欲望という化物に与えられた…かりそめの命だったのだ…

。そしてそれを見届けたヘレルの身体もまた…役目を果たしたかのよう
に浄化の光に包まれていく…。

そしてヘレルは、今まで自分を支えてくれた精霊に向かって

…
「ありがとう…君のおかげで友達を本当の姿に戻す事が出来たよ。」
…とお礼を言つて、もはや女性的な美しい声となった精霊の声が

…
【そうですか…私の正体にも気づいたのですね】

。ヘレルの頭の中に語りかける通り…ヘレルは

、
「ああ…セブンスソウルの7番目に記された歌の精霊…」
(そしてキミはシャリムの…)

精霊の声が聞こえた時からシャリムが傍そばにいるような安心感があったのは、そのためだったのだと確信し

…
「これから私はどうなる…」

。精霊の声を聞こうとに意思を傾けると

…

【これから貴方は生まれ変わるのです。
そこにある魂と一緒に】

…
そう頭の中に聞こえたとしてもヘレルには

、
「そこに…って言われても何もないぞ…」

。
目の前にはナインクールだった者の骨があるだけだ…。
しかしヘレルの頭の中に響く精霊の声が

…

【ならよく気を傾けて感じなさい…
それは貴方の傍に確かにあるはずです】

。

そう伝えてくるので…伝わるまま目を閉じて…魔法を使う時のように精神を集中させると…

自分の胸の方に何やらぼかぼかとあたたかいものを感じたので…そこで閉じた目を開くと…

なんとヘレルの胸の前に小さな光が輝いているではないか…

「これは…」

浄化の光に包まれた自分の前に突然現れた光に戸惑^{とまじ}うヘレルに…精霊の声は

、

【それは…ナインクールの魂…

この後…貴方とナインクールの魂は共に浄化され…1つの存在となるのです】

。

そうヘレルの頭の中に精霊の声が伝わり…

胸の前にあるナインクールの魂の光をいたわるように…そっと両の手の手平の間に包み込んだヘレルの

、

「つまり私とナインクールは一人の存在となって生まれ変わるという事か…」

その言葉通り…精霊の声は、

【そうです。

もしかしたらその時…またもう一人の私に会うかも知れませんね…】

その時はよろしくお願いしますね…と強くなった身体の周りの浄化の光によつて今にも昇華しょうかしそうなヘレルに伝えて…ヘレルの

「ありがとう…」

その言葉を最後に…浄化の光によつて昇華されたヘレルとナインクールは、二対の光の龍となって絡みからあいながら天井へと駆け昇り…やがてその姿が薄くなつていきながらも天井近くまで駆け昇つた二対の龍の光は…フツと、この世界から消えるのだった…

歌が聞こえる…

セブンスソウルという魔法の本に封じられた七番目の精霊は輪廻転生を司り…

その歌声は、あらゆる者の魂を清めるといふ…

精霊の歌声によつて清められ…無垢むくな魂となつた2つの魂は…

やがて1つの魂となつて、いつかシャリムとポチの前に現れるのだろうか…

それが十年先の話となるか…百年の先の話となるか…まだ誰にも分からない…

《最終話へ…》

最終話〈予定調和〉

周囲12メートル四方はあろうか…

薄暗い部屋床の中心に3メートルはある大きな五芒星が描かれている…

その赤い五芒星の上に立っていた星宮という紫色のローブを着た初老の男が

…

「ナインクールの気配が消えた…」

。

そう話すと…青いローブを着たフェルゼという銀髪の青年も

…

「コボルトと子供達の気配も消えたようです」

。

そう答え…それを聞いた星宮が

、

「相打ちか…だがどちらにしろ助かった…」

これで思惑通りに事が進む…」

。

ニヤリと笑みを浮かべると…フェルゼの

「ええ…本当にこちらの思惑通りです」

。

その言葉と共に星宮の背中から心臓を射抜くように…ひんやりとした何かが貫く…

「こ…これは…」

何の真似だ…フェルゼエ！」

。

剣を背後から突かれ…しぼり出すように声を出す星宮は、フェルゼに

、

「ここを守る兵士達が少ない事を本当にあなたの思惑だけの事だと思っていたのですか？」

、
そう言われて…青ざめた顔に、ハッとした表情が宿り…

「ま…まさか…」

。その答えを言おうとした途端^{とたん}フェルゼに

、
「冥土^{めいど}の土産^{みやげ}に覚えておく事です。

他人を騙^{だま}して落^おとしいれようとする者は、常に他の誰かにおとしいれられる…」

。背後から両手に持った剣を引き抜かれた事で…

胸から吹き出るように血が流れ…仰向けに倒れる星宮を青く冷たい目で見下ろしたフェルゼは

、
「これを因果応報と言つのですよ…」

。そう言つて…人を騙^{むく}そうとした者の報いともいえる哀れな結末を見届けるのだった…

そして薄暗い中で赤く光る五芒星の中で、仰向けに倒れる星宮の死を見届けたフェルゼの部屋に…

やがて部屋の扉が開く音と共に、黒いローブを着た老人が入って来る…

。そしてフェルゼの背後に近づいて来た、その老人が

…
「ナインクルの復活とその滅亡…すべては、あの占い師の予言通りとなったな…」

。そう声をかけると…フェルゼも近づいて来る老人の気配を背中に感じながら

…「魔導士ヘレルが復活し…ナインクールと共ににはてるだろう…
…ニンフを失ったのは惜しいですが…ナインクールの事を考えれば
安い買い物です。

。予言通りに子供達をおよがせた甲斐がありましたよ」

そう話し…それを聞いた黒いローブを来た老人こと元老の一人は、
胸から溢れでる血の海の上で、仰向けに倒れている星宮の死体を見
ながら

…「死んだこの男が責任を取ってくれるおかげで、この神殿を放棄す
る理由が出来たしな…

。評判の良くないこのパンテオンの噂を終結させるにはいい機会だろ
う…」

。だが元老には、どうしても気がかりな事があった。
それは…

（予言の最後でダーナは、過去の因果が消えた時…それを見届けた
神の子は新たな旅路を歩むだろうと言っていた…。

しかし今ニンフの気配は、ここからは感じられない…だとすればこ
の予言が意味する事は一体…）

。銀の腕のノーデンスと魔眼のバロールに並ぶ東方より来たりし三賢
人の一人にして…この国の皇帝直属の占星術士ダーナ…

予言を読み取れなかった元老は…その真意は、はかりしれないと…
フェルゼのうしろから天井を見上げるのだった…

。 あれから…一月は経っただろうか…
移転装置のある地下の奥深くに、松明たいまつのような物を持ちながら足を踏み入れる2つの影があつた…

。 一人は松明を左手に持った190センチくらいのの金色の短髪をした男で…

大柄な体格に金の彩色豊かな黒い鎧を着ていて…まさに皇帝と呼ぶにふさわしい風格をその身にまとうており…

もう一人は、シャリムと歳が変わらない小柄こがらな少女で、外行きだからだろうか…

。 少年達が着るような服装で身をかためていた…

松明を左手に持った皇帝らしき男が移転装置の中に足を踏み入れて

… 「ここか…お前が夢に出てきたと言った場所は…」

。 皇女らしき少女に声をかけると…

その金の髪の少女は、その先にある巨大な穴を見ながら

…

「ええ…確かに夢の中で…ここで白い魔法衣を着た魔法使いと、黒いローブを着た魔法使いが激しい戦いをくりひろげていた光景が映つたのです」

。 それを聞いた皇帝らしき男が、

「そうか…」

左手に持った松明でその先を照らすと…なんとその先に人形らしき物が落ちていたので…

その隣で立ち止まっていた肩に届くくらい髪の長い少女が、その場

所まで進んでから…しゃがんで、その銀髪の人形を両手で抱えあげる…

そしてその人形から香る…ほのかの香辛料のニオイを感じた少女が、その口元に緑色の目を向けると

…
「カレー？」

それを見つけた同時にある感情が少女の中に溢れてくる…。
そんな少女の変化に気づいたのか…

松明を持った皇帝らしき大柄の男が少女に近づいて

、
「なぜ泣く？」

少女に声をかけると…しゃがんだ少女は人形を抱えたまま…

「わかりません…」。

でも何故か頑張ったねって…この人形を褒めてあげたいんです」

かつてヘレルの魂が宿っていたその人形を労るように涙を流すのだ
った…

《fin》

最終話〈予定調和〉（後書き）

正直…全部書き直してから最終回にしたかったのですが…
すいません（涙）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0306f/>

フレイムファンタジー

2010年10月19日04時18分発行